

# 桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏

課題番号 16520106

平成16年度～平成19年度科学研究費補助金  
(基盤研究 (C)) 研究成果報告書

平成 20 年 5 月

研究代表者 田中 仁  
鳥取大学地域学部教授

目次

はしがき

一

研究組織・研究経費

二

研究成果

一

第一章 仏光寺『御日記』の香川景樹

三

仏光寺『御日記』の香川景樹

五

―文化六年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

二一

―文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

三七

―文政元年から五年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

五五

―文政六年から八年まで、文政十年から天保十三年まで―

仏光寺『御日記』の香川景樹

七八

―天保十四年から嘉永四年まで―

第二章 桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏

九九

柳下清老と真宗仏光寺派

一〇一

柏原正寿尼と常楽寺恵岳

一二四

―桂園派形成の一事例―

〔付録〕

鳥取県立  
博物館所蔵

香川景樹の手紙一通

― 『花の跡』の成立時期について―

一五三

一五五

## はしがき

この冊子は、研究課題「桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏」にたいして、平成十六年から十九年までの四年間に与えられた科学研究費補助金による調査研究の概要（研究組織、研究経費、研究発表）と、研究成果として随時公表した報告をまとめたものである。ただし、第一章の最初においた「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化六年まで―」と、付録として末尾に付した「鳥取県立博物館所蔵香川景樹の手紙一通―『花の跡』の成立時期について―」は、補助金交付以前の調査にもとづくものである。

前者の「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化六年まで―」は、その冒頭に記したように、景樹の「歌日記」の「年月日付け」の検証と景樹伝の新事実発掘を目的として、仏光寺『御日記』に見える景樹にかかわる記事を抄出し、「歌日記」と比較対照してみたものである。この調査の過程で、「桂園派の形成と展開」の少なからぬ部分は、「真宗仏光寺派寺院の僧侶や門徒、そしてその関係者が景樹の和歌や歌論を受け入れていったこと」と言い換えられるのではないかと思うにいたった。その点で本研究の出発点にも基礎にもなった報告である。

後者の「鳥取県立博物館所蔵香川景樹の手紙一通―『花の跡』の成立時期について―」は、十年以前に公表したものである。『御日記』とはじめとする仏光寺所蔵資料に接するより前のことで、そのため本編の諸報告との間には種々の不統一があるが、本山仏光寺の第二十三代門主随応上人が景樹ほかの人々をともなつて催した嵐山遊覧の年次にかかわる考察をふくむのでここに収録した。

なお、収録した報告は全編にわたって誤字脱字をふくむ表現上の誤りやわかりにくい箇所を改め、調査の粗漏を補い、考察の誤りを正した。また、写真を数点付け足した。

田中 仁

## 研究組織

研究代表者：田中 仁（鳥取大学地域学部教授）

## 交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成16年度	1,600,000	0	1,600,000
平成17年度	700,000	0	700,000
平成18年度	700,000	0	700,000
平成19年度	700,000	210,000	910,000
	3,700,000	210,000	3,910,000

## 研究発表

### （1）雑誌論文

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹

—文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第1巻第1号

平成16年 121-135

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹 —文政元年から五年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第2巻第1号

平成17年 119-133

田中 仁「柳下清老と真宗仏光寺派」

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第3巻第3号

平成19年 363-384

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹

—文政六年から八年まで、文政十年から天保十三年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第4巻第1号

平成19年 139-160

田中 仁「柏原正寿尼と常楽寺恵岳 —桂園派形成の一事例—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第4巻第2号

平成19年 228-253

田中 仁「仏光寺『御日記』の香川景樹 —天保十四年から嘉永四年まで—

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 査読なし 第4巻第3号

平成20年 155-174

### （2）学会発表

なし

### （3）図書

なし

研  
究  
成  
果

第一章 仏光寺『御日記』の香川景樹

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——文化六年まで——

田中 仁

## 一 はじめに

小稿の目的は次の二つである。

〔1〕 仏光寺所蔵の仏光寺『御日記』の香川景樹関係記事と香川景樹「歌日記」<sup>(1)</sup>のそれと対応する記事を比較し、その結果を報告する。

〔2〕 仏光寺『御日記』によって判明した、仏光寺にかかわる景樹の伝記的事実を紹介する。

〔1〕で主として注意したいのは、「歌日記」の日付の検証である。

香川景樹研究にとって「歌日記」はいうまでもなく必須の基本資料である。しかし、その日付は時に疑わしく、慎重に確認したうえでなければ、特に伝記研究には使いにくい場合がある。この問題については、以前、「歌日記」の「年づけ」を『桂園聚葉』によって検証した際にふれた<sup>(2)</sup>。「年づけ」に疑問があることは分かっているも、寛政十二年(一八〇〇)から天保十四年(一八四三)にわたる膨大な日記であって、その正誤の確認は容易ではなく、景樹やその門人、知友等の調査・研究にかかわるものが、それぞれ可能な範囲内で検証し、その結果を総合するほかはない。その「可能な範囲内」での試みの一つとして『桂園聚葉』との対照を行ったのであるが、今回は仏光寺『御日記』のうち文化六年までとの対照を試みる。

〔2〕は、『御日記』の文化六年までに見える、景樹関係記事の

紹介である。これによって、少なくとも小稿でとりあげた文化六年までについては、景樹の伝記を書き換えなければならぬほどの事実は見いだせなかったが、「歌日記」もふくめて従来知られている資料には出ていない多少の事実がふくまれている。

文化六年までとするのは、現在までに見るを得たのがそこまでの事情もあるが、一つには、『花の跡』の嵐山遊覧が文化六年四月十日のことと推測される<sup>(3)</sup>からである。結局『御日記』のこの日に、嵐山遊覧の記事はなかったが、このことについては別の機会に述べる。

## 二 仏光寺『御日記』について

本題に入る前に、まず仏光寺『御日記』について、次に仏光寺と景樹との関係について略述しておく。

仏光寺は、京都市下京区にある真宗仏光寺派の本山で、『御日記』はその仏光寺の日誌である。天明八年(一七八八)正月晦日の天明大火当日の記述から始まり、澁谷有教「佛光寺御日記」出版にあたって<sup>(4)</sup>によれば昭和初期まで百数十年分が残っているという。

この日記を誰が書き、誰が編集して現在見られる形態になったのか、現時点では未詳と言わざるを得ない。三月二十五日の記事で終わっている享和二年分に、本文のほとんど全部をしめる筆跡とは異なる筆跡で、「写真1」のように、

相模介殿、御日記此所迄御付置被成候而、此末不相知候事。

という識語があり、正月一日、二日だけの文化二年、正月十四日までで終わっている同四年にも、それぞれの年の末尾に右と同筆ではとんど同文の識語が見られる。これらの識語によって、「相模介」なる人物、おそらく二条家侍で仏光寺に付属されていた小幡徳清が、この頃の『御日記』に深く関与していることはわかる。

しかし、その徳清の記した「御日記」が現在見られる『御日記』とどのような関係にあるのか明らかではない。享和二年の『御日記』の巻頭には重要事項を抄出した、その冒頭を〔写真2〕として掲出するような目録が付けられているが、その筆者は筆跡の特徴が共通していることから識語の筆者と同一人物と思われる。これに対して日記本文は前記のとおりほとんど全部、〔写真3〕のようにそれとは明らかに別の筆跡である。したがって、一見したところでは日記本文の筆者が相模介であり、それとは別の人物がそれを読んで目録を作って識語も記した、と考えられる。しかし、日記本文の中に一部分ではあるが識語・目録と同じ筆跡が見られるし、日記本文には含まれていない情報がそれと対応する目録の条文の方には見える場合もあって、ことは単純ではない。

『御日記』と類似の記録である『妙法院日次記』について、「多数の筆者が参加しているが、ある程度、時期を区切って坊官により整理し直されており、直接に記録した本人の自筆は少ないものと思われる」<sup>(5)</sup>と言われている。直接に記録されたものではなく、元になる記録があつてそれを整理し清書したものである、という点では、『御日記』もこれと同じであつたかもしれない。日記本文は小幡徳義が記録を整理編集して記したものであり、その後に、仏光寺に仕える誰かが目録を作つて識語を付けた、その際、元になつた記録も参照し、徳清は採録しなかつた情報を付加することもあつた。

想像をめぐらせるなら『御日記』享和二年・文化二年・同四年はこのようなにして成立したものであろうが、確かなことはわからない。ただ、成立の過程はどうであれ、その資料としての価値の大きさは疑うべくもない。それについては、たとえば次のように言われている。

渋谷文庫と称される土蔵中に、多くの古文書・古記録が裏蔵されている。それらはおもに天明八年（一七八八）正月の京都大火以降に筆記されたものであるが、中には罹災を免れた近世前期の文書も含まれている。いずれにしても近世の佛光寺を具体的に知る貴重な史料群である。その中でもっとも注目されるのは「御日記」であろう。一般に江戸時代の諸本山では、克明な日々の記録が綴り続けられたが、佛光寺においても大火直後の分から百数十年におよぶ膨大な冊子が遺されている。そこには御堂や寺内のことはもとより、門主の日常生活や交際に至るまでのが記され、まさしく質量ともに佛光寺史の基本史料といえるのである。  
（『佛光寺の歴史と信仰』<sup>(6)</sup>）

現在、右の解説にある天明大火の年の天明八年から寛政十二年（一八〇〇）までの十一冊が、『佛光寺御日記』として次のように翻刻されている。第七巻までが渋谷有教第二十九世門主、第八巻以降が渋谷曉眞現門主の編で、いずれも本山佛光寺刊である。

第一巻	天明八年	昭和六一年一月
第二巻	天明九年（寛政元年）	昭和六二年一月
第三巻	寛政二年	昭和六三年一月
第四巻	寛政五年	平成元年一月
第五巻	寛政六年	平成二年八月
第六巻	寛政七年	平成三年三月

第七卷	寛政十年	平成四年三月
第八卷	寛政十一年	平成十一年三月
第九卷	寛政十二年	平成十二年八月
第十卷(補遺Ⅰ)	寛政八年	平成十三年一〇月
第十一卷(補遺Ⅱ)	寛政九年	平成十四年八月

現在引き続き刊行の準備が進められており、その作業にかかわって『御日記』にふれる機会も与えられ少しずつ繙読しているとあるが、読みすすむにつれて仏光寺と景樹との密接な関係がうかびあがってくる。

### 三 仏光寺と香川景樹 その一

景樹が真宗仏光寺派二十三世門主随応上人の愛顧を受けて仏光寺に出入りしていたことは従来から知られていた<sup>(7)</sup>。景樹自身、「歌日記」文化三年(一八〇六)正月九日に、次のように記している<sup>(8)</sup>。「仏光寺のおほん君」(二行目)、「みこのかみ(御兄)」(七行目)、「みはらから」(二三行目)は随応上人、「正行院殿」(二行目)は随応上人の弟の専應連枝である。真宗において「連枝」は門主の兄弟をいう。「有栖川中務卿の宮」(一二行目)は有栖川宮織仁親王、「なね」(同)は「あね」の誤りで、知足院宮であろう。『織仁親王行実』<sup>(9)</sup>によれば、名は経子(ふみこ)。兼宮、改知宮。織仁親王の兄の音仁親王の一女であるが、祖父の職仁親王の実子として仏光寺二十二世門主順如上人の室となった。

帰り来たれば四つのかね聞ゆ。けふしもなきほどにさしあはせて、仏光寺のおほん君のみはらから正行院殿入らせ給ひて、おのれが帰ってくるをたそがれの頃まで待ちあわたらせ給ひつるとて、御歌残しおかせたり。

せこが為め妹がたちぬ唐衣きませとのみも思ふ也けり

こは、あすなん殿のおほんつどひの日なれば、おのれにもまうのぼりまゐらせよと、みこのかみのあふせごとをつたへむとて物し給ひつるなれば、そのみこころのみうたなりけり。御かへしのこころ

から衣かへすくもかしこくてかへしまつらんことのはもなし

此のみはらからは、有栖川中務卿の宮のなねのみこ知足院の宮の御腹にておましくければ、此の道も中務卿の宮のみをしへを受けさせ給へれど、そはおほやげさまにて、道の八十隈とひ明らめたまはん事などはさらにあらせたまはねば、いかでとおぼす御こころにはいとあかぬことに嘆かせ給ひて、うちくおのれを召させ給へる也。かねては伴蒿蹊といふ世に名高き道知り人を、月ごとに召して御つどひのむしろも開かせ給へりし。さるに此の翁この頃いたく老いほれて、まうのぼるべくもあらずなりにたる、そのかはりにとや思しけん、又かの翁物し奉りしほどにも、ことさらにはれくしう世におし出し給はんずるみ歌をば、ひそかなる御使にて己にたゞさせ、よしあし極め明らかし給へる事年頃なりければ、己をよしと思ほしてせちにはめさせ給へるにや、知らずかし。

随応上人は、公には有栖川宮の門人であったが、実質的な指導は伴蒿蹊から受けていた。しかし、老耄のため景樹に替わった。実は蒿蹊健在のころから、特に重要な歌は景樹が添削していたのだが、それが御意になつて、「せちにはめさせ給へる」(熱心にお呼び寄せになる)ことになつたのであろうか、というのである。『御日記』は文化三年分を欠いており、応専連枝の景樹訪問の事実を確認する

ことはできないが、随応上人の有栖川宮入門については、寛政七年（一七九五）分に、四月二十日、二十一日の二日にわたつて詳しく書き留められている。まず、二十日は次の如くであつた(10)。

一、有栖川様より御使 山本大炊

御門跡様和歌御門入之義、此間中御内儀より御頼之趣、御承知被成、今日目出度、御題被進候旨也。

取次 悟御吸物御酒出 御直

答。

寄道祝 御折紙ニ御染筆遊し被進。

此間中奥向より御内談之次第、左之通。

覚

一、御題兼而御贈入之事。

一、御門入為御礼御出、其已前別紙之品、以御使御進上之事。

一、御出之時者、御対面御盃事在之、尤兼而御贈入御題之和歌、豎詠草ニ御認御持参之事。

但御出無之而も不苦、然ル時ハ、以御使右豎詠

草御伺之事。

一、詠草認様別紙之通也。尤常々者、横四ツ折ニ被認候事。

御門入

干鯛 一箱

綿 三把

御樽代金 五百疋

年頭八朔

干鯛 一箱

御樽代金 三百疋

暑寒

御菓子類登 何ニ而も

右御内談之義、御門入御樽代等者、一度之儀ニ候間、右之趣可被進、年朔義ハ百疋ツ、被進度之旨、御承知被成候。尤御内々奥向より御取計ニ付、和歌方役人江御付届被遣候ニ不及御相对也。

翌二十一日、使者稲田隱岐守が、熨斗目半上下で、随応上人の「寄道祝」の詠草、および取り決めどおりの干鯛一箱・綿三把・御樽代金五百疋を持参した。

その後、上人が有栖川宮家の門人として和歌にかかわっていることを示す記事が『御日記』の所々に見える。一例をあげる。

一、有栖川様江和歌御門弟ニ付、当年より八朔部祝儀御肴料金百疋被進之。但奥より文使ニ而八朔ニ参候。

(寛政七年七月二十九日)

次のように有栖川宮家の歌会始に和歌を求められてもいる。

一、有栖川宮様より左之通

来ル十五日御家和歌御会始被催候。御詠出之義頼思召候。尤当日午刻迄ニ御詠進被進候様頼思召候事。

中務卿宮御使

島津弾正

二月

右御題 短冊ニ

松竹増春色 来ル十五日

(寛政十一年二月七日)

「歌日記」にいう伴蒿蹊の招聘も、『御日記』に出ている。その最初は寛政二年（一七九〇）二月十六日の次のような記事である。

一、伴蒿蹊、歌道委敷もの、由、御聞及ニ付、被召度思召、帯刀応対ニ参。

景樹の「歌日記」の記述からは、まず随応上人の有栖川宮への入門のことがあり、それに飽き足りず蒿蹊が招かれた、そしてその蒿蹊が年老いたので景樹と交替した、といった印象を受ける。しかし、『御日記』によるなら、蒿蹊招聘は有栖川宮への入門の五年前のことである。そして「歌日記」によればその蒿蹊招聘の流をうけて景樹が呼ばれた。「歌日記」は有栖川宮入門を「おほやげさま」であり、自分が召されたのは「うちく」のことだと言っているけれど、こうした経緯をみると、たしかに有栖川宮家への入門は、随応上人にとつて蒿蹊・景樹招聘とは別種の事柄であつたように思われる。ではなぜ随応上人は有栖川宮に入門しなければならなかつたのか、別途に考察が必要であろうが、それはさておいて、上人の嗣子二十四世門主の随念上人もまた景樹に就いた。その入門に関して、『またぬ青葉』に次のようにある（11）。冒頭の「十四日」は文政三年（一八二〇）四月十三日である。

十四日、今日俄に仏光寺の君、いらせ給ふべしとて、法橋せいくわんなど、これかれ来つどひて、のゝしるめり。

（中略）

ひつじの時ばかり、新門主の君ともなはせて、いらせ給ふ。

（中略）

御はらから正行院の君も、みこ鶴丸君つれて、したがはせ給へり。新門主も鶴丸君も、おひすがひたる御齡に、今はおとなだち給うれば、あらためて我道に入らせ給ふべき名簿うち

く今日ついでに、とりおこなはせんとや。御坐の間いとせばきに、ひろぶたやうのもの、人々はこびまかなひわづらぶめり。やをらかづけ給ふ御袖に、いたゞくかしら打もまるぶべし。今より世中の曲みたる道をふみかへて、そのの岡べによせおき侍らば、むげにおのれらごとき愚昧の入道には、よもなし給はじなど、打ゑまひ宣はず。すべてかしこしともかしこう、おほけなきわざなりや。

「仏光寺の君」は随応上人、「新門主の君」が随念上人である。そして、随念上人自身の次のような歌も伝えられている。「真導」は上人の諱である。

○真宗法主真導君より給はりける

こたび善敬に大かたならぬ事のみをおほせて

本よりもたのむ誓ひはちかひにてうき世のことは君にまかせん

（『東塙亭話』（12））

#### 四 仏光寺と香川景樹 その二

随応・随念の二代にわたる門主、そして応専連枝と景樹との関係は、上述のようにきわめて密接であつた。しかし、『御日記』を見ると、景樹と仏光寺とのかわりはそのみにとどまらないことがわかる。『御日記』に景樹が頻出するというわけではない。『御日記』が景樹にふれる回数、は、「歌日記」が仏光寺にふれるのにくらべてはるかに少ない（13）。『御日記』は、門主の日常に逐一ふれるわけではないし、あくまでも寺院の日誌であつて、法務・寺務については詳しくとも、いわば俗事に属する和歌にかかわる事柄など記さないのが原則であつたのではないかと思われる。重要なのは景樹自身が登場する回数ではなく、「歌日記」に見える人物や寺院が次々に御

日記』に出てくる、ということである。

たとえば、景樹の友人で、神道に基づく独自の歌論が景樹に影響をあたえたと言われている富士谷御杖（文政六年（一八二三）没。五十六歳）である。御杖は、次のように「北辺」「御杖ぬし」として、またほかに「富士谷御杖」「富士谷氏」として「歌日記」に合計五回出ている。

十九日。正阿弥にて北辺会。松五株あり

子日せし松のいつもといつもくかはらぬ千世の陰にくらさん

（略）

菊の花に御杖ぬし

とかけるかたはらに

移りけんころとは菊の花なれどわがきぬうつにいとまなきはや  
（文化十四年三月）

『御日記』において御杖は、柳川藩立花家の京都留守居役という役柄上であろう、次に掲げられるようにしばしば使者として仏光寺を訪れている。また、仏光寺からの使者を、取次役として応接している。なお、富士屋の「屋」は原本のままである。「富士谷」は現在「ふじたに」と読まれているが、仏光寺においては「ふじや」と認識されていたらしい。

一、立花左近将監殿 富士屋千右衛門より左近将監殿御子息龜

寿殿事、如願嫡子成被仰出候、御吹聴。

御使 主計

一、松平越後守殿へ御歎

御太刀 一腰

取次 平ノ兵四郎

御馬代 一枚

一、立花左近殿同人御歎御口上

取次 藤谷仙右衛門

（寛政十一年十二月二十九日）

江戸における桂園派の主要歌人の一人である児山紀成もまた、仏光寺とのかわりを有する一人であった。『御日記』寛政二年（一七九〇）六月十日に、

一、庄野宿早川嘉十郎次男田藏事、兼而依頼

御側へ出勤今日より被召出、勇と改名。十二才実十四。

とある早川勇が紀成である。

紀成について、現在普通に知られているのは次のようなことである。

〔生没〕安永六年（一七七七）生、天保十一年（一八四〇）

四月二十七日没。六十四歳。墓、江戸駒込栄松院。〔名号〕初

め早川氏。名、紀成。通称、勇・直次郎・新八郎・勝之進。

号、梅園、愛松軒・四生。法号、桂心院還誉真解居士。〔家系〕

早川直記の男。幕臣児山可至の養子。〔経歴〕伊勢鈴鹿郡庄野

に生まれる。文化三年（一八〇六）江戸に出、蝦夷地御用掛

夏目長左衛門に抱えられ択捉島へ渡った。同十一年、児山氏

の養子になり、江戸目白台に住した。天保十一年隠居。初め

伴蒿蹊・有賀長収に国学・和歌を学び、のち香川景樹の門に

入った。景樹の江戸下向は紀成を頼つてのものという。

〔国書人名辞典〕（14）

児山紀成は初め早川氏であったことが知られているうえに、『御日記』の早川田藏と、出生地、生年、勇という通称が一致する。早川

田藏、改名して早川勇が児山紀成その人であることは確実であろう。井上通泰「桂園叢話 第一篇」(15)に、紀成について、「前後二妻あり、前妻は父方の叔父松村采女の養女なり、名をときと云ふ、文政十二年十一月没す、采女は京師佛光寺の臣なり、紀成も若きほど佛光寺に仕へたりしことありと云ふ」とあるのは事実であったことが確かめられたわけである。松村采女の名も『御日記』に見える。次に引く「歌日記」のように、「正行院の君」すなわち応專連枝の内意を紀成が景樹に伝えたというのも、右のような経歴からしてごく自然なことであろう。

正行院の君、いとのだやかなる日を見つくるひ給ひて御輿入らせらるべうなど、うちくおほせごとありつることとを、紀成ぬしほのめかしおきつれば、待ち奉らずしもあらぬに、きのふけふことさらにのどやぎて見たしもいとおもしろかりけるによめる

君くやとけふも岡辺の松ばらに立ちくらしける春霞かな

〔歌日記〕文化二年二月四日

御杖にせよ紀成にせよ、仏光寺とのこうしたかかわりが、直接景樹と相知る、あるいは親交を深める機縁になったかどうか確認はできないが、その可能性はある。

## 五 仏光寺と香川景樹 その三

真宗の門跡寺院である仏光寺は、庶民とかかわるその一方で、公家・大名との交渉も有していた。たとえば、先に引いた「歌日記」文化四年正月九日にもあったように、随応上人の母の知足院宮は有栖川宮織仁親王の姉であったし、室の聞名信院は、伊勢国安濃津の藤堂和泉守高嶺(たかさと)の一女であった。いちいち引かないけれ

ど、有栖川宮家、藤堂家ともに『御日記』に頻出する。「歌日記」享和三年(一八〇三)の、

二月二日。勢州藤堂家会始。兼題

春風来海上

大島の鳴戸を春やわたるらん朝おろし社あらたまりけれ

のような、藤堂家と景樹との関係は、その縁によるもの、さらに次のような伊賀国名張の藤堂家との関係もまた、仏光寺を仲立ちとして生じたのではないかと考えられる。

伊賀名張藤堂宮内室含子へ歌の道とき示し給ふうち  
含子 来て見れば庭の呉竹打なびき野への蛙のこゑもき  
こゆる いつよりか思ひしことの今日こそは叶ひしこと  
の嬉しかりけれとよみて出されたる、かたはらに書付給  
へる歌

おもふこといへば答へし山びこの高きこゑこそうれしかりけれ

わが道にやがて靡きし呉竹のよにあやしきは契なりけり

〔歌日記〕文化十二年四月。日未詳

『御日記』には「歌日記」に出てくる僧や寺院も多く載っている。「歌日記」享和元年(一八〇二)正月六日に次のように見えて以後もしばしば登場する恵岳は、つづいて引く『御日記』にあるように仏光寺の御堂衆(16)であった。

六日。去し冬、易得亭の翁より、やつがれが歌のふりふるくみやびにたり、かゝるさまよみいつる人もいできにけれ、同じ道に思ひ入りし身のうれしさにたへぬ事をしもふりはへい

をひつたへてよと、恵岳法師をしてその事のみいひおこされた  
に(後略)

(「歌日記」享和元年一月六日)

一、御堂衆御礼。於御書院御盃松台御着被下。

入真寺 則元 恵岳 栄雲 円教 善明寺

(「御日記」寛政十年一月一日)

「歌日記」の「易得亭」すなわち伴蒿蹊は、先に記したように寛政二年から仏光寺に出入りしていた。蒿蹊の言を恵岳が伝えたのは、二人に仏光寺を仲立ちとする結びつきがあったからではないかと推測される。

寺院の例としては、たとえば「称徳寺」がある。この寺「歌日記」に、一例をあげるなら次のように、合計五回出ている。

廿四日。称徳寺来ませり。これもあす越後へ帰るとて歌

乞はれけるに、まづ近江まで下りて、そこにて年こえん

もはかりがたしといへば

いに果ん君にし有ねど逢坂の関のあなたはかひもなき哉

おなじくは都にかへれかへる山雪にはみちもあらじとぞおも

ふ

(享和二年十月二十四日)

この越後の「称徳寺」は、次のような理由で、現新潟県三島郡寺泊町荒町の真宗仏光寺派寺院「聖徳寺」であると推測される。

まず、これら二首と同じ歌が『桂園聚葉』雑の部に載っており、その詞書は次のようになっている。

師走の末つかた、越後寺泊なる円雅法師、都を立て近江国まで下り、故郷へ帰らんは年をこえんもはかり難しといふに

これによれば「歌日記」の「称徳寺」は「越後寺泊なる円雅法師」と同じ人をさしている。そして『御日記』に、「越後寺泊聖徳寺円雅」が出ている。

一、越後寺泊聖徳寺円雅、去ル九月下旬より上京。

(寛政二年十二月三日)

したがって「称徳寺」は聖徳寺である。そして円雅は、『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』(17)に、法名「願海院 积円雅」、庵号「心水閣」、寺院名「新潟・寺泊・聖徳寺」、往生年月日「文政元年七月二十七日」、享年「七十一歳」とある、円雅その人に違いない。また「歌日記」文化十三年二月十六日に次のようにある「心水閣」も聖徳寺円雅をさしていることがわかる。

仏光寺君より御着給はりける御返しに

仰ふみのやういとかたじけなく押し侍りぬ。さるに越の

寺泊よりはるく奉りしづりの大うを、風味ことさらな

りとてその一櫛下し給り、誠に折からの花よりも幾重か

珍らしく

かしこくもいたゞく袖にかをるかな君が裾わけ吹おくる風

もしこは心水閣のあたりよりもし奉りけんかと、いと

ゞ外ならずもなつかしみ侍りて

常こふるかの法師の寺どまり久しづりにもきくたより哉

さはとまれ大海のはらよりもいと深き御こゝろざしの有

がたさを、まうのぼり申奉るまでよくくとりつくろひ

給ひねと申。穴賢

きさらぎ十六日

恵岳のきみへ

景樹拝

かへし参る

寺院の例をもう一つ付けくわえておく。撰津国勝間（こつま。現大阪市西成区玉出）の光福寺は、景樹が難波に赴いた際には、次のように、必ずといつていいほど立ち寄り宿泊する寺であった。

三十日。けふ勝間の光福寺に行く。かはほりの飛ぶを見てみなよむ。

墨染の夕べになればかはほりの空にみだれて物ぞ悲しき

こよひ当座あり。籬虫

わが宿の籬の下にきりぐす鳴きあかしたる声ぞ聞ゆる

（「歌日記」文化三年八月三十日）

拙稿「香川景樹「歌日記」の因幡と因幡人」（18）にも引いた、景樹が同郷の稲村三伯を訪問した際の記事（文化五年五月九日）にも光福寺は出ている。この光福寺も真宗仏光寺派の寺であつて、『御日記』にも、たとえば「川並福応寺、堺光林寺、勝間光福寺江御酒被下候」（文化六年一月十九日）、「撰州勝間光福寺、去月廿日ニ狼藉物入込候ニ付、御届書宿坊江差出候ニ付、西坊より書付持参御届有之。追而御沙汰可有旨申、一先門下兩人帰村、宿坊を以申付候」（文化五年十月十四日）のようにその名がみえる。

以上、『御日記』と「歌日記」の両方に載っている人物や寺院のを取り上げてみた。ほかにも多くの例がある。門主澁谷家の親縁、また仏光寺やその末寺・檀徒をふくむ真宗仏光寺派の教団組織が、景樹の交遊圏や桂園派の拡大に大きい役割を果たしたのではないかと推測されるが、それについては稿を改めたい。

## 六 仏光寺『御日記』の香川景樹

『御日記』における景樹の記事を抄出して年月日順に並べ、「歌日記」に対応する記事がある場合はそれを掲げる。必要に応じて説明を加える。【一】から【七】までのうち、【一】【二】【六】【七】は、対応する記事が「歌日記」にある（19）。したがつて「歌日記」の日付の信憑性をこれらによつて検証することができる。はじめに掲げた【一】にあたる。【三】【四】【五】は対応する記事が「歌日記」にない。『御日記』によつて新たに判明した、景樹の、仏光寺にかかわる伝記的事実である。【2】にあたる。

【一】

『御日記』文化四年（一八〇七）正月十日

一、御歌初<sup>ニ付</sup>香川長門介<sup>参</sup>。於書院御のし昆布被下。

鐘之間<sup>ニ而</sup>御祝酒。夫より奥へ参。御詩会初<sup>之通也</sup>。

「歌日記」文化四年（一八〇七）正月十日

十日。仏光寺御殿御会始にてまうのぼる。御兼題

春風解氷といふことを

打解てけさ吹風の心をば池のこほりぞまづは知るらん

同じく御当座。野若菜

（一行空白）

名所松

住のえの岸は岡ともなりぬれど松の色こそ変らざりけれ

\*『御日記』の掲出部分を（写真4）として末に掲げる。

「歌日記」に仏光寺がはじめて登場するのは享和元年（一八〇一）二月二十六日の、「常楽寺会、三条の仏光寺御苗所にてあり」であるが、『御日記』に景樹が登場するのはこの【一】の文化四年正月

十日の記事が最初である。『御日記』『歌日記』の日付は一致し、また歌会始のための参殿である点も一致している。

書院での下され物がほかの物ではなく「のし昆布」であること、酒を賜ること、また「書院」であり「鍵之間」であつて他の場所ではないことが何を意味するのか、明瞭ではない。ただ、「奥」とは門主の日常生活の場であることは想像できる。文化四年の『御日記』において、この景樹の場合と「奥」に通されたという点で類似の事例として、次の二つがある。波線を付した「御詩会初」とは①の「御詩会」であろう。

①一、御読初并御詩会。参上 中嶋織部御対面左法如例。

桂主馬御盃被下。奥向ニ而御酒等出ル。

(正月五日)

②一、御楽初。参上 安陪越中守 安陪加賀守 筑後守 □三郎。

各於書院御のし昆布被下。夫より奥ニ而御祝ひ等被下。  
桂主馬も参。  
(正月十一日)

ちなみに言えば、①②両方に登場する桂主馬は『平安人物志』文政五年版、同十三年版の「書」の部と「楽」の部に出ている人で、『御日記』によれば、表向きは輪王寺宮御家人であるが「語合」として「家来同様」に仏光寺に仕えていた(20)。

## 【二】

『御日記』文化四年(一八〇七)正月二十三日

一、御門跡様岡崎辺へ御遊行。香川長門介へ御立寄。

御徒士式人御輿脇物左内其外如例。但し御賄向

御内儀より御催也。正行院殿も御誘引。

「歌日記」文化四年(一八〇七)正月二十三日

二十三日。けふにはかに仏光寺の君いらせ給ふ。いとせめてとみのことなれば庭をだにはらひあへぬを、雪の清めがほにふりしけるぞこゝろ有ける。みはらから正行院殿もとばかりおくれいていらせ給ふ。仰にしたがひてけふの御題たてまつる。その題

春の雪

梅花ある家にまらうど来たる 此わたりの歌よみ人にも皆よませてたいまつる。君のも人のも外にしるしたれば、おのれがのみかいつく。

かきくらし日影は空に見えねども消こそわたれ春の沫雪  
珍らしき君が来ませる嬉しさに梅の花をもけふは見ぬ哉

暮れ渡りぬればさうじさしこめてみものがたりし給ふほど、みさかづきあまたゝびめぐらひ、夜もなかばたけぬめり。さて帰り給はんとてまらうどぎねの君よみいだし給へる。

此宿を君いなみなばいかにせん道の長手を雪にあへる日

みあかりさゝげつゝみかへし奉る。

此宿はわがやどならず鶯の君まちえたる花の宿なり

\*『御日記』の掲出部分に日付もあわせて〔写真5〕として末に掲げる。

随応上人の景樹宅訪問の記事は、『御日記』『歌日記』ともにこの文化四年正月二十三日が最初である。『御日記』『歌日記』の日付は一致している。また、『御日記』は日付の下に原則として当日の天候を記すが、この日は、「晴。昼後曇。折々小雪」となっており、雪が降ったことも両者一致している。景樹は享和三年(一八〇三)

十一月に「岡崎道伴屋敷御旧宅の辺」（享和三年十二月十二日桃沢夢宅宛書簡）に転居し、この頃もそこに住んでいた<sup>(2)</sup>。「御賄向御内儀より御催也」は、酒食は景樹ではなく上人側が準備した、という意味であろうか。よくわからない。「正行院殿」は、第三節の初めに引いた「歌日記」文化三年正月九日に出ている、随応上人の弟の応専連枝である。応専連枝の景樹宅訪問の記事は、『御日記』ではこれが最初、「歌日記」は文化二年（一八〇五）四月二十三日が最初である。

【三】

『御日記』文化五年（一八〇八）十一月十七日

一、香川長門介参 殿。奥へ通ル。

「歌日記」

なし

\*『御日記』の「参」「殿」の間の一字分の空白はもとのままで、敬意を示す闕字である。

「歌日記」の文化五年の分には、この仏光寺参殿の記事のみではなく十一月の記事がない。この年、元日から閏六月十八日まで、ほぼ月日の順にしたがっている。しかし、その後ろに、「ことしは日次みだれてみなしられねば、思ひいづるまにくく左にみなかいつく」とあり、まず「贊の分」として、八月十七日（一首）、八月五日（二首）、八月二十日（二首）、六月二十日頃（二首）、日付なし（二首）が記されている。そしてその次に、「ふづきの十五日にやあらん」「同じく十六日」「同じはつかまり三日の日なりけん」と、それぞれ垂雲軒、赤尾可官、常楽寺を訪問し、次に「近き松や」において当座

開催の記事があつて、この年は終わっている。

なお、右の「同じはつかまり三日の日」すなわち七月二十三日に、「阿元師をともなひて常楽寺へ行く道にて三首の題を分つ」とある「常楽寺」は、仏光寺御堂衆の恵岳（第五節参照）、または恵岳がその寺名を名乗り用いた京都の仏光寺派寺院常楽寺をさす。またつづいて、「いきて見れば西徳寺 福応寺のふたりも来ましたり」とある「西徳寺」「福応寺」は、ともに『御日記』に頻出する仏光寺派寺院の名で、おそらくその住職をさしている。

【四】

『御日記』文化六年（一八〇九）一月二十日

一、御歌初<sup>ニ</sup>付香川長門介参上。御側<sup>ニ</sup>而御酒被下。

「歌日記」

なし

\*『御日記』に対応する歌会始の記事が、「歌日記」に見えないことには注意を要する。「歌日記」文化六年分は、月日の順を基準にして見ると記事の配列が全体としては大きく乱れているが、冒頭の二月二十五日までは、元旦からはじまり、二日、三日、四日、七日、十日、十三日、十五日、十七日、十八日、二十五日と続き、二月も、五日にはじまって二十五日まで時間順に整然と配列されている。したがって、これだけを見ると、元旦から二月二十五日までの間、記事がない日には特記すべき出来事や歌がなかったという印象を受けるが、実は二月十八日と二十五日との間にこの仏光寺の歌会始があつたのである。このことは、「歌日記」において、六日も間隔があいていれば、前後の記事の配列に時間の乱れはなくとも、重要事項

が欠落している可能性があることを示している。もちろんすべての場合に当てはまるわけではないであろうが、そうしたこともあるということを、「歌日記」を利用するには心にとどめておくべきであろう。

『御日記』の「御側二而」の意味するところは未詳である。【一】の文化四年の歌会始の場合は、「鑑之間二而御祝酒。夫より奥へ参。」となっていた。「御側」が「奥」を意味するならば、歌会始の会式、あるいは景樹の待遇が文化四年とは変わったか、または鑑之間での「御祝酒」と「奥」「御側」での「御酒」とは別の意味をもっていることになる。今後もう少し「御側」の例を集めて検討したいと思っている。なお、楽初も、文化四年は【一】に引いたように、「各於書院御のし昆布被下。夫より奥二而御祝ひ等被下」であったのに対して、文化六年は、「御側二而御酒被下」となっているから、かりに会式または待遇が変わったのだとしても、歌会始・景樹だけのことではない(22)。

#### 【五】

『御日記』文化六年(一八〇九)三月八日

一、歌人長門介参 殿。奥へ通ル。

#### 「歌日記」

なし

\*「参」と「殿」の間の空白は【三】と同じく闕字である。景樹がこの日参殿した理由は明瞭ではない。次の【六】の随応上人の景樹邸訪問を、景樹は「おもひもかけず」としているが、参殿はこの訪問と何らかの関係があるかもしれない。「歌日記」にはこの件にか

んする記事がない。

「歌人」とあるのは、二条家侍の喜頭長門介(23)との別を意識していることであろう。この時期の『御日記』に、「二條様江御使者内記。長門介面会」(文化六年正月二十七日)のように名字の記されない「長門介」がしばしば登場するが、記述の内容から明らかに喜頭長門介をさすと解されるので、いちいち取り上げて検討を加えることはしない。

#### 【六】

『御日記』文化六年(一八〇九)三月九日

一、御所様 東山御廟参。先より高田御坊開帳等

宮様 へ被為成候事。

君様 高田御坊二而御散銭青さし五貫文。

御簾中様

「歌日記」文化六年(一八〇九)三月九日

九日の日、おもひかけず仏光寺の君の入ましたるに、庭の山吹を題にて歌よみ給ふ。やどりしたる学び子どもにもすゝめてよましめたまへば、おのれが奉れる  
かひもなきかき根にありし山吹もことしよりこそ句ひ初めけれ

こは下されたる御歌のかへしなり。その御歌は忘れたり。  
おもひいでゝかきてん。

(一行空白)

御当座催し給へるに、おのがよみし二首。

松が枝に咲ける花かと見ゆれども猶散りやすき山桜哉  
山里にすむとはすれど事しげみ花も心にまかせてはみず

\*『御日記』の「御所様」は随応上人、「宮様」は知足院宮、「君様」は千重君、後の随念上人、「御簾中様」は随応上人室聞名真院である。「歌日記」に知足院宮以下にふれるところがないのは、随応上人のみの訪問だったからであろう。

『佛光寺辞典』によれば、「東山御廟」は、京都市下京区三条通粟田口東の仏光寺本廟である。元禄八年（一六九五）に飯堂、安永四年（一七七五）に本堂が建立された。昭和二十七年の宗教法人「佛光寺」寺法制定により仏光寺本廟とされるまでは「東山別院」「東山本廟」と呼ばれていた<sup>(24)</sup>。『御日記』に景樹宅訪問のことがまったく出ていないが、「高田御坊開帳等」の「等」に含まれているであろう。

「高田御坊開帳」は未詳である。近世京都に「高田坊」と称される寺があつたらしい。『京都坊目誌』に、「高田坊ノ址 高田町是也。<sup>(25)</sup>住 時柳原坊と称せる。僧親鸞が遺跡あり。断絶する事年久し。慶長十年伊勢国一身田専修寺（高田寺と号す）の僧堯恵其子恵隆に命し。旧地に一堂を創建し。高田坊と号す。元和三年火災に罹り。河原町二条の北に移し。其址町地となれり」<sup>(25)</sup>とある。その移転先には真宗高田派の寺があつた。『都名所図会』に、「本誓寺は河原町二條の北にあり。宗旨は親鸞聖人の弘法にして高田派也」とある本誓寺である。この本誓寺が高田坊移転後「高田御坊」と称された可能性がある。

現在、「高田御坊」は奈良県北葛城郡高田町高田の専立寺（真宗本願寺派）をいうのが普通であるが、かりにこちらが「高田御坊」であつたとして、もちろん随応上人一行が奈良に出向いたわけではなく出開帳であろう。

## 【七】

『御日記』文化六年（一八〇九）十二月十二日

一、今日、千重君様御庖瘡之御酒湯被遊候。

幾久敷日出度、内記ふくさ麻上下<sup>二</sup>而上ル。

さゝ之葉少々ツ、根赤紙<sup>二</sup>而卷 一ツ。

さん俵 一。御湯白水<sup>二</sup>而鼠之ふん 三ツ。

小豆 三つほ。御酒少々入。

御酒湯と称、かけますまね計致候而跡ハ流ス。

「歌日記」文化六年（一八〇九）十二月。日未詳

仏光寺のみとのゝ千重君のかたいものみやまひ、ことな  
くをはり給ひて、みゆひかせ給ふをいはひ奉てよめる

身そぎ河水の心にかゝりける藻は跡もなく祓へながせれいか  
に清からし

今までも千世いませとは祝ひしかどもけふしこそまことに千  
代の始なりけれ

\*「酒湯」は「ささゆ」または「さかゆ」といい、庖瘡が治つた際に湯を浴びせること、またはその湯のことで、「笹湯」とも書く。その具体的な次第がうかがわれる貴重な記述であるが、ここで重要なのは日付である。十二日がその「酒湯」であるなら、景樹がその祝いの歌を詠んだのは翌十三日であつたとしても不自然ではない。「歌日記」におけるこの記事は、「おなじく十三日のあした」すなわち十二月十三日の次に日付なしで置かれている。「歌日記」において、日付のない記事は直前の記事と同じ日のことである場合が多い。これも十三日のことと解してよいのではないかと思う。

注（一）彌富濱雄編『桂園遺稿』上巻・下巻（五車楼 明治四〇年三月・同

八月)

- (2) 「香川景樹『歌日記』の「年づけ」——『桂園聚葉』を手がかりとして——」(『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)』第四十七卷 第二号 一九九六年一二月)
- (3) 兼清正徳『熊谷直好伝——封建末期の一歌人の生涯——』(熊谷直好伝刊行会、昭和四〇年五月)、拙稿「鳥取県立図書館所蔵香川景樹の手紙一通——『花の跡』の成立時期について——」(『鳥取大学教育学部研究報告』第四七卷第一号 一九九六年八月)
- (4) 澁谷有教編『佛光寺御日記』第一卷(本山佛光寺 昭和六一年一月)
- (5) 村山修一「妙法院日次記」(『日本歴史「古記録」総覧』新人物往来社 一九九〇年一月)
- (6) 千葉乗隆・梨本哲雄監修 平松令三編『佛光寺の歴史と信仰』思文閣出版 一九八九年三月)
- (7) 山本嘉将『香川景樹論』(育英書院 昭和一七年一二月)、黒岩一郎『香川景樹の研究』(文教書院 昭和三二年一〇月) ほか。
- (8) 「歌日記」の引用は、『桂園遺稿』上巻・下巻により、私に句読点・濁点を加える。
- (9) 芝葛盛ほか編。高松宮家、昭和一三年六月。
- (10) 『御日記』の引用は、寛政十二年までは前節に掲げた『佛光寺御日記』により、一部表記を改めた。それより後の未刊行年分は仏光寺所蔵の『御日記』原本により、私に句読点を付した。文字の大小、配置は印刷に便宜により、原本のままではない。
- (11) 佐々木信綱編『香川景樹翁全集』上巻(続日本歌学全書第四編 博文館 明治三二年六月)による。
- (12) 尻山紀成筆記。国文学研究資料館マイクロフィルムによる。
- (13) 「歌日記」の享和元年から文化六年までに、「仏光寺」「仏御殿」「仏光寺の君」など、明確に仏光寺または随心上人をさす語をふくむ記事は三十三条、「正行院の君」など応専連枝をさす語をふくむ記事は十

条ある。一方、『御日記』の文化六年までに、景樹の名が見える記事は五条である。

- (14) 市古貞次ほか編『国書人名辞典』第二卷(岩波書店 一九九五年五月)
- (15) 井上通泰編『桂園叢書 第一集』(有斐閣書房 明治二五年六月)
- (16) みどうしゅう。澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺、昭和五九年三月)によれば、仏光寺両堂(本堂・太子堂)に勤仕する僧である。『御日記』によれば、代参、別院・末寺などの寺院への使いも勤めた。
- (17) 佛光寺学匠寮編『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』(本山佛光寺 平成一〇年一月)
- (18) 『鳥取大学地域科学部研究紀要』第四卷第三号(二〇〇三年三月)
- (19) ただし、【六】【七】は『御日記』に景樹の名は出ていない。内容から「歌日記」の記事と対応すると判断した。
- (20) その出入りの初めにつき、『御日記』寛政十年(一七九八)七月五日に次のようにある。

桂主馬 手跡能相学候者之由、兼々中山安石申上候<sup>ニ付</sup>、今日御館入被仰付、御目見御口祝被下、於御前数々認物相勤、御肴一折<sup>し</sup>差上、御祝儀三百疋被下、且御内々より金貳百疋<sup>ツ</sup>、御吸物 御酒被下

尤表向ハ輪王寺宮御家人之由<sup>ニ付</sup>、御当家<sup>ニ</sup>御家来同様御取扱之約束、御供<sup>ニモ</sup>罷出由也、<sup>御歌御口祝出ス</sup>
- (21) 景樹の住居については、山本嘉将『香川景樹論』(注7)、中野稽雪「香川様屋敷」『洛味』第二一八集 昭和四五年一二月。中野義雄編中野稽雪遺稿集『里のとぼそ第五集 小澤蘆庵の真面目』私家版

昭和六〇年九月)参照。また拙稿「香川景樹「歌日記」の「年づけ」」(前出。注2)においても言及した。

(22) 詩会初・読初は文化六年の『御日記』に明確にそれとわかる形では記載されていないため、文化四年と比較できない。正月十日に、「御対面 中嶋織部 石井多仲 桂主馬」とあるのがそれと推測されるが、その式次第はわからない。

(23) 正宗敦夫編纂・校訂『地下家伝』(自由日报社 昭和四三年二月)によれば、名は時富、文化四年(一八〇七)石見介より長門介に転じ、文政七年(一八二四)左兵衛少尉に任ぜられた。文政十二年四月没。六十八歳。

(24) 以上、澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)による。

(25) 野間光辰編『新修 京都叢書』第一九卷(臨川書店 昭和四三年七月)「第二十四学区之部」二三四頁による。同「第二十六学区之部」専修寺別院の項二九二頁にも「高田坊」についての記述がある。

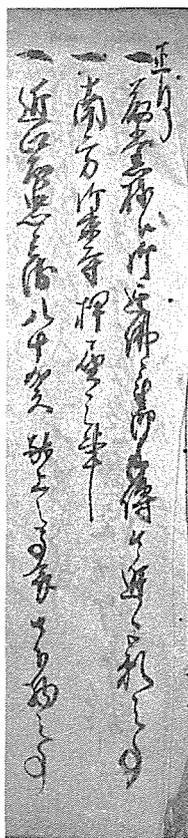
〔付記〕

『御日記』をはじめとする仏光寺所蔵諸資料の閲覧につき、澁谷曉眞門主と御家族に格別の御配慮を戴いた。ここに記して深謝申し上げる。

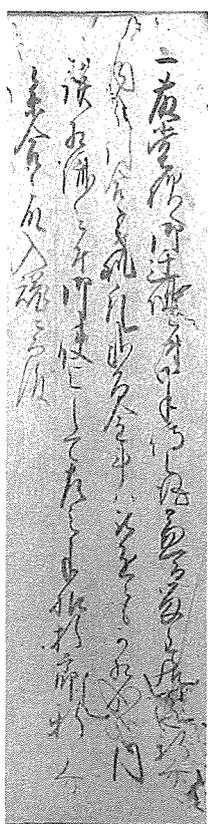
〔写真1〕『御日記』享和二年 識語



〔写真2〕『御日記』享和二年 目録冒頭



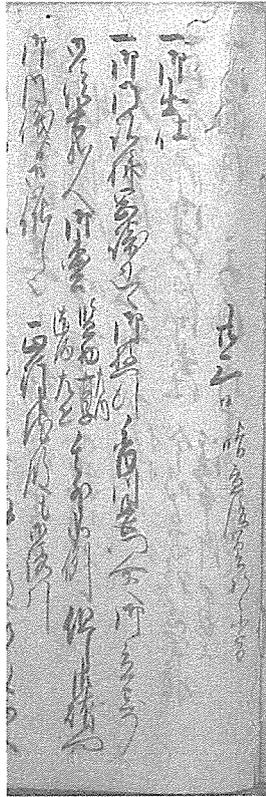
〔写真3〕『御日記』享和二年正月九日



〔写真4〕『御日記』文化四年正月十日



〔写真5〕『御日記』文化四年正月二十三日



〔鳥取大学教育地域科学部紀要〕(教育・人文科学) 第五卷第一号

平成一五年五月三〇日

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで——

田中 仁

## 一 はじめに

真宗仏光寺派本山仏光寺所蔵『御日記』の、文化七年（一一八一〇）から同十四年までのうち、現在所在不明の十年、十一年をのぞく六年分<sup>(1)</sup>から香川景樹の登場する記事を抄出し、景樹の「歌日記」<sup>(2)</sup>と対照する。「仏光寺『御日記』の香川景樹——文化六年まで——」<sup>(3)</sup>の続きで、目的も同じく香川景樹「歌日記」の年月日付けの検証と景樹伝にかかわる新事実の発掘である。したがって、『御日記』にあつて「歌日記」には対応する記事がない場合は、『御日記』の記事を抄出してその旨を注記するが、逆に「歌日記」にあつて『御日記』にない場合は取り上げない。「歌日記」の年月日付けの検証という点から見れば、「歌日記」と対応する記事が『御日記』にないことに特に取り上げて云々するほどの意味はないし、二つの日記を対照して新事実を発掘するという点からみても、すでに周知の資料である「歌日記」と対応する記事が『御日記』にないということに、やはり特に取り上げるほどの意味はないからである。

## 二 問題点二つ その一

ただし、前者の「歌日記」年月日付けの検証、後者の新事実の発掘について、処理に迷う場合が一種ずつある。先ず前者について言えば、「歌日記」と同じ事柄を伝えていると考えても不自然で

はない記事が、『御日記』にも見えるものの、両者は対応している、同じ事柄の記述だとまでは言い切れない、一例をあげるなら次のような場合である。『御日記』引用は本山仏光寺所蔵原本により、句読点を加える。また「歌日記」の引用は彌富濱雄編『桂園遺稿』により、句読点・濁点を加える。

『御日記』文化九年（一一八一）五月二十三日

### 一、御所様計

本光寺へ御成被為在候。

朝五ツ半より。

御機嫌能還御被為在候。

夜九ツ半刻。

御先番 大蔵卿

兵部

御供 正親

矢柄

□二郎

「歌日記」文化九年月日未詳。夏か

仏御殿御当座 泊水鶏

ねられねば舟ばた叩き諷ふ夜に水鶏も声を合せがほなる

同 望遠帆

はるかくと湊をさして入舟の真帆に受たる夕日かげかな

『御日記』の「御所様」は仏光寺第二十三代随応上人である。「大藏卿」は二條家侍の稲田隱岐守政幸男で仏光寺坊官の稲田政観、「兵部」は仏光寺家司の小幡兵部、「正親」と「矢柄」は仏光寺近習である。近習は門主の身近に仕え、諸方への使者、諸方からの使者の取次、またこの場合のように門主や門主家の人々の外出の供などをとめた。「□二郎」の□は「榮」か「米」のように見えるが判読できない。

「歌日記」の「仏御殿」は仏光寺またはその主の随応上人をさして用いられている。ここでも「仏御殿御当座」は仏光寺で開かれた歌会の当座、または随応上人主催で開かれた歌会の当座、の意であろうが、二首はともに当座の歌であって兼題の歌が掲げられていない点が注目される。この歌会に兼題はなかったことを示しているのではないかと思われるからである。

兼題がないということは、この歌会が前もって準備されたものではなく、随応上人の本光寺御成という偶発的な機会を得て臨時に開かれた、

十四日。仏光寺の君、近き本光寺に入らせ給ひて御当座あり。

朝霞

高砂のをのへの松に朝がすみ匂へるみれば日は出にけり

(「歌日記」文化五年二月)

などと同様の会だったと推測させる事実である。「本光寺」は、第四節の【一〇】に記すように、現在の京都市東山区岡崎法勝寺町にあった寺で、「歌日記」によれば仏光寺にかかわる歌会に用いら

れることがあった(4)。また、一つの題のうち「泊水鶏」は、『桂園和歌類題集』も夏の部にこの歌を収めているように明らかに夏の題である。この「仏御殿御当座」は五月二十三日に本光寺において開かれたものであった、というのは不自然な推測ではない。

しかし、いっぽうで、右に引いた文化五年二月十四日などは違う「仏御殿御当座」という名詞化した評言は、これが定期的に開かれていた会であり、景樹は毎回その当座の題によって歌を詠んでいたことを暗示しているようにも見える。具体的に言えば、「仏御殿」は仏光寺の意であり、「仏御殿御当座」とは仏光寺において開催された月次の歌会で出された当座題を、いつものように後に聞かされて詠んだ(5)、といったことなのかもしれない。

また、何よりも、「歌日記」に月日が明記されていない点が、対応していると言いきれない決定的な要因である。逆に言えば、もし「歌日記」に「仏御殿御当座 五月二十三日 泊水鶏」のように、「御日記」と一致する月日が明記されていたとしたら、『御日記』に景樹の名はなくとも両者が対応していることは確実と言ってよいであろう。前稿の【六】【七】、本稿の【一〇】はそうした事例である。しかし、この場合のように、『御日記』に景樹の名がなく、「歌日記」に月日がないとなると、本光寺が仏光寺関係の歌会に用いられることがあったこと、季節がともに夏であったことだけで、両者は対応していると言いきることはできない。

### 三 問題点二つ その二

次に、後者の新事実の発掘については、たとえば次のような場合が問題である。

『御日記』文化十三年(一八一六)三月二十五日

安住台へ御所様御内々ニ而午半刻比より御成。還御寅刻。

### 「歌日記」

なし

この『御日記』の記事に景樹の名は出ていない。しかし景樹がかわつていた可能性がある。

その点で注目すべきは「安住台」である。どこにあったのか正確にはわからないが、随応上人が東山の仏光寺本廟に廟参後、「還御掛（かんぎよがけ）」にここに立ち寄った、という記事が『御日記』に時々見えることから、本廟または本山近くか、または本山と本廟との間にあったと推測される。

文化十三年の頃、この安住台は随応上人の弟である応専連枝の住まいだったようである。澁谷有教編『佛光寺辞典』(6)の「応専」の項に、「文化八年別院安住台に遷り」とある。また『御日記』文化十二年十月十六日に、二人の僧について、

御役僧ニ被召抱候ニ付

安住台 院家衆 御堂衆 常仕へ為知申遣ス。

という記事がある。「院家衆」とは、本山仏光寺につぐ寺格を有する、光藪院、大善院、長性院、教音院、久遠院、昌蔵院の六院の住職である『佛光寺辞典』。これら院家衆より上に記されるのは、この文化十三年の時点では応専連枝以外には考えられない。この頃「安住台」は応専連枝の呼び名にもなっていたのである。

「歌日記」によるとこの安住台も、本光寺と同様に、たとえば次のように歌会に使用されることがしばしばであった。

六日。安住台御当座。萩見のみつどひにて御門主も入り給ひたるに折ふし野分して雨はげし。  
(文化四年八月)

もつとも、それは「歌日記」によるかぎりでは文化四年八月までのことではある。その後は文政六年の随応上人の追悼会まで、「歌日記」に安住台における歌会の記事はない。このことはおそらく、「歌日記」文化八年（実は文化六年）(7)八月に次のように記される事態と対応している。「正行院の君」は応専連枝その人である。

二十日。仏光寺の君のみはらから正行院の君とひ来ませり。けふきませる故は法の道踏分け給ふにことのはのこみちありては一筋ならであらぬちまたにも行迷はんおそりなきにあらず。今よりこの道をば捨侍りなんと思ひ成ぬるを告申さん云々などのたまはず為なり。(以下略)

この文化六年の四月に、応専連枝は大僧都に任じられている(8)。歌道放棄の宣言はこのことと無関係ではないと推測されるが、その当否は別として、もし応専連枝の歌道放棄宣言と「歌日記」に安住台における歌会の記録が見られなくなることが結びついていたら、安住台は文化八年の移徙以前にすでに応専連枝の住まいになっていたのではないかと思われる。

それはともあれ、応専連枝の歌道放棄宣言、あるいは歌道放棄を宣言した応専連枝の安住台移徙によって、しかし、安住台と和歌・景樹とが無縁になったわけではない。『御日記』文化十三年正月十九日に次のようにある。傍線を付した「香川」は景樹、「常楽寺」は景樹と親しかった恵岳(9)である。

#### 一、御所様

青蓮院宮様江御成。

(中略)

直様

東山御廟参

(中略)

先より安住台へ御成

八ツ半より君様安住台へ御成

御供 兵部

一馬

正親

先方様へ

香川

常樂寺 参り候由

『御日記』によると、随応上人は、このほかにも折にふれて、時には千重君(後の仏光寺二十四代随念上人)も伴い、安住台に出向いている。たとえば次の如くである。

一、御所様

君様

安住台へ御成被為在候。

御供兩人

御徒士兩人

合羽籠壺人 押壺人

御包輿三人

御草り口帶壺人

七ツ半時より御成被為在候。

各御供帰り、御迎三行。

(文化九年八月十四日)

一、御門跡様巳ノ刻半

安住台へ御成。

羽織袴敷

一馬

左内 貞次郎

(同十二年四月五日)

こうした際に、景樹が呼び寄せられ、略式の、当座題だけの歌会が催されたと考えるのは、決して不自然ではないであろう。「御内々」がいつそうその気配を感じさせる。そして、もしそうであったとしたら、これは景樹にかかわる従来知られていなかった事実である。

しかし、景樹の名が見えず、「歌日記」にも対応する記事がない以上、推測はあくまでも推測にとどまる。景樹とはまったくかわりのない何らかの用件で、あるいはとりたてて用件はなくとも、随応上人が弟の、千重君が叔父の応専連枝に会うために安住台に出向くことがあり得ないはずはない。

前稿・本稿ともに、『御日記』に景樹の名が出ている場合と、景樹の名は出ていなくとも「歌日記」に対応する記事があり、景樹がかかわっていたと明らかに推測される場合とのみを取り上げた。つまり、比喩的に言えば、景樹の姿が明白に見える事例のみを取り上げた。今後も同様の基準によって仏光寺『御日記』の景樹関係記事を拾っていく予定である。しかし、実はそれらと連なっている姿がほとんど明白なものから、微かに気配が感じられる程度のもので、仏光寺『御日記』に景樹は様々な形で存在しているのである。それらの中には単なる思いこみ、錯覚による幻影のような例もあるであろうが、すべてそうだとも思えない。

「歌日記」には、仏光寺だけではなく、仏光寺にかかわる、たとえばすでにふれた本光寺や安住台など、また越後国寺泊の聖徳寺や撰津国勝間の光福寺など、さらにまた藤堂家や有栖川宮家、富士谷御杖や児山紀成、恵岳などの、仏光寺にかかわる寺や家、人物が登場する。そして『御日記』にも同様に、景樹その人のみではなく、景樹にかかわる右のような寺や家や人物が登場する(10)。仏光寺と景樹との関係は、それらを総合し比較対照することによってはじめて明らかになってくるはずである。『御日記』の記述

から感じ取られる景樹の姿が、幻影にすぎないのか実体をともなっているのかも、その時に今よりは多少なりともはっきりわかってくるであろう。そのための準備として、今は明白な仏光寺『御日記』から、明白な景樹の姿を拾いあげていきたいと思っている。

#### 四 仏光寺『御日記』の香川景樹

仏光寺『御日記』の景樹関係記事を、上述のような基準によって抄出し、年月日順に並べる。「歌日記」に対応する記事がある場合はそれを併せて掲げ、ない場合は「なし」とする。文字の大小、配置は印刷の便宜にしたがい必ずしも原本のままではない。『御日記』の判読できない文字には仮に□をあてておく。割り注など一行分に二行書かれている部分は「」で括って示す場合がある。記事の内容等につき、必要に応じて\*を付して説明を加える。なお、【】で括って示す番号は、前稿からの通し番号である。

#### 【八】

『御日記』文化七年（一八一〇）正月十九日〔写真1〕

一、御所様東山へ御廟参被遊候。

青蓮院宮様江年始御成被為在候。

東山相済候而香川長門介江御成。

御先番

青蓮院様へ 東山へ 内記

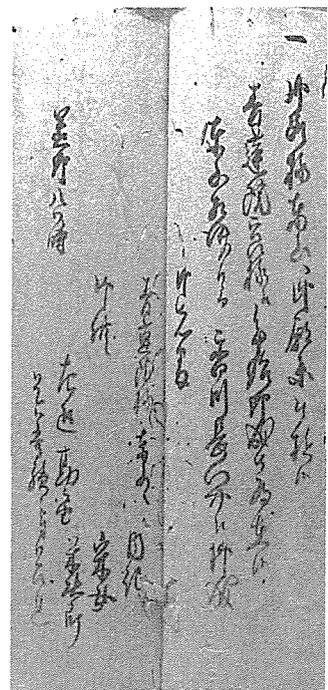
采女

御供

左近 勘解由

還御八ツ時 是ハ歌「読」ニ付御召連。

〔写真1〕



「歌日記」

なし

\*□は「榮」または「米」か。「」でくくった「読」は、字形は明らかに「統」であるが、『御日記』のこの箇所の筆者は、言偏を糸偏と同じ形に書く場合がある。これもその一例と判断した。

『御日記』によれば、左近は旧姓木村、文化六年八月に吉川主税の養子になり吉川左近と称した。近習の一人である。「勘解由」は山田勘解由。同じく『御日記』によれば、文化六年正月に「中奥□席」(り)に任じられている。「□次郎」は未詳。第二節に引いた『御日記』文化九年五月二十三日の「□二郎」と同一人物であろう。「歌読」は左近のみについて言うのか、または勘解由もふくめることなのか不明である。

この【八】の『御日記』の記事は、景樹の『古今集』講義にかかわって重要である。「歌日記」によれば、文化七年正月十九日は、景樹が『古今集』の講義を再開した、まさにその当日であった。

十九日。ときかけし古今集けふときそむ。夏のはじめ

より也。この十年あまり昔成けん、冬のはじめ、同じ集をときそめ侍しとき うは氷一重ばかりはとけながら紀の河よどのそこぞしらぬ、とよみしは、たとひしにはあらで、真淵といふ淵に溺れてこの集をあかぬものにおもひそしりし下ごゝろなりけり。いさゝかさとりにえたるのちは、いとかしこきえせ心になんこの紀の大みかみのいさをは柿本のかみにたてる事をしりあきらめて、口にもいひ筆にもかき、いまはたゞさらんいはれを世人しらんことをのみこひねがふも、なか／＼おそき心とや、かのみかみはみそなはし給ふらんかし。

みよし野の花とみるまで水上の昔にかへる紀の川のなみ

随応上人の景樹訪問が、普通どのような手続を踏んで行われていたのかよく分からないが、身分柄事前に日時や接待の次第、内容などにつき打ち合わせがあったと考えるのが自然で、「けふにはかに仏光寺の君いらせ給ふ。いとせめてとみのことなれば庭をだにはらひあへぬを、雪の清めがほにふりしけるぞこゝろ有ける」

〔歌日記〕文化四年正月二十三日)のような景樹の都合に頓着しない突然の訪問は、文飾か、かりに事実だとしても違例のことであつたように思われる。そうであるなら、おりもおり講義再開当日に上人の訪問があつたのは不審である。

もし訪問が事実であつたとしたら、それは講義を聴くためであつたと考えられる。そう考えれば、「歌謡」の左近(または左近・勘解由)が伴われた理由がよく分かる。しかし、「歌日記」が『古今集』講義再開に関して上人の訪問にまつたく言及しないのは、訪問が講義とは別のことであつたことを示している。とすれば、講義再開当日の訪問はやはり極めて不自然と言わざるを得ない。「歌謡」を伴うことも、景樹宅に立ち寄ることが最初から予定さ

れていたなら、『古今集』講義を聞くためではなくとも十分にあり得よう。『御日記』または「歌日記」の年月日付けが誤っている可能性が大きい。

一般的に言つて、『御日記』と「歌日記」のどちらかの年月日付けに誤りがあるとしたら、それは「歌日記」のほうである可能性が大きい。『御日記』が、『妙法院日次記』について、「多数の筆者が参加しているが、ある程度、時期を区切つて坊官により整理しなおされており、直接に記録した本人の自筆は少ないものと思われる」<sup>(12)</sup>と言われているのに近い成立過程を経ている<sup>(13)</sup>としたら、その年月日付けが誤っているとは普通には考えられない。

この場合も誤っているのはおそらく「歌日記」なのであつて、はやく正宗敦夫「桂園史料」<sup>(14)</sup>が、「歌日記」文化七年は実は文化八年の誤りであることを指摘している。ただ、その論の主眼は、「歌日記」では文化七年八月一日とされている「直好 幸文 弘章たち伴ひて」云々の記事が木下幸文の日記では文化六年になつていることにもとづいて、文化八年が文化六年の誤りであることを明らかにすることにおかれ、文化七年については、

幸文日記は乱れて居らぬが景樹日記は年がいたく乱れて居る(例へば文化七年と云ひ伝へたのが文化八年の有り又文化四年の末に文政十年のが少し斗り付て居るなど)其故これも幸文日記に従ひて文化六年のと定めて先誤まりは無からう。

と、私に傍線を付したようにあるのみで、文化七年とされている部分のすべてが文化八年なのか、また誤りとする根拠は何なのか、明示されていない。

この正月十九日について言えば、『古今集』講義再開の記事の前に、次のような文化八年であることを推測させる記事がある。四行目の「さて題を分つ」と「父の君のみもとより」は、改行もな

く連続しているが内容は異なっている。おそらく「題を分つ」の次に、景樹の得た題と詠んだ歌とが脱落しているのである。また、「過し十六日」は、過ぎし月の十六日、あるいは過ぎし年の同月十六日の意ではないであろう。それでは贈歌と答歌との間が開きすぎる。「過し十六日」は「去る十六日」の意で、この記事が十七日から十八日に書かれたことを示している。

十六日。夕つかた、ちかき花園の君のみもとにまうのぼる。こは父の入道の君、こぞしはす二日にかくれさせ給ひ、そのみおもひにこもらせおはすほどなり。さて題を分つ。父の君のみもとより

人はみな花ともみれど白雪のふりにし身には春も覚えず  
かへしまゐらす

仙人の春ともしらぬ春にこそ花ともいはぬ花は咲くらめ

こは過し十六日に、陸奥介をとまけてかざりおろし黄中といふ名になり給ひし、そのわび心をのばへ給へるなれば、返しはいはひ奉りし意なり。

右の引用箇所のうち、「花園の君」の「父の入道の君」の逝去と、「父の君」の陸奥介辞任・落飾が年次推定の手がかりになる。「花園の君」は花園公燕、その父の「入道の君」は花園公章である。公章は文化四年二月十五日落飾し、法名三樂を得、文化七年十二月六日、四十四歳で薨去した<sup>(15)</sup>。命日に二日と六日の違いがあるが、どちらかの誤りか、実際と届出の相違であろう。いずれにせよ「こぞ」は文化七年、したがってこれは文化八年の日記ということになる。

次に、「父の君」は養父であった香川景柄である<sup>(16)</sup>。『地下家伝』によれば景柄は、寛政八年十二月十九日に従六位下、同日任陸奥介、文化八年五月十四日に介を辞し、同日落飾、文政四年十月三

日に享年七十七歳で没した<sup>(17)</sup>。このうち陸奥介辞任・落飾の「五月十四日」はおそらく一月十四日の誤りである。「井上通泰氏見聞記の抄」と副題にある「桂園叢話第十三」<sup>(18)</sup>は、「文化八年正月十四日官を辞し落飾して名を黄中と改む」とする。「萩坪大人」から送られた「徳大寺家の記録の書拔」に依拠した旨の注記がある。これに拠るべきであろう。「歌日記」は正月十六日とするが、これは黄中の歌が届いた日だったと推測される。つまり黄中の陸奥介辞任・落飾は文化八年正月十四日であり、「歌日記」のこの部分は文化八年の日記だったということになる。

現在見られる「歌日記」文化八年は、前半の自筆部分と後半の非自筆部分とに分かれており、自筆部分は実は文化六年の日記、非自筆部分は文化八年の日記とおぼしい<sup>(19)</sup>。そして自筆部分の開始は八月一日であり、非自筆部分は「一月楼にて雪の降りたる朝珍しくふれる河原の初雪をいつもさらせる布かとぞ見し」と冬からはじまって十二月まで続き、最後は題詠「秋人事」で終わっている。つまり現在知られるかぎりでは文化八年正月の記事はない。しかし、この文化七年正月十六日と十七日あるいは十八日は、実はその知られていなかった文化八年正月の日記の一部分であった。そしてもしこの推測があたっているなら、それに続く、文化七年であることの極めて疑わしい十九日も、実は文化八年正月十九日の記事だったと推測される。

そしてさらに言えば、二十一日の次のような記事も、『御日記』とつき合わせると、文化八年の日記であったと考えられる。

廿一日。仏光寺のみとのにいつも十日のころまうのぼり、さてはじめての御つどひもよほさるに、又ことしはおのれむねふたぐやまひありて、さる御殿わたりの遠きにはえものし侍らねば、さることも行はせ給はでやみにしを、あかずおぼして、けふしもかしこくもお

のが庵近き木村某がやどに入給ひてよびよせ給ひ、い  
さゝかその式めきて皆にも歌よませ給ひしなり。御兼

題

鶯声和琴

(二行空白)

百ちどりさへづる春の初ごゑをなが来て鳴も珍らしき哉

すみれ つくぐし なづな

都人早くなづさへからなづなみになるまでに春は成にき

すゞめのおや、ひなにえくはせんとするかた

汝が声を今も聞しる人あらばいかにかなしき心なるらん

ところ

長閑なるいづくはあれどこの殿に所えたりとみゆる春哉

これと対応しているはずの『御日記』文化七年正月二十一日は  
次のようになっていいる。全文を引く。

一、御出仕。

一、川守西光寺 三之間縫目四段紋白五条。

新発意円澄

一、大宮三位殿御成。 取次貞之進

年始御祝詞被仰候事。

一、千種殿御使山田右衛門 入魂軍蔵

先達而者御目六之通被進忝御挨拶。

ここに随応上人外出のことは見えない。いっぽう『御日記』文化  
八年正月二十一日には、つぎのような外出の記事がある。

一、御所様 青蓮院宮様より東山御廟所へ

御成被為在候。御供大蔵卿。

先より木村貞之進江御成。

月日が一致し、上人の行く先も、「歌日記」は「木村某」、「御日記」  
は「木村貞之進」と苗字が一致している。「歌日記」の文化七年正  
月二十一日は、おそらく文化八年正月二十一日の誤りである。そ  
うであるなら、十九日が文化八年正月十九日であった可能性は一  
層大きい(20)。「歌日記」によって従来文化七年正月十九日とされ  
てきた景樹の『古今集』講義の再開(21)は、実はそれより一年遅い  
文化八年正月十九日だったといつてよいであろう。

【九】

『御日記』文化八年(一八一二)八月十八日

一、御門跡様御成。 木屋町香川出養生之

処へ。

『歌日記』

なし

\* 「歌日記」文化八年は、前記のように八月一日から八月二十一  
日までの景樹自筆部分と、「二月楼にて雪の降りたる日」以下の非  
自筆部分からなる。八月十八日は自筆部分の範囲であるが、この  
部分は正しくは文化六年の日記である。つまり文化八年八月十八  
日は、「歌日記」自体が未発見のままである。かりに文化六年の日  
記という推定は誤りであつて文化八年が正しいとしても、十八日  
は十九日とともに記事を欠いている。また、この前後にも、これ  
と対応する記事はない。

【一〇】

『御日記』文化九年八月十一日

一、御所様 今日岡崎本光寺へ御成。

先より木村貞之進へ御成之由。

朝四ツ時半時

還御。

「歌日記」文化九年八月十一日

八月十一日。仏御門主、木村がもとに入らせたまひて御当座

社頭祝

糺川<sup>絶</sup>尽じとぞおもふ君が代にふたゝびかへす山あひの袖

耕夫画 女郎花と薄と交りたてるかた

女郎花すゝきを花の袂にてかへすくもたれをこふらん

野べに出たまひけるに御供して

くもりたる月の光も晴にけりいざや野寺のかど叩きてん

\*「本光寺」は『御日記』『歌日記』にしばしば見える寺である。

第二節に各一例を引用した。そのうちの「歌日記」の方の記事に「近き本光寺」とあるのによれば、岡崎の景樹宅の近くにあったらしい。

古地図を見ると、天保二年七月刻成、慶応四年二月再刻『改正京御絵図細見大成』(2)に「本光寺」が載っている。加茂川の東、二条通りの東の突き当たりで、秋田屋敷・加州屋敷の東、満願寺の南方向にあたる。同じ地図の天保二年版の同じ位置に「本光院」として載っているのも、おそらくこの寺である。現在は二条通がその跡地を横断して白川に至り、二分された旧境内の南半分ほどが京都市動物園の敷地の一部になっている。この寺がこの位置に

あった時期は明らかではないが、明治九年版權免許、福富正水校正『京都区分一覽之図』(23)ではこの位置に建造物はなく、田畑が草地を思わせる符号が記されている。文化年間の地図については未調査であるが、仏光寺東山本廟とも近く、『御日記』『歌日記』の本光寺はこの寺であったと考えられる。

「木村貞之進」は近習の一人として『御日記』に頻出する。【八】に引用した文化七年正月二十一日、文化八年正月二十一日にも出ている。近習は「宗主の側近にて世話する役」(『佛光寺辞典』)で、親類の公家・大名との年賀慶弔の挨拶の使者・取次、門主やその家族の外出の供なども務めた。「歌日記」に「木村貞之進」「貞之進」は見えないが、随応上人が「木村高敦の家」(文化四年七月二〇日)、「木村某がやど」(文化七年正月二十一日)に入り、景樹も加わって歌会が開かれたという記事が出てくる。この高敦は貞之進その人か、またはその一族であった可能性が大きい。

「歌日記」の「耕夫」は上田耕夫である。生年未詳、天保十三年没。応挙門。『御日記』によれば仏光寺と最も密接な関係を有する絵師の一人である。この時も、木村貞之進宅に呼ばれた可能性もあるが、有り合わせた耕夫の絵に賛を加えただけなのかもしれない。

【一一】

『御日記』文化十二年(一八一五)三月十九日

一、香川長門介参 殿<sup>ニ</sup>而奥向へ通ル。

『歌日記』

なし

\*「歌日記」文化四年七月二十日に、「昨日仏光のみとのにまうのぼるべきを、いささか暑けのなやみにさはりてえまゐり侍らざりしをあかぬことに思しめして」とある。参殿すべき日は十九日だったわけで、それと同じ十九日である点が注目される。毎月十九日に仏光寺奥において歌会が催されていた可能性を感じさせるからである。

しかし、現時点では、十九日の一致は偶然だったと言わざるを得ない。いったい景樹が仏光寺における歌会にどの程度出席したか、というより出席できたのか、明かではない。新年最初の初会に招かれたことは『御日記』『歌日記』の両方に見えるが、それ以後の月次会について仏光寺に参上したという記事はない。また、「歌日記」において、初会以外に仏光寺に参殿して当座の歌を詠んだという記事は、文化三年十月三十日の一例しか見出せない。それも、まず、

仏光寺へまうのぼる。御兼題未進よみて奉る。

として、「漸待郭公」以下、夏と秋の題六題、歌は一首欠けて五首を列記し、続いて、

今日御当座題 深夜落葉 伎女対鏡

として歌各一首が記されるのみである。月次会への出席であったのか否か、判然としない。【八】に引用した文化七年（実は八年か）正月二十一日に、「仏光寺のみとのにいつも十日のころまうのぼり」とあるのも、「さてはじめての御つどひもよほさるに」と続くことから明白なように、初会についてのみのことである。おそらく景樹は、初会以外の仏光寺会については、割り当てられた題を通知されて詠み、それを献上しただけではないかと思われる。ちなみ

に、仏光寺において月次会が催されていたことは、右の「御兼題未進よみて奉る」につづいて春・秋の六題が列記されていることから推測されるし、より確実には、同じく「歌日記」の文化十年に、「仏御殿月次御題二月より」として、「江上春曙」から「除夜仏名」まで十二の題と歌とが列記されていることから分かる。

【一二】

『御日記』文化十三年（一一八六）正月十九日〔写真2〕

一、御所様

御先番兼

青蓮院宮様江御成 治部〔のしめ 半上下〕

御先方御出迎

坊官不勤仕之由

並河掃部御断。掃部御出迎

御供 此母

左内〔初□祝伴□間計出ス〕

直様

東山御廟参

御徒士 三人

御網代御輿

御沓 御長柄

四人 御草り取

合羽籠 押

三人 押

先より安住台へ御成

八ツ半より君様安住台へ御成

御供 兵部

一馬

正親

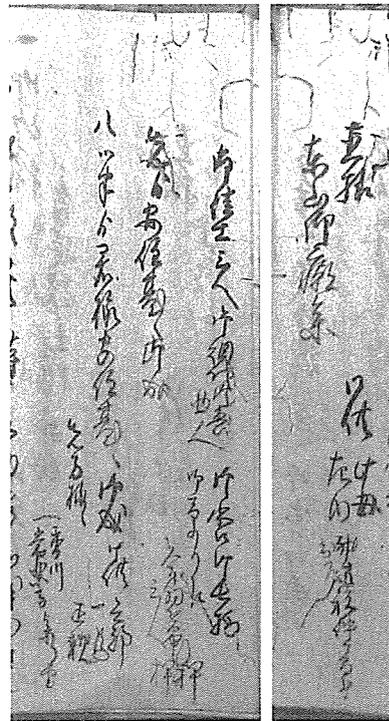
先方様へ

香川

常楽寺

参り候由

〔写真2〕「御供 此母」から「香川 常樂寺 参り候由」まで。



『歌日記』

なし

\* 「治部」は仏光寺家司の辻治部、「並河掃部」は未詳であるが、『地下家伝』に載る青蓮院待法師なみかわ河靖栄かもしれない。「此母」以下の御供は近習である。「君様」は千恵君、後の仏光寺二十四代随念上人ある。文化二年生、弘化二年、四十一歳で遷化した。父は仏光寺二十三代随念上人、母はその室で伊勢安濃津藤堂高疑の長女聞名信院である。「安住台」は第三節でふれた。「常樂寺」は仏光寺御堂衆の恵岳である。和歌を好み、蒿蹊・景樹などの歌人たちと親しかった。

【一三】  
『御日記』文化十三年（一八一六）三月二十日

一、岡崎香川長門介宅へ「兵部 雅楽」参ル。右者明日御成ニ付乍遠方彼寺江可致推参様々之儀ニ付而也。

『歌日記』

なし

\* 「兵部」は家司の小幡兵部、「雅楽」は近習の宇野雅楽である。「明日御成」は随念上人の法蔵寺への御成で、『御日記』の同じ三月二十日に次のようにあるのを受けて言う。

- 一、大坂講中内錫屋庄兵衛・錫屋治郎兵衛上京ニ而御所様久々御省略中ニ付御鬱情も可被為在、右
- 二付我山辺ニ而も御成御招待申上度旨ニ付上京。尤
- 輪番同道右之趣言上。然ル処、御時節柄此節
- 峨山杯と申事者世間如何敷被思召旨、輪番江
- 相達。右ニ付御室辺和泉谷法蔵寺と申
- 寺、甚眺望杯宜敷旨ニ付、是江御成之儀願、即
- 刻御治定、則明日被仰出。

「輪番」は大坂御堂（大坂別院）の輪番であろう。別院の住職は門主の兼務であるため、かわって輪番が置かれる（『佛光寺辞典』）。「峨山」は未詳。嵯峨山か。「法蔵寺」は、現右京区鳴滝泉谷町、西寿寺の南、泉谷にある黄檗宗の寺である。

【一四】  
『御日記』文化十三年（一八一六）三月二十一日〔写真3〕

一、法藏寺へ御成。御出門巳半刻 御供廻如左

御徒士 三人 御輿 四人

御輿脇 佐々木正親 山田貢

森下左内 関口右馬之介

御草履 七人 御箱 七人

君様 御輿 四人

御輿脇 三人 大東丹下 小幡富二郎

宇野雅楽

草履 七人 御箱 七人

御茶弁当 七人 合羽籠 五人

御膳番 安川泰一郎

御先番兼帯 北村此面

井上主膳

御供

小幡兵部 若党七人 女中供七人

草り七人 但馬 龜田 みを

長持 二荷 人足 四人

但先へ行

還御寅ノ刻

一、御所様・君様江種々彼寺ニ而御馳走。画工東在敬

と申者参ル。於御側席書。香川長門介讚。在敬

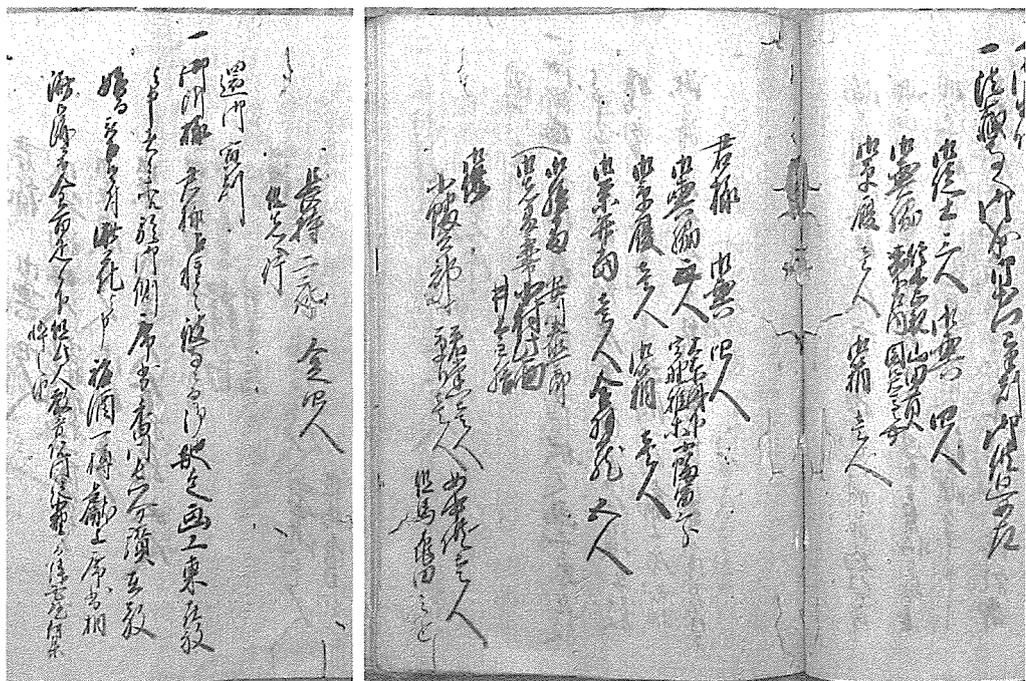
始而被召候ニ付、此花と申口酒一樽献上。席書相

濟候跡ニ而金百疋被下。但此人教音院門徒北野ニ而津国屋何某

悴之由

[写真3]

「歌日記」



なし

\*「東在敬」は、澁谷曉眞門主によれば、原派の絵師原在敬で、仏光寺に在敬画紙本豎幅の松鶴の図が現存する。□は「福」か。

この遊山は一見極めて盛大であるが、供の人数や格からすれば、随応上人・千重君二人一緒の遊山としては平均的なものなのではないかと思う。おそらく廟参、遊山など種々の外出にそれぞれ定まった格式があつて、ここでもその格式に従っているであろう。それにもかかわらず盛大に見えるのは、記述が例外的に詳しいせいである。そして記述が詳しいのは、これが講中の勧めにより実現した、いわば法中・門下公認の遊山であつたことによるところであろう。ちなみに言えば、その公認の遊山で行われたのが「席書」であつたことは、次の【一五】ともかかわって注目される。

【一五】

『御日記』文化十三年（一八一六）閏八月二十六日

一、今巳刻御出門<sup>三</sup>而清水山江御成。延命院御休所。

尤御忍。君様御違例<sup>三</sup>付御成なし。

御供 稲田大藏卿 小幡兵部

木村貞之進 後北村此面

前 三谷監物 清水将曹

辻 一馬 小幡富三郎

関口右馬之助

香川長門介 円山主水

円山辰二郎参ル

於山頭<sup>三</sup>席書。香川宗匠夫々讚在。

法中・御門下左之通。

越後新潟 泉州堺

願隨寺 光林寺

江州磯村 棋州天王寺

喜光寺 光円寺

京 越前府中

常楽寺 光善寺

新発意

草津

山内孫左衛門

林寺

村田伝兵衛

新庄

河村吉蔵

石山<sup>三</sup>におゐて 御側江被召御酒被下。一統

席書拜見。

正行院殿・鶴丸殿御誘引。

山上<sup>三</sup>而種々御馳走献上。黄昏延命院へ

御成。其より御膳且御膳後又席書。

其後、法中・御門下一統江 召於

御前、席書二枚ツ、被下。暫有<sup>而</sup>還御。子刻過。

「歌日記」文化十三年閏八月二十六日

後八月廿六日。仏光寺の君茸狩にとて清水山に入らせられける日、彼山にて画賛。

月に千鳥二つあるかた

照月に鳴くや千鳥の一つがひなるゝとすれど寒き夜半哉

茱萸袋

けふといへど楽しかりけり憂事をさけてものぼる山路ならねば

色付たる稲

豊年のとよあしはらの秋風のなびく瑞穂の国のゆたけさ

椿に柳

あひに逢ひて玉の緒柳玉つばき光りかはせるけふの楽しさ

紅葉の枝にめじろ

寂しさよ友をはなれぬめじろだに独来て鳴く秋の夕ぐれ

萩一本

大かたはうつろひはてし秋萩のさかりを残す一本ぞこれ

紅梅

青柳のみどり桜のしろたへもおもはぬうめの濃染なりけり

山家に橋あるかた

まれにだにとふ人もなき此の庵の前の掛橋苔むしにけり

しめじ

誰かしめし山におひ出で世の中にことくしくも名には立つらん

松に蔦はいたる夕のかた

山の端に夕日のかげはかくろひて残る誠の秋の夕ぐれ

黄菊

世の中の露にうつりて咲匂ふ菊も黄葉のいろにならひぬ

亀二つ遊ぶ

親亀にしたがふ子亀万代の道をかねても習ひけるかな

權

世の中に今とりはやす色々のすがたもあれどもとの權

仏光寺の御殿にて 薄秋風に靡きたる所

花すゝきふきしく風に打なびきあまねく人を招きける哉

時雨の紅葉にまじれり

むら時雨をのが染たる色なれどあまり心にまかせける哉

鮎二つ水にうかぶ

ひさかたの月の中なる桂鮎いづくまでとか猶のぼるみむ

紫ふぢ

陰高き松にはよらぬむらさきのうへなく見ゆる藤浪の花

若まつ

若松のほつゑ斗ぞ見えにけるいかにをしめる千年成らん

桜にうぐひす

心なく踏しだく哉うぐひすの花のえだとも思はざるらむ

玉

皆人のこゝろの外に求めけりおのがつゝめるたまの光を

孔雀の羽に珊瑚樹

誠をば玉とみがゝん一羽をば挙るにたへぬ力なれども

月前擣衣。薄あり

衣うつ袖にたぐひて靡く哉月の前なるしのゝ小すゝき

川蟬に撫子 以上

そに鳥のみどりもそひて行く水の汀になびく河原撫子

清水山にて

鳥辺やまかなしかるべき所にて楽しくけふを暮しける哉

\*「歌日記」の「仏光寺の御殿にて 薄秋風に靡きたる所」以下の画讃と「清水山にて」の一首は、この時の詠ではないかもしれないが、念のため掲出した。「御日記」の「円山主水」は応瑞である。「円山辰二郎」はその男応震と思われるが未詳である。

『御日記』を見ると、これが違例の遊山であったことがわかる。御供の稲田大藏卿、小幡兵部は第二節に掲げた『御日記』文化九年五月二十三日にも出ている。稲田大藏卿は仏光寺坊官で、仏光寺家中の最上席を占めている。小幡兵部は家司で、同じく俗の側における序列は、稲田大藏卿、ここには名前の出ない辻治部について上から三番目である。この二人が供につき、加えて応専連枝・鶴丸父子が呼ばれている。「君様御違例二付御成なし」というの

も、本来なら「君様」すなわち千重君も参加のはずのところ、といった意味であろう。さらに加えて、願隨寺以下の法中・門下も同伴している。この盛大な自体違例であるが、これほどの盛大さにもかかわらず、隨応上人は「御忍」とされている点になにやら普通ではない雰圍氣を感じざるを得ない。

この遊山は、『御日記』文化十三年閏八月二十五日に、

一、常樂寺參 殿三而、明日今度上京之法中

並御門下共、清水山辺江御成願度旨申出、  
則 御許容。

とあるのによれば、前日の常樂寺惠岳の申し出、または惠岳を通じての法中・門下の申し出により急遽決定した。しかし、それほど短時間に準備できたとはどういえない。

これは、懸案であった「借財濟方」が、この前々日の二十四日に「借財濟方請書」が出されて解決したことを受け、それにかかわって奔走した法中・門下、あるいは借財濟方を引き受けることになった法中・門下を慰労するための遊山であった。事実、「法中・門下左之通」として列記されている人々のうち、遊山の提案者である惠岳とまだ若年であろう光善寺新發意のほかは、その請書に署名のある人々である。これほど盛大でありながら隨応上人は御忍び、というのも、おそらくこうした遊山の趣旨にかかわって、本山の公式行事ではないことを表明しようとしてのことであろう。

景樹にかかわって注目されるのは、この遊山が、円山主水・辰二郎と景樹との「席書」を中心に構成されていることである。違例と言えば最大の違例がこの点であろう。同伴の門下の一人である草津の山内孫左衛門の同族山内半助は、請書にも署名している人物であるが、母を亡くしたため一時上京を差し控えた孫左衛門を残して先に上京し、隨応上人に面会して『御日記』文化十三年

八月二日)、借財濟方のため働いた。ところがこの遊山には参加していない。問題解決後早々に帰郷したのではないかと推測される。その半助に渡すべく、次のように画讃二枚が孫左衛門に託された。

一、山内孫左衛門、御朝時後被 召於白書院二

御対面。清水山之御挨拶厚被為在。然而

其節之画讃二枚、半助へ被下候旨。

(『御日記』文化十三年九月四日)

これも席書が遊山の中心であったことを示す事実であろう。

『御日記』の筆者たちに、景樹はかなり冷遇されていると言わざるを得ない。和歌は隨応上人個人の好ましからざる癖と見なされていたと思しく、年に一度の初会以外に景樹と会うためには、本廟廟參や青蓮院宮への挨拶のついでという形をとるなど、隨応上人の苦勞は相当なものであった形跡がある。にもかかわらず、なぜここではその景樹のかかわる「席書」が中心とされているのか。この問題は今後の課題としたいが、【一四】の法中・門下公認の遊山においてもやはり席書が催されていることは、この問題にかかわって重要な事実なのではないかと思う。もう一つ、この問題と密接に関連すると思われるのは、「歌日記」によれば景樹は仏光寺のためにおびただしい数の画に讃をしている、ということである。例をあげると、文化四年四月十八日二十三首、文化九年月日未詳には十六首、文政元年月日未詳には三十三首、隨応上人示寂後も、文政十年正月十一日に十一首のごとくである。これらは隨応上人あるいは隨念上人の手許に留められたのではなく、しかるべき折りに法中・門下へ下賜されたのではないかと想像される。

(付記)

『御日記』をはじめとする本山仏光寺所藏資料の閲覧につき、澁谷曉眞

門主と御家族に格別のご配慮を頂いた。ここに記して深謝申しあげる。なお、本稿は平成十六年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)による研究成果の一部である。

注(1) 各年の伝存の状況は次の如くである。

- 文化 七年(二八一〇) 元日〜大晦日 一冊  
八年(二八一二) 元日〜大晦日 一冊  
九年(二八一三) 元日〜八月二十九日 三冊(下書き)  
十二年(二八一五) 元日〜大晦日 二冊  
十三年(二八一六) 元日〜十二月二十七日 一冊  
十四年(二八一七) 元日〜七月二十八日 一冊
- (2) 彌富濱雄編『桂園遺稿』上巻・下巻(五車楼 明治四十年三月・同八月)。
- (3) 『鳥取大学教育地域科学部紀要』第五巻第一号 平成一五年五月。以下「前稿」と略記する。
- (4) 文化五年正月十八日(常楽寺菊岡会始)、文化十年九月十九日(隨応上人御成による当座)など。
- (5) 第四節の【一一】で述べるように、景樹が仏光寺において催される歌会に出席していたのは初会のみであって、それ以降の月次会には呼ばれていなかったのではないかと思われる。
- (6) 澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)
- (7) 拙稿「香川景樹「歌日記」の「年づけ」」(『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)』第四十七巻第二号 平成八年一二月)
- (8) 仏光寺『御日記』、澁谷有教編『佛光寺辞典』など。
- (9) 前稿第五節「仏光寺と景樹 その三」参照。
- (10) 前稿第三節から第五節までにとりあげた。
- (11) □はいったん「末」を記し、それを○でくくっている。抹消しようとした形跡もあり、○の意図するところは不明である。
- (12) 村山修一「妙法院日次記」(『日本歴史「古記録」総覧』 新人物

往来社 平成二年一月)。

- (13) 前稿第二節「仏光寺『御日記』について」参照。
- (14) 正宗敦夫「桂園史料」(『萬年艸』巻第六 明治三十六年六月)
- (15) 坂本武雄編・坂本清和補訂『改訂増補 公卿辞典』(国書刊行会 昭和四十九年一月)による。
- (16) 景樹が離縁後も景柄を「父」と呼んでいたことは、拙稿「香川景樹「歌日記」の因幡と因幡人」(『鳥取大学教育地域科学部紀要(教育人文科学)』第四巻第三号 平成一五年三月)。
- (17) 正宗敦夫編『地下家伝』(自由新報社 昭和四三年一二月)による。
- (18) 『しがらみ草紙』第三十一号(新声社 明治二五年四月)。『近代文芸雑誌複製叢書』第二十次 臨川書店 平成七年七月)による。
- (19) 拙稿「香川景樹「歌日記」の「年づけ」」(注7)。
- (20) 「歌日記」文化七年正月のそのほかの部分、日にちの明記されている場合のみそれを列記するなら、九日、十二日、十四日、十五日、二十日も、文化八年正月である可能性があるが、これらについては現時点では考察のための手がかりがない。
- (21) 山本嘉将『香川景樹論』(育英書院 昭和一七年一二月)、黒岩一郎『香川景樹の研究』(文教書院 昭和三年一〇月)、兼清正徳『香川景樹』(吉川弘文館 人物叢書 昭和四八年八月)、竹岡正夫編『古今和歌集正義講稿』(勉誠社 昭和五九年九月)など。
- (22) 野間光辰編『新修京都叢書 第二十三巻 古地図集』(臨川書店 昭和五一年六月)。
- (23) 注(22)に同じ。

『地域楽論集』第一巻第一号 平成一六年一二月)

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——文政元年から五年まで——

## 一 はじめに

真宗仏光寺派本山仏光寺の『御日記』から、香川景樹にかかわる記事を抄出して、景樹の「歌日記」<sup>(1)</sup>と比較対照する。今回取り上げるのは、次の拙稿二編<sup>(2)</sup>に続き文政元年（一八一八）から同五年（一八二二）までの五年分<sup>(3)</sup>である。

〔1〕仏光寺『御日記』の香川景樹——文化六年まで——（『鳥取大学教育地域科学部紀要』第五巻第一号 平成一五年五月）

〔2〕仏光寺『御日記』の香川景樹——文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで——（『地域学論集』（鳥取大学地域学部紀要）第一巻第一号 平成一六年一月）

文政五年は景樹と親しかった第二十三世門主随応上人遷の化の前年である。この間の五年のうち、文政元年と五年の『御日記』に景樹の名は見えない。たしかに元年はそのうち約九ヶ月間、景樹は京都にいなかった。江戸に自己の歌論・歌風を弘めるべく二月十四日に岡崎を発ち、三月十日江戸目白台の児山紀成宅着、目的を果たせないまま十月二十三日そこを發つて、十二月十五日に帰京した<sup>(4)</sup>のであるが、しかしこの九ヶ月の間、仏光寺と景樹とのかわりがなかったわけではけっしてない。

たとえば、往路の日記である『東路の記』に、岡崎出立の際の見送りの人々として名のあがっている二人の僧侶、光福寺宗達と常楽寺恵岳とともに真宗仏光寺派の僧である。また、寄留先であ

る児山紀成も仏光寺と関係の深い人物で、その一端については前稿〔1〕に記した。さらに一例をあげるなら、次のように『東路の記』二月十五日から十六日にかけて登場する草津の山内春素、頼喜、紀伊子、知義は、草津の有力門徒である山内孫左衛門の同族ではないかと思われる。頼喜は孫左衛門その人かもしれない。山内氏は『御日記』にしばしば見え、前稿〔2〕の【一五】にもその一部分を引用した。

田中 仁

草津のさと山内春素がもとにやどる。よくあるじゝたり。父頼喜の五十賀の歌をこふ。こはをとつとしねがひたりしを、今までおこたりたまへりしなり。大人、此かどにながれてしづ河のしづかにへなん千世をこそおもへ

妻なる紀伊子も今年おなじ賀なれば、大人、  
浅みどり春の草津の里なれていくよ迄とか若がへるらん  
十六日あした、あるじ方よりよみて出せる歌

春素  
うき物と名にこそたてれ花故の草の枕はのどけからまし  
東なる桜みむとて君ゆかばみやこの花ぞうらむべらなる  
知義

隅田河すだのわたりの花よりも君が言葉の色やまさらん  
紀伊子  
春素 知義は石部までおくり、意誠 帰厚はこゝにて

わかれたり。

このように、景樹の江戸下向にも仏光寺はさまざまな形でかわっているらしいのであるが、「歌日記」を見るかぎり本山仏光寺や随応上人は直接には登場しないし、『御日記』に景樹は出てこない。

もう一箇年、文政五年も『御日記』に景樹の名は見えない。しかし、実はこの文政五年には、景樹にとって随応上人とかかわって重要な出来事があった。「歌日記」十二月二十七日に次のようにある、随応上人への『新学異見』の講義と竟宴である。この件について、ここに記しておきたい。

仏光寺御殿にて

かしこくも我『新学異見』をとき聞え奉りし竟宴玉はりし今宵しもいとはやく更ぬる心地し侍りければよみて奉りける。ときはしはす廿日まりむゆか春立けるあくる日也けり。

暮て行としの内なる春の夜はいとゞも夢の心地こそすれ

感慨あらわな筆致から、この講義と竟宴が景樹にとってかくべつに重い意味を持っていたらしいことが推察できる。

しかし、それは『御日記』がこの件を書き留めるかどうかとは、また別の問題である。もしも書き留められているとしたら、少なくとも竟宴の日が十二月二十六日と二十七日のどちらだったかは判明する。「歌日記」十二月二十七日と先には記したが、それは「春立ける」日を、『日本暦日原典』、『増補 日本暦日便覧』<sup>(5)</sup>にしたがって二十六日として、詞書の「ときはしはす廿日まりむゆか春立けるあくる日」を、「時は、十二月二十六日に立春をむかえた、その翌る日」ととったからであって、この詞書を、「時は十二月二

十六日。すなわち立春の翌る日」と解釈することも、語調のうえでは十分に可能なのである。もしも『御日記』に講義・竟宴の記載があればこの問題も解決する。そしてもしも記述がさらに詳しく、講義の日数や仏光寺法中・家中の講義への陪席の有無、「宴」に列席した人物の名が判明したなら、それらは景樹と仏光寺、仏光寺派との関係を考えるうえで重要な手がかりになるはずである。万が一書き留められていなかったとしても、それはそれで、『御日記』の筆録者にとって景樹や『新学異見』、また門主が景樹に『新学異見』の講義を受けたことは、その程度の価値しか有していなかったということを示す重要な事実である。

しかし、文政五年の『御日記』は十二月を欠いている。注(3)に示したように、この年の『御日記』は二分冊になっており、第一冊は正月朔日から八月二十四日まで、第二冊は八月二十五日からはじめり大晦日の記事で結ばれている。一見したところでは壱年分がそなわっているようにみえるが、その第二冊は、十月十一日まででは連続しているものの、続く十二日から十二月二十九日までの約一ヶ月半がなぜか欠けているのである。『御日記』にはなくとも、仏光寺にとって特に重要な行事や儀式、出来事について、別に詳しく記録される場合もあって、たとえば本稿に関連する出来事としては、【二二】の随念上人の得度について「別記二委細有之候也」とある。しかし、そのように『御日記』とは別に記録があるのは、知られるかぎりでは本山か門主一族にかかわる重要事の場合であって、『新学異見』の講義・竟宴といった、いわば門主個人の趣味については、そうした記録もおそらくないであろう。現在知られる資料によるかぎりでは、この『新学異見』一件については、「歌日記」の記述以上に詳しいことはわからない。ちなみに、「歌日記」の『新学異見』講義・竟宴の直前には、次のような仏光寺参殿、詠歌の記事が置かれている。

早梅 仏光寺御殿にて

うめの花君にまたれて鶯のこゑより先にほころびにけり

歳暮忙 同

百敷の大宮人もいとまなきとしのをはりに成にけるかな

これが竟宴と同日のことであつたかどうか、不明である。「早梅」という題は、立春の前後どちらにも詠まれるから、十二月二十六日より前のことであつた可能性もある。いずれにせよこの『新学異見』の講義・竟宴にかかわる記事は『御日記』にはない。

## 二 仏光寺『御日記』の香川景樹

仏光寺『御日記』文政元年から文政五年までの香川景樹関係記事を抄出し年月日順に並べる。【一】で括って示す番号は、前稿【1】

【2】からの通し番号である。抄出の基準は前稿【2】に記した。

「歌日記」に対応する記事がある場合は、それを併せて掲げ、無い場合は「なし」とする。文字の大小、配置は印刷の便宜に従い、必ずしも原本のままではない。『御日記』の□は判読できない文字である。同じく『御日記』の、割り注など一行分に二行以上書かれている部分は「」で括って示す。両日記からの引用の後ろに、記事の内容等につき必要に応じて\*を付して説明を加える。

【一六】

『御日記』文政二年（一八一九）正月十日

一、御会初<sup>ニ</sup>付香川長門介奥向へ参上。

「歌日記」文政二年正月。日未詳。

雪消春水来 仏光寺の御兼題

鳴滝の岩こす波は峰の雪うちとけたりとつぐるなりけり

おとは川山はみどりになるまゝに雪げに濁る水の色かな

寄道祝 おなじ御当座

通ひこぬ他の国こそなかりけれ開けし御世の道求めつゝ

草も木もなびく陰より君が世の誠の道はあらはれにけり

\*仏光寺の歌会始の記事は、前稿【1】の【一】には、

一、御歌初<sup>ニ</sup>付香川長門介参。於書院御のし昆布被下。鏝之

間<sup>ニ</sup>御祝酒。夫より奥へ参。

とあり、【四】には、

一、御歌初<sup>ニ</sup>付香川長門介参上。御側<sup>ニ</sup>御酒被下。

とある。「のし昆布被下」の有無、酒の場の「鏝之間」と「御側」の違いは、式次第あるいは景樹の待遇の変化、つまり実態の変化にともなうものなのか、または「御祝酒」と「祝酒」の意味の違いや書き様の違いによるところなのかわからない。このことは【四】に述べた。この【一六】では、単に「奥向へ参上」とのみあつて、のし昆布や酒にふれないのは、それが無かつたからなのか、あつたけれど書かれなかつたのか、不明である。

「歌日記」では未詳であつた文政二年の仏光寺歌会始の月日が、『御日記』によつて一月十日と判明するのであるが、では「歌日記」はこれを時間順に正しく配列しているのであろうか。

「歌日記」のこの記事の前に、日にちが明記されているのは、「四日。南禅寺の雪見に」である。歌三首が書きとどめられている。次に「子日若菜」「雨中子日」各二首と日にちが記されない歌がつ

づき、その次にこの仏光寺初会の歌四首が置かれている。いっぽう後ろは、「夏の柳の面に」一首、「毎年愛梅 菟会の兼題」一首、「十五日の夜」二首となっている。文政二年最初の子の日は正月七日<sup>(6)</sup>である。「子日」の歌は必ず子日に詠むわけではないにしても目安にはなる。このあたり、日付順に配列されているようである。なお、「歌日記」において、このように所々に日付を入れて時間順に歌をならべている場合、日付がないのは前の歌と同じ日の歌であることを意味する、というのが原則である。この場合、その原則に反するのは、「子日」、「仏光寺（初会）」がそれだけで日を暗示しているからではないかと思う。

【一七】

『御日記』文政二年正月十九日

一、青蓮院宮様へ御成

御徒士<sup>麻上下</sup> 三人 御輿 四人<sup>のしめ麻上下</sup> 御輿脇式人

〔嘉継 司馬〕 御箱 御草り取 御茶弁当

合羽籠 押 式人

御先番

兵部〔若党式人 草り取老入〕

御出門午刻。夫より御廟参。其後、岡崎香川長門介

□中之内、聖護院村ニ眺望よろしき処有之候ニ付御成。

継上下

若御所様御廟参。 御徒士 式人

御包

御輿 三人

御輿脇 式人

三郎 丹下

小供兩人 千太郎  
丹治郎

御草り取 老入

御箱 老入

合羽籠 老入

押 老入

御出門午刻半。

夫より

還御掛ヶ同所へ御成。

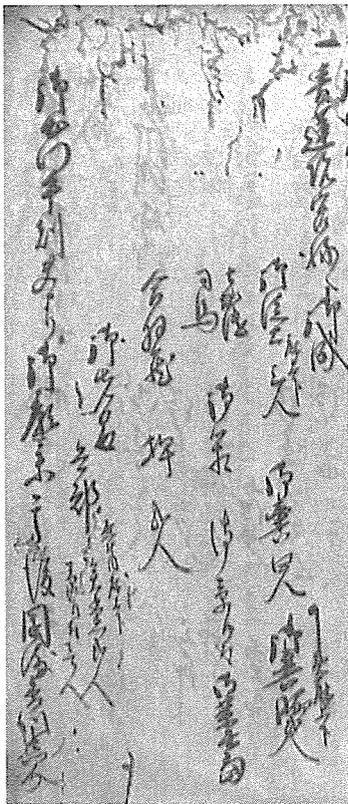
岡崎へ御先番 左京

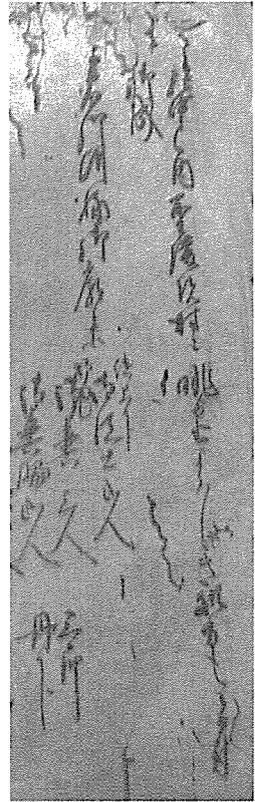
東山御先番 勘解由

「歌日記」

なし

\*左に冒頭から「三郎 丹下」までの写真を掲げる。「□」は「浴」のようにも見えるが判読できない。「若御所様」は千重君、後の第二十四世門主随念上人である。「御廟参」は東山御廟所への参詣、「還御掛ヶ同所へ御成」は、御廟所からの帰途、岡崎の香川景樹宅へ御成、の意である。





【一八】

『御日記』文政二年四月朔日

一、聞名信院様御一周忌御法事。今御待夜より御影堂ニ  
おゐて御執行。御待夜御出仕。

同四月二日

一、聞名信院様御詞堂経開闢。尤明年よりも今日御執行  
被為在候。右開闢御斎、法中一統・御次中惣一統惣菜。  
但し惣菜者当年計ニ相限候事。

同四月三日

一、御法事御満座ニ付御廟参。  
兩御所様 御供廻り御忍口也。 各継上下。 東山ニ而麻上下  
着用。御先番 貞之進。 御輿脇〔左内 司馬 丹下 鞞負〕  
御徒士式人也。

「歌日記」文政二年月日未詳

薄暮卯花 仏御殿御裏御一周忌  
御園生のたそがれ時の卯の花を君が袖とも思ひける哉

\*「聞名信院」は随応上人室の禱子で、『佛光寺年表』『佛光寺辞典』(7)等によれば、文政元年(一八一八)四月三日に没した。その一周忌の法事は、右のように四月一日から命日の三日まで、三日間にわたって営まれている。景樹の名はそのどこにも出ていないが、「歌日記」文政二年の「仏御殿御裏御一周忌」は、この聞名信院の一周忌以外には考えられないのでここに掲げた。なお、『御日記』によれば、次のように三月三日にも聞名信院の法事があつたが、これは「奥向」のことであり、景樹はかわり得なかつたであろう。

一、聞名信院様御一周忌御引上。奥向ニ而昨日御待夜より今御  
日中迄御引上御執行被為在口。 御家司奥向ニ而御斎被  
下候事。

「歌日記」の「御園生の」の歌の直前は、詞書に「かへるさ野  
べにて」とある。「山の端のうす紫もさめにけりすみれつむ野の春  
の夕ぐれ」「山河の花の白波ながれきてはやくも夏にかゝりけるか  
な」の二首で、それぞれの歌に小字で「夕野遊」「首夏水」という  
題が書き加えられている。詞書の「かへるさ」は、すぐ前の「又  
の日禅林寺にて」を受けて禅林寺からの帰途の意である。それが  
何日のことだったのか不明であるが、第一首の「春の夕ぐれ」、第  
二首の「はやくも夏にかゝりけるかな」から、まだ春のうちだが  
夏の直前、と推測される。したがって、その次に四月一日から三  
日までの法事の際の歌を置くというのは、月日の順という点では  
妥当な処置である。

ただし、すぐ次には、「七夕別」「夜虫」「枯葦」「忍恋」「後朝

恋」と続く、秋に詠まれた題詠らしい五首が置かれ、さらに「深夜春雨 二月々次兼題」「野遊糸 同」「花時遠行 三月々次兼題」「折款冬 同」とある二月、三月の月次会の兼題の歌、またさらに「桜を画きたる小ぶすまに」と詞書のある画賛が置かれている。これはどのような事情によるものか不明である。仏光寺となんらかのかかわりのある歌なのかもしれないが、それも分からない。

【一九】

『御日記』文政二年四月九日

一、山内半右衛門 市田屋源治郎 米屋吉右衛門等催ニ而峨山江  
兩御所様御成。御出門正卯半刻。還御子刻頃。

御供

嘉繼

御徒士 貳人 御輿 八人 御近習 六人 左内

司馬

御草り取貳人 御茶弁当老人 御箱老人

左内

貢

押貳人 合羽籠三荷

三郎

將曹

御先番 此面草り取老人

御供 兵部若党 老人

御長持老荷 其外兩三人も参ル

一、峨山にて三軒亭之内一軒かり候而、縮緬覆幕  
相掛。甚御質素之御扱也。歌宗匠香川長門介参ル。

「歌日記」文政二年四月。日未詳

卯月の頃、仏光寺御門主嵐山へならせ給ふにまかり出給ふ、

其みちにて

今日さらに昔のあすを思ひ出て昨日の夢の心地こそすれ

太秦にて

呉竹のかげにかくれて咲にけり春にしられぬ花の一もと

野辺にて

ゆくも心にのみぞかゝりける山時鳥ふちなみの花

三軒屋にて

ひるがへる若葉の隙にみゆるかなおろす嵐の山かげの舟

河辺にて

あひに逢て声と影とをかはず哉友なし千鳥かたはれの月

\*『御日記』に列記されている「嘉繼」以下「將曹」までは御供の「御近習六人」の名である。左内が二度出ているのは『御日記』筆者の誤りであろう。これら六人のうち、司馬・將曹以外の四人は、仏光寺近習である。この年文政二年、そして翌三年の「御家中」年頭礼の記事にも「御近習」として氏名が列記されており、その前後の順もこの記事と一致している。將曹は文政二年の年頭礼には見えないが、三年には近習の次の「中奥」「中居」のさらに次に、「無格」として名があがっている。ところが司馬は、どちらにも見えない。そのため、当時どのような立場にあったのか未詳である。『御日記』にはしばしば登場し、たとえば【一七】【一八】にも見えて、近習と同格の扱いであるが、おそらく左内との上下関係に曖昧なところがあって、そのために左内が二度出るといこうした誤りが生じたのではないかと推測される。なお、「此面」の下の「草り取老人」は原本もこの位置に記されているが、その左の「兵部」すなわち家司の小幡兵部につけられた草履取りであろう。「此面」は近習の北村此面であって、近習に草履取りはつかない。

「歌日記」では「卯月の頃」とあるのみで日にちのわからない

嵐山行が、『御日記』によって九日であったことが判明する。九日とすると、『歌日記』における位置とも矛盾しない。「歌日記」第一首の歌意もこれで明らかになる。『花の跡』の嵐山遊覧は四月十日（文化六年か）であるから、第二句の「昔のあす」はこの時を指していると考えられる。

山内半右衛門、市田屋源治郎、米屋吉右衛門は未詳。「峨山」は前稿〔2〕の【二三】で嵯峨山かと推測したが、これによると嵐山である。「嵯峨山」という歌枕自体、広く嵯峨あたりの山ではなく嵐山を指している場合がある可能性もある。

「三軒亭」「三軒家」は、嵐山の茶屋である。『京城勝覧』の「臨川寺」の項に次のように見える「三軒茶屋」であろう<sup>(8)</sup>。

川ばたの景よし。此河上に茶屋三軒あり三軒茶屋といふ。景よし。前に大井河。むかひに嵐山戸難瀬の滝見ゆ。茶屋の東藪の中に。小督が住たりし庵のあとあり。此河舟をうかべて両山の間舟上景よし。花ざかり又月の頃遊人おほし。

「歌日記」の享和元年（一八〇一）三月二十八日に、

麓の三軒屋といふにて宿かさざりしことをおもひて  
今ぞしる宿をしみしは山にねて初郭公きけとなりけり

とあるのによれば宿泊も可能だったようである。

この茶屋は、前記の『花の跡』の遊山でも利用され、文中に次のように登場する<sup>(9)</sup>。「御詠」は随心上人の詠の意である。

かくて大井川のむかひなる雪月花の三軒家といふ内なる花の  
宿に入らせ給ひて  
御詠

花ちりて人はとひこず成ぬれど山と水とはかはらさりけ

り

又かの三軒家に入らせ給ひて改めよそひて帰りまさんとす。

惠岳

大る川月の照せる此ゆふべ千鳥さへこそ鳴わたりけれ

【一八】の後の方に記した「七夕別」以下の題詠・画賛の次には、詞書に「ある日残の花見に出給ひて」「かへるさ」とあるように実地を踏んだ属目の歌がつづき、さらにその次に「暮夏」「余花」「新樹」「卯花」「残鶯」の題がならんでいる。題の「余花」以下の四つは晩春から初夏にかけての景物であり、かつ歌に「すぐなる畑の青麦けふみればほに出初て夏はきにけり」とあるところから、「暮夏」は「首夏」の誤りと推測される。そしてその次に、この【一九】の嵐山行がおかれている。時間の順に配列されているとみても不自然ではない。この後も、「雲林院にて 散りのこる一もと桜かげもなき雲の林のなごりなるかな」まで三首、初夏の歌が続く。次の「若林周子の髪おろされたりときゝ給ひて」は、歌に季節を表す言葉がなく、若林周子が落飾した年月日も不明であるが、その次は「杜鵑声似哭 宗明尼七回忌」、「湖月 四月十五日当座」となっており、時間順と見て不自然ではない配列になっている。

【二〇】

『御日記』文政二年六月七日

一、瓜一籠 小堀中務より進献ニ付香川長門介江暑中為

御尋被下候。

「歌日記」

なし

\*「小堀中務」は、『御日記』文政二年四月朔日に、

一、小堀中務使三而、

倅主税、御代官旁中務同様 御所方勤見習被  
仰付候吹聴。

とある。仏光寺との関係は未詳である。

【二一】

『御日記』文政二年七月二十六日

一、今日東山御廟所へ御参詣。夫より岡崎村

香川長門介江御成。還御夜八ッ時。

「歌日記」

なし

【二二】

『御日記』文政三年（一八二〇）三月七日

一、千重君様御得度無御滞被為濟事。右ニ付別記ニ

委細有之候也。

「歌日記」文政三年。月日未詳

春松千年 同御殿新御門主御得度

おしなべてたのみ陰なる松なればことなる千代の色やそはまし

\*「歌日記」の「同御殿」はこの前に、次の【二三】に掲げる聞名信院三回忌の歌の詞書に「仏御殿御年回」とあるのを受けている。したがって「同御殿」は「仏御殿」すなわち仏光寺である。

『御日記』に景樹の名は出ていないが、「千重君様」は第二十四世門主随念上人であるから、「歌日記」の「同御殿新御門主御得度」が、『御日記』の「千重君様御得度」であることは確実であろう。仏光寺にかかわる重大な出来事の年次を知るには、『佛光寺年表』によるのが最も便利で、この随念上人の得度も、文政三年三月七日であることが『渋谷歴世略伝』に依拠して示されている。その事実が『御日記』によっても確認できるわけである。

景樹の歌が詠まれたのが実際に三月七日当日であったかどうか不明であるが、前後いずれにしてもそれほど遠く離れてはいなかったであろう。「歌日記」は、これを時間順に前後正しく配置しているであろうか。

この記事の前にあつて月日を明示されているのは「十五日」（二月）の「誠子」との贈答で、その後、「故郷花」以下、題が二十一、ただしそのうち一つは題のみなので歌は二十首が続き、次いで「長樂寺の開帳に参りて」と詞書にある「東山花の錦のとばりさへかゝげ上げてみする春かな」という春の歌、さらに続いて画賛三首がある。編者の注記によるとここまでは筆者不詳である。そして、この次に、同じく編者の注記によると木下幸文の筆で、次の【二三】に掲げる「寄郭公懐旧 仏御殿御年回 ほととぎす古き軒ばを過ぎがてに昔忍ぶのねをのみぞ鳴く」「往事如夢 同 さらばとて今をうつととなければも過し其世ぞ夢にはありけん」の二首、そしてその次にこの「春松千年」の一首が置かれている。

その後、月日を明示するのは九首を隔てた、「盧橘遠薫 月次兼

題 五月十五日」である。その間の九首の題・詞書を列記すると次のようになる。

ある所へかたみの物をつかはすとて

さみだれの比思ふことありて

夕帰雁

首夏

沢蚩

樹陰納涼

行路菼

「さみだれ（五月雨）」の次の五首は、最初が春、次の三首が夏、五首目が秋の歌であるが、これは、「御殿御法楽 以下五首」とあるように、「御殿」すなわち徳大寺家で催された法楽のための歌がまとめられた結果である。つまり「歌日記」のこのあたりは、基本的には時間順に配置されていると見てよく、その中で「春松千年」の歌が三月七日頃の詠作であることは、配列の位置と矛盾しない。ただし、次の【二三】に引く「仏御殿御年回」すなわち四月一日から三日まで催された知足院宮の三回忌の記事との前後が、事実とは逆になっているが、理由はわからない。

なお、「歌日記」に「新御門主」とあることについては多少の問題がある。随念上人はいつから「門主」と呼ばれはじめたのか。その年次の如何によつては、「歌日記」の「新御門主」は後の書き入れということになる。

『佛光寺年表』の文政六年には十月十八日の第二十三世門主随念上人の遷化に続き、同じ十月（10）に、

随念、第二十四代の法灯を継承（19）〔歴世略伝〕

とあり（11）、「門主」の項も、ここを境にして「随念」から「随念」に変わっている。また、『佛光寺辞典』の「随念上人」の項には、

〔前略〕文政三年三月七日得度、法眼に叙せられ、同十一月二十六日大僧都に任ぜられ、同六年十月佛光寺の法燈を継いだ。弘化二年正月二十三日、四十一才で遷化するまで二十三年の在職。」とある。

しかし、『御日記』文政三年三月十一日に書き留められている勸修寺家への手紙は、すでに随念上人を「新御門主」としている。「門主」という呼称は得度の後、「法灯を継ぐ」より前から用いられているわけで、「歌日記」の「新御門主」はこうした用法にならつたものと考えられるのであつて、必ずしも後年の書き入れではない。

【二三】

『御日記』文政三年（一八二〇）四月一日

一、聞名信院様三回忌御法事。今御待夜□御執行被為在事。

同二日

一、聞名信院様御祠堂経。□年者開闢之事故御齋等

有之候へ共、当年者御齋料ニ相成候。乍去、留守居奥老女

三河・若狭・亀田三人へ御齋被下事。

同四月三日

一、聞名信院様三回忌御法事御満座ニ付

惣法中御齋。

院家衆 杉之間

御堂衆 耕作之間

「歌日記」文政三年。月日未詳

寄郭公懐旧 仏御殿御年回

ほととぎす古き軒ばを過ぎがてに昔忍ぶのねをのみぞ鳴く

往事如夢 同

さらばとて今をうつとなけれども過し其世ぞ夢にはありけん

\*『御日記』の「聞名信院様」は【一八】に出ている随応上人室禱子である。同じく『御日記』四月二日の「□年」の□は、内容から推測するなら「昨」であろう。【一八】の文政二年四月一日に、「右開闢御齋、法中一統・御次中惣一統惣菜。但し惣菜者当年計二相限候事」とあつたのと対応していると考えられるのであるが、重ね書きされており判読できない。

前項と同じく『御日記』に景樹の名は出ていない。しかし「歌日記」の「ほととぎす」の歌は、『桂園一枝』に「事につき時にふれたる」の一首としておさめられており（新編国歌大観番号四九一）、『桂園一枝講義』に、「寄子規懐旧の題なり。仏光寺の御台の三回忌によみたり。またぬ青葉に詞書を書きたり」とある。そしてその『またぬ青葉』には、四月七日のところに、

仏光寺のみうらの君、をとつ年の四月にかくれさせ給ひし、

其みとぶらひの御題奉るべう仰下されければ、時鳥によする

懐旧といふを出しまゐらせつ。さておのれもよみける、

ほととぎす古き軒端を過ぎがてに昔しのぶのねをのみ

ぞ鳴く

こはうらのみとのゝあれ渡るを、もうのぼるゆきかひに見入れ奉りて、いためるこゝろ也。

とある<sup>12</sup>。「其みとぶらひの御題奉るべう仰下されければ、時鳥によする懐旧といふを出しまゐらせつ」とは、関係者によって追

悼の歌会が催されたか、歌が詠まれたかして、その題を景樹が出したのである。それが何日のことであつたのかは分からない。この記事自体は前記のように『またぬ青葉』四月七日に出ているが、その日の出来事ではなく、やや前のことをさかのぼって記した体である。いずれにせよ、「仏御殿御年回」が、『御日記』の「聞名信院様三回忌御法事」であることは確実である。『御日記』によれば、この三回忌の法事は四月一日から始まり三日に満座になっている。

「歌日記」におけるこの前後の配列については前項【二二】に記した。そこでふれたように、【二二】【二三】は、「歌日記」においては実際の日にちの前後と逆の順になっている。

【二四】

『御日記』文政三年四月十四日

一、御忍<sup>ニ</sup>而香川長門介宅江御成。午後早々御出門。還御

両御所様 御供

大蔵卿

嘉継  
貢  
帯刀  
左京

「歌日記」

なし

※「両御所様」は随応上人と千重君である。千重君は【二二】のようにこの年の三月七日に得度し「新門主」と称されていた。御供の「嘉継」は近習の辻嘉継、「貢」は同山田貢、「帯刀」は未詳。「左京」は中奥の河合左京、「大蔵卿」は坊官の稲田政観である。この日のことは「歌日記」に見えないが、『またぬ青葉』に次の

ように詳しく記されている。「法橋せいくわん」(二行目)は『御日記』の「大藏卿」すなわち稲田政観、「新門主の君」(一五行目)は随念上人、「御はらから正行院の君」(二六行)は応専連枝、「みこ鶴丸君」(同)は応専連枝の長男鶴丸である。これによれば、随念上人は千重君のほかに応専連枝・鶴丸をもなつて訪問し、千重君・鶴丸の桂園入門の礼式を執りおこなうとともに、三月十二日に妻包子を失つた景樹を慰撫した。

十四日、今日俄に仏光寺の君、いらせ給ふべしとて、法橋せいくわんなど、かれこれ来つどひて、のゝしるめり。御まうけいかゞすべき。まづ川つきなる高殿、見はらしよし。其北おもてを、おましにしつらひ、新らしきむしろの長むしろ、なげしのかぎり、かうらんの下までしきつめたるべし。いとはせて涼しきまにとて、青すだれかけ渡して、半高くかゝげたる、ひんがし山の若葉打匂ひたるも、いとなつかしきに、日々まぬらぶあたりも、かしこの限なるいらかなりや。例のさしぐみて打まもらるゝに、かの他の国の帝、きさいの宮のつかを望みて、はるぐ心をやられけんを、ふとぞ思ひ出づ。何がしのさかし人、みぬかほつくりけんさへ、いとにくゝ思ひなりて、

たかどのをこぼつにつけてこぼれけむ涙をさへに慕ふけふ哉

ひつじの時ばかり、新門主の君ともなはせて、いらせ給ふ。げにや此春世にゆすり聞えし御得度のあと、あざやかに童形の花のかをりは、いづちやり給ひけん、名残のみどりいと青く、あるより出てと見奉るに、はたばりひろきおんけさなど、所せきを、をさくしくかき合せ給へるも、色すなはちと見給へおどろきて、涙さへそゞろくめり。よきかたにもあしきにも、いづれ変りゆくらんは、いみじき世なりや。君には此

頃の歎のうへを打いで給ふまにく、うちうるませ給へるも、いと忝なし。なきかげも、御かげにふしていかに聞くらん。うへもなき君が涙のしら玉はよみちをてらすひかりなりけり

御はらから正行院の君も、みこ鶴丸君つれて、したがはせ給へり。新門主も鶴丸君も、おひすがひたる御齡に、今はおとなだち給うれば、あらためて我道に入らせ給ふべき名簿うちく今日ついでに、とりおこなはせんとや。御坐の間いとせばきに、ひろぶたやうのもの、人々はこびまかなひわづらふめり。やをらかづけ給ふ御袖に、いたゞくかしら打もまろぶべし。今より世中の曲みたる道をふみかへて、その岡べによせおき侍らば、むげにおのれらごとき愚昧の入道には、よもなし給はじなど、打ゑまひ宣はず。すべてかしこしともかしこう、おほけなきわざなりや。さて正行院の君とうで給へるを、さる御祝のみ心にやとひらきみれば、観水院と名づけたる事の由承はり及びぬ、などはしがきあらせて、

すみまざるよるの川瀬の音づれを音づれなりときゝ明すらむ

夕かけては、たかどのにうつり給ひ、み盃あまたたびすゝみて、何くれの御物語、かきくづし給ふほど、見えわたる川原のけしきいはんかたなし。かの河音すみわたりて、風いとひやゝか也。

すむ月の更け行くまゝに高どののうへまでのぼる水の音かな

とうたひ出せり。猶いはまほしき心もあるを、くみたまひてや、語りいでたまはく、まるもおとつ年の此頃、妻にはなれて、其悲しみ思ひしりぬ。親におくれ子をさきだつる苦しみのいみじきは、もとよりながら、こは一すぢのせん方なきに、中々思ひあきらむる方もあなめり。めのわかれば只今更に其

かはりえらるべう、しのぶ草をわすれ草ともつみかふべく、  
さるかたに人もすゝめ物すれば、手もふれつべきものに、世  
にももてさわぐなん、殊更にかなしき。又たゞ人の、ひとり  
のやつこつれたらんが、其ひとり道をなかに失ひたる心地し  
て、かたはらさしあたる、何くれのあなゝひに、おろく  
まどふべきなん、其やつこは何ならぬに似たるものゝ、打つ  
けのくるしみ、物に似がたき心地すめりや。さるたゞ人のう  
へは、身にしらねど、思ひよそふるなんわりなき。などのた  
まふを承るに、隔てざりけりと思ひしりぬ。このほどある人  
来たりて、まことや妻におくれし心まどひは、まよひ子にな  
りし童べの心地なんすと申しゝを、げにさもこそときゝ侍  
りし。かれも、われも、その子ならねば、まよひたる心は、  
打つけにしり侍らぬ物から、引よせて思ひくらぶるなん、君  
がおぼしあて給ひけん御心ばへに、かしこくもかはり侍らぬ  
など、何くれ此世のせんすべなきをかたぶきかはし、語らひ  
奉るほど、川づらは皆くらくなりて、見え残りたる山もとに、  
鳥の声しばくきこゆ。

【二五】

『御日記』文政四年（一八二二）正月十日

一、御会初二付香川長門介參上。御目錄金百疋被下事。

「歌日記」文政四年正月。日未詳。

春水澄 仏御殿御会始御兼題

霽にも濁らぬはるにけり結ぶにあまる山の井の水

暮春雲 御当座

おほぞらの春のゆくへにたつ雲のしろきも花と見えずなりにき

寄都祝

万世も平安とさだめ置きつらんこの都こそ大みやどころ

ゆやのかた

ちりぬらん心の内の花桜匂は世にもかくれざりけり

春草のなかにつくぐかきたるかた

みやこ人春の日数のたけぬ間にきても摘なんのべの百草

雨中嵐山のかた

花もその心あらし山雨にだに散らでみやこの人を社まで

遠山に雪のこり、すそのに若草あるかた

さえかへることしの雪の七くさは雪のつむにぞまかせたりける

梅のほつえに朝日さしたるかた

みづ枝さすさしたるうめの紅にをくれしあさつく日かな

よしのゝはな かがに桜の花つみいれたるかた

つみいれし色もよしのゝ花がたみならぶものなき山づとやこれ

柳に鶯のかた

青柳もまづ靡きけりうぐひすのおのがはぶきや春の初風

すみしよのかた

住の江のはしも千年やかけつらんまつの木のまにみえわたる哉

杉おほくたてる。山さくらもさけり。其このまよりつきみえ

たるかた

貴舟河ながるゝ水のうづ桜ものすごきよの月にみえつゝ

よしのゝ山にのこれる雪のかた

みよしのゝ木末の桜さかぬまにはなともみゆるはるのゆきかな

かつらの紅葉したるかた

紅に匂ふをみれば久かたの月のかつらはいろなかりけり

若菜生る野べに朝日さすかた

山はまだ雪寒けれどもえ出て春を若なのあさ緑なり

つくま祭のかた

人しれずかさねし袖のかすぐはあらぬかづきにあらはれにけり  
鶏あはせのかた

おさまりし御代のつゞみのためしにもあはするとりの声聞ゆなり

ふかみぐさ

さばかりもとめる花の色いかなれば匂ふ日かずのはつかなるらん

水辺 賤がやのもとに桃やなぎ有かた

心なきやどにはなにをながすらんやよひの桃の花の下水

紅葉に小鳥のかた

さへづりし春のもゝ鳥ひとりきて鳴ねかなしき秋の夕暮

\*『御日記』の「御目録金百疋被下」は、ここまでの仏光寺歌会始の記事にはなかった記述であるが、実際になかったのか、あったけれど書かれなかったのか、不明である。「歌日記」の「寄都祝」以下は、仏光寺の歌会始に参殿した折の画賛と推測して掲げた。五首目、十一首目の詞書の「つくぐく」、「すみしよ」はもとのままである。「つくぐくし」、「すみよし」の誤りであろう。仏光寺にかかわる景樹の画賛については、前稿〔2〕の【二五】に記した。

【二六】

『御日記』文政四年三月六日

一、正行院殿・正受院殿、五時御発駕之事。

尤、草津駅迄御見立使、山田勘解由相勤。

「歌日記」文政四年三月五日

三月五日

正行院の君東へおもむき給ふをおくり奉りて

東路のみちのそらより降花のひるがへるべき法の上かな

隅田河住なれぬべき君なれば又と契るもかひやなからん  
ゆく君をしたふにつけて慕ふ哉なれしむかしの東路の花

\*『御日記』に景樹の名は出ていない。また、『御日記』の六日に対して「歌日記」は五日と、日付も異なるが、「歌日記」の「正行院の君東へおもむき給ふ」が「正行院殿・正受院殿、五時御発駕」に対応することは確実であろう。『御日記』の「正行院殿」、「歌日記」の「正行院の君」は随応上人の弟の応専連枝であり、『御日記』の「正受院殿」は応専連枝の嫡子、鶴丸である。【二四】に引いた『またぬ青葉』に、「御はらから正行院の君も、みこ鶴丸君つれて、したがはせ給へり」とあった。「正受院」という法名は、『御日記』文政四年二月一日に、

一、御連枝正行院殿御嫡男鶴丸殿、今日辰刻御得度。

とあり、続いて記されているその式次第の中の、鶴丸が新たに得た法名についての記述に、「御法名応現、御院号正受院」という注記がある。三日後の九日には応専室の近子も江戸へ向け京都を発っている。一家あげての出府だったのである。

この応専連枝一家の江戸下向は、『佛光寺辞典』に、「文政四年三月十九日、下谷別院西徳寺々務をとる」とあり、また『佛光寺年表』に、「順如第二子・応専、江戸北豊島竜泉寺・西徳寺（後の東京別院）、第八代を継承（44）（初代連枝）、この頃より「田圃の門跡様」と呼ばれる」とある出来事であるが、これは、実は長い歴史をもつ重大事件の一つまでであった。

その発端は、文明十四年（一四八二）までさかのぼる。十三代光教上人の跡をうけて法務を執っていた経豪が、この年、仏光寺を去って本願寺の蓮如上人に帰参し、仏光寺山内四十八坊のうち四十二坊が経豪と行動を共にした。以下、首藤善樹「佛光寺の歴

史―戦国―近代―」(13)の一節を引く。

その非常時にあたり、荒廃した教団の存続と再建に身を投じたのがいわゆる寺僧六坊であった。六坊とは、つまり四十八坊中経豪に従わず踏み留まった分であり、新坊(光蘭院)・西坊(長性院)・南坊(大善院)・奥坊(教音院)・角坊(昌藏院)・中坊(久遠院)をさす。佛光寺のちに門跡に列せられたが、六坊は再興に尽くした功により門跡の院家に補せられた。六坊はこれを後世まで誉れとし、本願寺の院家は官金の上納によって昇進が可能であるのにたいし、佛光寺の院家は六坊に限られることを自他に誇った。事実、近世に至っても六坊は本山の経営について、門主と互角に近い役割を分担していた。本山直属の末寺・門下とは別に、六院はそれぞれ独自の末寺・門下を多くもっている。したがって六坊は独自の経済力を有し、その経済力を提供することによって末寺を支えたのである。

応専連枝の「連枝」とは門主の兄弟である。門主の兄弟が「連枝」と認定されると、その血筋の上から、六院より格上になるのは避けられない。したがって仏光寺には長く連枝が存在しなかった。ところが、随応上人の代にいたって、その弟の正行院が連枝として江戸下谷別院西徳寺を継ぐことになった。この間の事情を、湯川信敬口述「仏光寺の由緒沿革に就て」は次のように説明している(14)。四行目の「両願家」は東西の本願寺、六行目の「佛派」は仏光寺派である。

しかるに第二十三世随応上人の時、天明時代(大火あり)随応上人の御弟、応専師を連枝として江戸下谷別院に置くと云う義の起こった時、六坊はこれに反対して御堂に出勤せず

種々争いがありました。が、両願家はそれぞれ別院には連枝を住持させられこれに対して將軍、大名等の扱いは丁寧であります。が、独り佛派のみは無い故對抗上派勢拡張の政策上、是非その要ありとして、遂に連枝を置く事となりました。

しかし、六坊はなおおきかない為、これに代わる榮職を与えると云う事で、六坊の住職には僧正までの僧官を勅任せられる様取り扱おうと云う事になりました。最も權僧正となれば緋衣が着用出来ますがしかしこの法衣は本山内においては着用を遠慮せよと云う条件で、この連枝問題は解決しました。以来下谷別院には代々連枝を置くこと云う事になりました。

景樹がこうした事情をどこまで知っていたのか分からない。しかし、第二首の「隅田河住なれぬべき君」「又と契るもかひやならん」は、応専連枝はもう京には帰らないことを景樹が知っており、かつ景樹がそれを知っていることを連枝も知っていることを前提としなければ成り立たない表現である。さかのぼって考えると、「歌日記」文化八年(実は文化六年)(15)の歌道放棄も、前稿「2」に記したように、直接には大僧都に任じられたことがきっかけであろうが、根本には本山において連枝が置かれていた立場があったのではないかと思う。そして、「言のはゝ人の誠の道なるをいかによきてか君は行くらん」というその折の景樹の歌も、なぜ避けようとするのか、応専連枝の心が分からない、といった、その真意を疑ったり糺したりするような歌ではなく、避けられるはずのない道も避けなければならぬ、難しい立場に置かれている連枝の行く手に思いをやり、同情しての歌と解すべきではないかと思う。

「歌日記」によると、応専連枝が京都を出立したのは三月五日としか思えない。しかし、『御日記』によればそれは三月六日のことであった。『御日記』がこのような重大事の日付を誤ることはな

いはずである。「歌日記」の誤りか、または実際は五日に詠んでおいたのであろう。

ちなみに、「歌日記」文政四年（月日未詳）に、

仏光寺の君のみはらはらの正行院の君、東におもむき給

ふ、みはなむけの御詠草の奥に

何故にかくは涙のこぼるらん悲しかるべき別れならぬを

とあるのは、この時のことであろう。「正行院の君」は応専連枝である。「御詠草」は随応上人の詠草であろう。このあたり、『桂園遺稿』編者の注記によると筆者は不明であるが、それが誰であるにせよ景樹に対して敬語は用いていない。したがって、「御詠草」は景樹の詠草ではない。考えられるのは「仏光寺の君」すなわち随応上人の詠草である。随応上人は応専連枝へ送る餞別の歌を景樹に見せ添削させたのではないかと思われる。

### 【二七】

『御日記』文政四年四月朔日

一、御内用ニ付香川長門介宅江環参、及示談。

「歌日記」

なし。

\*「香川長門介」の「香川」は、次のような理由で「喜頭」の誤りと推測される。喜頭長門介は二条家侍の喜頭長門介時富（16）である。

まず、「環参」とある「環」は、仏光寺の用人木村環である。文

政四年元旦に、「御家中御礼於御座之間二」云々とあり、その「家中」の姓名が列記されている中に、二人の「御用人」の一人として「木村環」が出ている。用人の格は坊官、家司に次ぎ、近習の上である。他家への使者や他家からの使者の応対などを務める点では近習と同じであるが、その用件が定期的な時候の挨拶や形の決まった慶弔の挨拶ではなく、やや重要な事柄である場合が多い。

その用人が、景樹宅に向くのはあり得ないことではない。喜頭長門介宅に環が出向いたという記事はこの前後に見えるが、喜頭時富も景樹も同じ従六位の長門介である。また、前稿（2）の【一三】では、法蔵寺への随応上人御成の前日、家司の小幡兵部と近習の宇野雅楽が景樹宅を訪問し、「乍遠方彼寺江致推参様」依頼している。家司と近習とが訪問しているということは、その中間の格である用人の訪問もあり得るということを示している。

しかし、今回は「内用」である。「内用」には「内証の用件」「内証の借金」という二つの意味があるが、借金の話であるとしたら景樹に相談に行くなど到底ありそうもない。内証の用件であったとしたらありえないわけではないが、ここまでの『御日記』における景樹の待遇から見ても、わざわざそれを書きとどめるとは思えない。加えてこの前後に景樹と関係すると思われる記事もない。

一方、ちょうどこの頃、二条家との間に金銭にかかわる出来事が生じており、それに環と喜頭長門介がかかわっていた。まず、『御日記』文政四年三月二十二日に次のようにある。

一、二條様より三百金御返進 并御利足添

猶亦来四月廿日迄二金五拾両

御内使 河岸主税

御借進御頼被為在候事。

御答

環

次に、三月二十七日には、

一、金五拾兩、環持參。喜頭長門介江渡シ、即仮受取書有之。跡より証札可差出旨。

とあり、そして四月一日に【二六】としてはじめに掲げた記事があり、つづいて二日には次のようにある。

一、河原御殿江御内用使 此面。長門介面会。

一、御同所より御内使沢登一学。面会 環。

時候御口上、且亦五拾金御預ケ之処、当時御都合無之

ニ付、銀老貫目与金式拾五兩御預ケニ相成候。尤

御預ケ帳面等預り置、追而御都合之上、例之通調印

可致相對。但環より一学宛仮請取差出置。

以上の記事から次のような事態が想像される。三月二十二日、二条家から仏光寺へ、三百兩とその利息とが返却された。使者は河岸主税、応対したのが木村環である。その際、今度は五十兩の借金の依頼があった。四月二十日までに、ということであったが、さつそく三月二十七日に、環が二条家に持参し、仮受取書を受け取った。続いて四月二日、「此面」すなわち仏光寺近習の北村此面が河原御殿に向き、「長門介」すなわち喜頭長門介が応対している。河原御殿は二条家の別邸である。そしてその日のうちに沢登一学が仏光寺を来訪し、五十兩の貸し借りを、銀老貫目と二十五兩に減らしている。一学はその際、差額を持参し返却したらしく、環から仮請取が差し出された。

四月二日の「当時御都合無之」は、仏光寺と二条家のどちらの都合をいうのか今ひとつ分らないが、しかし、いずれにせよこのような一連の動きから、四月一日、環が内々に喜頭長門介宅に出向き、五十兩を仏光寺側の都合により銀一貫目と二十五兩に変更するよう交渉したことは十分に考えられる。二日にも此面が河

原御殿に出向き長門介と面会しているが、近習の此面にはそうした交渉は荷が重かるう。此面が表向きの使いとして、二条家側から額の変更を申し出た形にするため、二条家から人を差し向けるよう依頼したと推測される。

もちろん、二条家との間のこうした問題とはまったく別に、景樹宅への環の訪問はあったのかもしれないが、「香川」が「喜頭」の誤りである可能性のほうが大きいと思う。

【二八】

『御日記』文政四年十一月二日

一、香川長門介方□朦中為御見付。

野菜 一折

「歌日記」

なし

\*□は虫損のため不明瞭であるが「江」であろう。「見付」は「見舞」の誤りであろうか。ここではそう解しておく。

「朦中」は喪中の意であるが、誰の喪なのか、次のように三通り考えられるが、どれも推測、想像にとどまる。

一つは木下幸文の喪で、ちょうどこの日に没している。幸文も仏光寺との関係を有しており(17)、随応上人から見舞いがあった不自然ではないが、幸文の逝去によって景樹が喪中、ということにはならないのではないか。また、死没当日の見舞いは喪中見舞いとは言わないのではないかと思う。

二つめは、一ヶ月前の文政四年十月三日に没した養父景柄の喪である。すでに離縁になっているが、景樹は引き続き「香川」を

称し、景柄を「父」と呼び続けている。そうした景樹の論理(18)に従うなら、景柄の喪中見舞いが景樹に届けられるのは当然である。しかし、なぜそれが一ヶ月後なのか。養父の喪中見舞いは没後一ヶ月という原則があったのかもしれないが、確認できない。もう一つは、景樹の娘の孝子の子、つまり景樹にとっては孫の喪である。孝子は文政二年に九条家諸大夫の芝寛寧に嫁したが、かつて聞名信院に鍾愛されていた(19)。その孝子の子がこの頃没する、といったことがあったのかもしれない。しかし、はたして孝子にそのような子があつたのかどうかからして不明である。

〔付記〕

『御日記』をはじめとする本山仏光寺所蔵資料の閲覧につき、澁谷曉眞門主と御家族に格別の御配慮を頂戴した。ここに記して深謝申し上げる。なお、本稿は平成十七年度科学研究費補助金基盤研究C(2)による研究成果の一部である。

注(1) 彌富濱雄編『桂園遺稿』上・下巻(五車楼 明治四〇年三月・

同八月)

(2) 以下、それぞれ前稿(1)、前稿(2)と略記する。

(3) 各年の『御日記』の伝存状況は次のごとくである。

- |      |            |    |
|------|------------|----|
| 文政元年 | 元日〜十二月晦日   | 一冊 |
| 文政二年 | 元日〜十二月二十九日 | 一冊 |
| 文政三年 | 元日〜十二月晦日   | 一冊 |
| 文政四年 | 元日〜十二月晦日   | 一冊 |
| 文政五年 | 元日〜十二月晦日   | 二冊 |
- (4) 文政二年正月執筆と推定される、柏原正寿尼宛の景樹の手紙(洛東遺芳館所蔵)に、「私事しはす十五日帰京」とある。
- (5) 内田正男編著『日本暦日原典』(雄山閣出版 昭和五〇年七月)、湯浅吉美編『増補 日本暦日便覧』(汲古書院 平成二年二月)

(6) 『増補 日本暦日便覧』(注5)による。

(7) 澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)、佛光寺教学資料編纂委員会編『佛光寺年表』(真宗佛光寺派宗務所 平成九年四月)

(8) 享保三年(一七一八)春元版、天明四年(一七八四)夏再刻。『新修京都叢書』第十二巻による。文は六三八頁、絵は六八八頁にある。

(9) 東山聖徳寺所蔵円雅書写本(外題『嵐山御詠歌』)による。

(10) 日は記されていない。

(11) (19)は随念上人の年齢、「歴世略伝」は『渋谷歴世略伝』に依拠したことを示す。

(12) 『またぬ青葉』の引用は、佐佐木信綱編、続日本歌学全書第四編『香川景樹翁全集 上巻』(博文館 明治三一年六月)による。

(13) 千葉乗隆・梨本哲雄監修、平松令三責任編集『佛光寺の歴史と信仰』(思文閣出版 一九八九年三月) 本文篇。

(14) 澁谷曉眞編、再々版・現代仮名づかい版(本山佛光寺 平成一三年一〇月)による。

(15) 正宗敦夫「桂園史料」、『萬年艸』巻第六 明治三六年六月)、兼清正徳『木下幸文傳の研究』(風間書房 昭和四九年三月) 一七―一七三頁ほか。拙稿「香川景樹「歌日記」の「年づけ」——『桂園聚葉』を手がかりとして——」(『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)』第四七巻第二号 一九九六年一二月)

(16) 前稿(1)の【五】参照。

(17) 兼清正徳『木下幸文傳の研究』(注15)

(18) 二つの梅月堂——まえばきにかえて(拙著『香川景樹研究 新出資料とその考察』和泉書院 一九九七年三月) 参照。

(19) この件について詳しいことは分からないが、『またぬ青葉』に次のようにある。【二三】に引いた四月七日の、「こはうらのみとのゝあれ渡るを、もうのぼるゆきかひに見入れ奉りて、いためるこ

ゝる也。」のすぐ次である。

和泉守藤堂高嶺朝臣御女

この君は、ものゝふのみ家にひとゝならせ給ひて、み心だても、むげにめゝしうなど、いふかひなくは物し給はぬ物から、いつくしみの露、はたかゝらぬ隈なく、仰ぎまゐらせぬ人なき中にも、おしなべならずおぼしくだされしはさら也、むすめ孝子をさへ、めでかなしませ給ひ、わきてみ志深う、御袖の下にかいくゝませて、かゝらん嫁がねをこそえまほしうなどさへ、のたまひくだされしみたはぶれも、身にあまりて忝けなみ奉るは例のやみなるまどひになん。

『地域学論集』第二卷第一号 平成一七年六月

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——文政六年から八年まで、文政十年から天保十三年まで——

田中 仁

## 一 はじめに

真宗仏光寺派本山仏光寺の『御日記』から香川景樹にかかわる記事を抄出し、景樹の「歌日記」<sup>(1)</sup>と比較対照する。

〔1〕 仏光寺『御日記』の香川景樹——文化六年まで——

〔2〕 仏光寺『御日記』の香川景樹——文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで——

〔3〕 仏光寺『御日記』の香川景樹——文政元年から五年まで——

これらの拙稿三編<sup>(2)</sup>につづいて、本稿では景樹の親近した第二十三世門主随応上人の遷化の年である文政六年（一八二二）から、景樹逝去の前年の天保十三年（一八四二）までをとりあげる。この間二十年であるが、文政九年の『御日記』が所在不明のため、実質十九年分の記事ということになる<sup>(3)</sup>。

この十九年間の『御日記』に、景樹の名は二度しか出ていない。「歌日記」においても、仏光寺に直接かかわる記事は平均すれば一年に一回程度であり、しかもその多くは会始への出詠歌と賀歌、追悼歌である。ことに随応上人遷化後は、十五例のうち会始が八例、慶事と追悼・追善が各二例で、そのほかは三例にすぎない。次節に掲げる「歌日記」の仏光寺関係記事のうち①②③が遷化前

であるが、四月から九月までの半年間に三例あり、しかも会始、慶事、追悼・追善のどれにもあたらない。そのように折にふれての詠進や随時の呼び出し、景樹宅への訪問など、多様であった随応上人在世時と、遷化後の交流は様変わりしており、景樹と仏光寺との関係は上人の遷化後ほとんど絶えてしまったようにさえ見える。景樹が仏光寺に出入りすることができたのは、おそらく随応上人個人の意思に基づくところであって、一山あげて景樹を迎え入れたわけではあるまい。東山の仏光寺本廟に参詣した帰途に景樹宅に立ち寄って夜更けまで帰らなかったり、出先に景樹を呼び寄せて夜を明かし、そのまま嵐山に遊んだりといった随応上人の行いが、一山の僧俗に好意をもって受け入れられていたはずはない。すくなくとも、景樹が本山の寺務にかかわらなかったことは管見に入った資料によるかぎり確かなのであって、上人の遷化後、景樹と仏光寺との関係が絶えることも当然あり得る。

しかし、仏光寺に所蔵されている和歌にかかわる資料をみると、随応上人遷化後も、景樹と仏光寺とはけっして疎遠ではなかったように思われる。たとえば、随応上人の次子で二十四世門主の随念上人をふくむ仏光寺寺中の僧俗による点取詠草が、現在のところ二十点ほど見いだされているが、その点者をつとめているのは景樹である。左にそのうちの一つを掲示する。「——」で表した一首目と五首目の右肩の長点、添削のための傍書、「汚墨二点

景樹」は朱で、景樹による書き入れである。

山晚霞

春かすみ棚引わたる山もとに  
ゆふけの煙打<sup>立そひて</sup>摩くみゆ 厳浄  
菅の根の長き日陰も暮かけて  
高ねに匂ふ春霞かな

小倉山ゆふ日の影にあらはれて  
さやかにみする春かすみかな

余寒

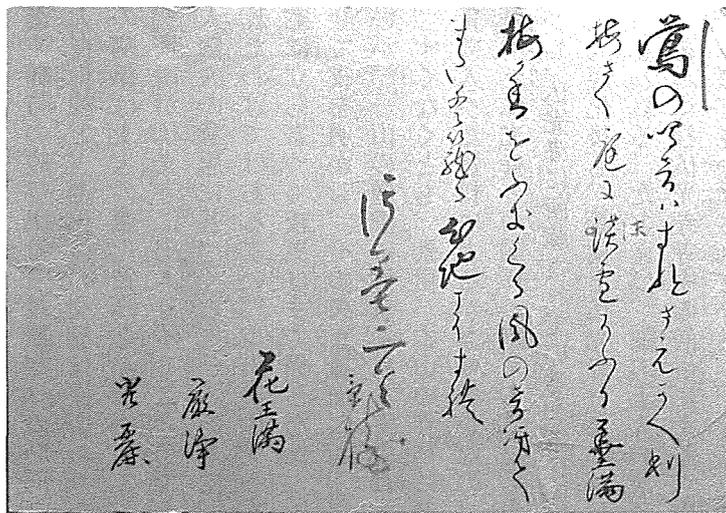
わひしけに鳴鶯のこゑすなり  
さえかへりたる春の朝は  
鶯の鳴音はすれとさえかへり  
梅さく庭に淡雪<sup>沫</sup>そふる 華王満  
梅か香をふきくる風の音冴て  
また冬籠る心地こそすれ

汚墨二点 景樹

花王満  
厳浄  
光麗

「鶯の」以下を「写真1」として掲げる。

〔写真1〕



「華王満」「花王満」が随念上人である。厳浄は未詳であるが、これと同種の詠草のほとんどにその名が見える。光麗は『御日記』によれば仏光寺の役僧らしい。景樹と親しかった恵岳が用いていた「常楽寺」という名乗りを受け継いでいる<sup>14</sup>。かつて随念上人は、自分自身が景樹に親しむだけではなく、随念上人をはじめとする周囲の人々をもその親交のなかに引き入れた。前稿「1」にも引いたが、景樹著『またぬ青葉』につきのようにある。

十四日、今日俄に仏光寺の君いらせ給ふべしとて、法橋せい  
くわんなど、これかれ来つどひて、のゝしるめり。

(中略)

ひつじの時ばかり、新門主の君ともなはせて、いらせ給ふ。

(中略)

御はらから正行院の君も、みこ鶴丸君つれて、したがはせ給  
へり。新門主も鶴丸君も、おひすがひたる御齡に、今はおと  
なだち給うれば、あらためて我道に入らせ給ふべき名簿うち  
く、今日のついでに、とりおこなはせんとや。御坐の間いと  
せばきに、ひろぶたやうのもの、人々はこびまかなひわづら  
ふめり。やをらかづけ給ふ御袖に、いたゞくかしら打もまろ  
ぶべし。今より世中の曲みたる道をふみかへて、その岡べ  
によせおき侍らば、むげにおのれらごとく愚昧の入道には、  
よもなし給はじなど、打ゑまひ宣はす。すべてかしこしとも  
かしこう、おほけなきわざなりや。

「新門主の君」が随念上人、「正行院の君」は応專連枝、「鶴丸  
君」はその長男である。「我道に入らせ給ふべき名簿うちく、今  
日のついでに、とりおこなはせんとや」とあるところによれば、  
随念上人はこの時景樹に入門したと思われる。そしてそれはけっ  
して形だけで終わったのではなく、上人自身にも、同じく〔1〕  
に引いた次のような歌がある。<sup>50</sup>

○真宗法主真導君より給はりける

こたび善敬に大かたならぬ事のみをおほせて

本よりもたのむ誓ひはちかひにてうき世のことは君にまかせん

「真導」は随念上人の諱である。随念上人の時代にも景樹と上人

自身もふくめて仏光寺との交流はなお存続していたのである。

『御日記』や「歌日記」にそうした交流が表れにくくなって  
るのは、『御日記』についていうなら、一つには記事の量が全体  
として少なくなっているためであろう。そうなのは、日記を  
記すということの重要さが、この時期やや見失われていたこと  
によるのではないかと推測される。多くの文書を焼失した天明の大  
火から三十年以上を経て、故実とすべき事例もすでに相当数記し  
留められている。『御日記』だけではなく、重要な書状を集めた  
「書翰留」や、幕府との交渉にかかわる記録をとどめた「公辺留」  
等々、種々の記録も蓄積されている。したがって、その月その日  
に執行されることの決まっている行事やその次第の決まっている  
行事については、必ずしも詳しく記さなくてよい。そしてもう一  
つ、『御日記』の性格がやや変わったことが、景樹関係記事が表  
れにくくなった理由としてあげられよう。門主の日常の動向を記  
す、という意味が薄らぎ、本山の寺務を記すという性格が相対的  
に強くなっているように見える。景樹や和歌は門主の動向にはか  
かわるが寺務にはかかわらない、といった、門主と寺務とを区別  
する認識がより強く働いて、記事の内容が寺務に直接かわるも  
のに偏ってきているように見える。

そしていっぽうの「歌日記」も、『御日記』の場合と同様に、  
残されている記事の量が全体として減少していることが、仏光寺  
とのかかわりが現れにくくなった原因の一つになっていると考え  
られる。また、もう一つの理由として、景樹にとって真宗仏光寺  
派の重要性がやや減じてきたということがあるかもしれない。親  
しかった聖徳寺円雅や常楽寺恵岳はすでになく、有力な門人であ  
った児山紀成、菅沼斐雄<sup>51</sup>は本山を離れて江戸に下ってしまった  
ている。光福寺宗達をはじめとする摂津の真宗仏光寺派関係者と  
の交流は、「歌日記」全体をつうじてもとても濃密なものであつ  
たように見えるけれど、なぜか文化年間半ばあたり急速に薄らい

でいったらしい。そしてなによりも随応上人の遷化が大きく影響したであろう。仏光寺と景樹との交流は、仏光寺参殿や詠草点削などの回数を数えれば随応上人時代もその後もさして変わらないかもしれないけれど、本山以外の仏光寺派関係者との交流の機会が減って、心情の上でもまた自己の歌風・歌論を広めるといふ実利の上でも、景樹における仏光寺の位置は随応上人の時代とは異なってきたのではないかと想像される。

## 二 景樹「歌日記」の仏光寺関係記事

本稿もふくめて拙稿「仏光寺『御日記』の香川景樹」は、前記のように仏光寺『御日記』から香川景樹にかかわる記事を抄出し、それを景樹「歌日記」と対照して、「歌日記」の「年月日づけ」の検証と、景樹伝の新事実の発掘を目的とする。後者について補足するなら、仏光寺と真宗仏光寺派にかかわる新事実の発掘を試みようとするものである。したがって、景樹「歌日記」には記事があるけれど『御日記』にそれと対応する記事のない場合は、原則としてはそれを取り上げて云々することはしない。ただし、本稿では、景樹の「歌日記」から、仏光寺と直接にかかわっている記事、具体的にいうなら、「仏光寺御殿」「仏御殿」等の仏光寺の名が出ている記事や、門主、連枝の登場する記事を取りあげて、適宜説明を付すことにする。一年に一例ほどしか見えない記事のうち、会始への出詠歌が多いこと、さらに随応上人の遷化を境にして、会始の歌、賀歌、追悼歌・追善歌がほとんどを占めるようになっていくことを確かめておくことが、先に述べたような景樹における真宗仏光寺派の位置づけを考えるさいの手がかりになるのではないかと思うからである。なお、「歌日記」の引用にあたっては、私に句読点・濁点をつける。

①文政六年（一八二三）四月 日未詳  
四月はじめつかた仏光寺御殿にて。

月前郭公 景文画  
ほとゝぎすかたぶく月の影ならで聞人もなき夜半の一声

「景文」は四条派の画家、松村景文（安永八年・一七七九〜天保一四年・一八四三）である。後に掲げる⑥にも名が出ていいる。『佛光寺辞典』<sup>(2)</sup>によれば仏光寺に「時雨紅葉」「水中亀」「白椿鷺」などの絵が所蔵されているという。

この「四月はじめつかた」の某日、景文も仏光寺に招かれていたのか、または前もって準備されていた絵に賛をしたのか、不明である。また、これにつづいて、次のような歌が配列されているが、これらのうちどこまでがこの時に詠んだ歌なのか、またはすべて別の時の歌なのか、これもよく分からない。澁谷曉眞門主によれば、現在仏光寺にこれらの賛のある絵は所蔵されていないとのことである。

雨ふる森に郭公なく

雨きおふ青葉が上にふり出て声をもそゝぐほとゝぎす哉

早苗

きて見れば小田の早苗はたち捨しかとりのきぬのうすもえぎ也

塩竈 沖に舟あるかた

藻塩やく烟の末にみゆるかな沖こぐ船のけふのおひかせ

二見の浦に富士見ゆる

二見がた拾ふ干潟のほたて貝あはせまほしく見ゆる山哉

鶴のふしたるかた

末遠き千世をたゝみてひな鶴のふしたる洞の中ぞ長閑き

若楓に螢みたるかた

若楓いまだ露だにしらぬまの照かげ見れば螢也けり

葵

あふひぐさ二葉ながらにさく花は神のゆかりの紫にして

青梅のかた

鶯もいまはふる巢に籠るらん匂ひし梅も実になりにつけり

山たかく雁わたるるかた

伏水山松を秋かぜ吹もあへず空にきこゆるはつ雁のこゑ

塩竈に松たてり

藻塩たく海人が磯屋に立馴て松さへからき千世や経ぬ覽

つくくしにすみれ咲

誰筆のすみれ成らんつくくしかけりとみゆる花の色哉

早蕨

人とはぬ野べの早蕨おのがねに己れ折ても春やすぐらん

景樹が仏光寺のために多くの画賛をしていることについては、前稿〔2〕第四節の【一五】に関連して、景樹の画賛は、門主の手もとや本山にとどめられたのではなく、しかるべき機会に法中や門下に与えられたのではないかと推測した。これらもそうして諸方に分配するための画賛であつたのかもしれない。

②同 八月朔日

仏光寺の御殿にもうのぼりて。 八月朔日の夜也。

籠のうちに鳴くや鈴虫まつ虫の声きりくす交る夜半哉

たちかへりおもしろきかな空蟬の人の泣落す滝の白糸

初雁

まちくしものとはなしに秋風の吹ばきこゆる初雁の声

秋夕

さもこそは物の悲しき秋ならめ夕日にさへもぬるゝ袖哉

「八月朔日の夜也」という注記に注意したい。このような形式で「歌日記」が月日を示すのは例の少ないことであるが、歌自体にこの注記がなければ理解できないところがあるように思えない。「秋夕」の歌の後の「(以上翁自筆)」によればこの部分は景樹の自筆であるが、「八月朔日の夜也」に景樹はどのような意味をこめていたのであろうか。

八月朔日は、一般に君臣・主従の間で物を贈答したり盃を交わすことによつて関係を確認する日であつたとされる。仏光寺では月初めに法中・家中が門主に御目見する礼式があつたが、八月朔日はその規模が通常の月にくらべて大きく、また関係諸方へも挨拶の使者が派遣された。この文政六年八月朔日は、その様子が例年よりもやや詳しく、次のように記されている(8)。

一、当日御祝儀、院家衆・御堂衆・常仕

申上候事。

一、御家中同断。

一、於宸殿御目見へ御盃被下。 牧田源右衛門

両御所様<sup>江</sup>半切百枚ツ、献上。

一、於遊獵間御目見<sup>江</sup>

御盃被下。

両御所様<sup>江</sup>

金百疋ツ、献上。

一、於小宸殿御目見<sup>江</sup>御盃被下。

大門様

鳥目壹貫文

新門様

同 五百文

鳥目貳貫五百文

一、於宸殿御目見<sup>江</sup>

安居院

御盃被下。

上講中

大門様

鳥目耆貫文

新門様

同 五百文

二條様

取次

久野右京

伏見様

大江弁之丞

順君様

増籠平三郎

有栖川様

岡村小膳

所司代

川合半次

藤堂様

竹内伊兵衛

右、当日御使 縫殿

景樹の参殿はこうした礼式に何らかのかかわりをもっていたのかもしれない。ただし、前記のようにこの文政六年八朔の記述は例年よりもやや詳しいのであるが、そのことと「歌日記」のこの年にかぎって「八月一日の夜也」の注記があることと何か関係があるのか、偶然の一致にすぎないのか不明である。また、第三項に「於宸殿御目見へ御盃被下」とある「御目見」の中に景樹はいたのか、それとも別の扱いであったのかも、現時点ではわからない。なお、「初雁」「秋夕」の二首は、この時に詠んだ歌かどうか明らかではない。ただ、この二首と、はっきりと「仏光寺の御殿にぼりて」とある「籠のうちに」「たちかへり」の二首、そして引用していないが八月一日の前に置かれている、「軽雲楼にて」と詞書のある「照る月もかさ着て渡る曇夜の小雨さびしきたぬき橋かな」の合計五首が、前記の『桂園遺稿』の注記によれば景樹自筆であり、次の「恨恋」からは、同じく『桂園遺稿』の注記によれば木下嘉之が筆写している。とすれば、「初雁」「秋夕」は

この時に仏光寺で詠んだ可能性もある。①の画賛の同様、おりあるごとに短冊を書かせておいて、後日しかるべく分配する。景樹はそのような役割をはたすことも期待されていたのではないかと思われる。

③同 九月九日

九月九日。仏光寺の君に菊につけて奉りてんと慧岳師の願ひによりてよみ給へる。

千年とは君が結ばん菊なれば露打はらひたてまつるなり

「慧岳師」は仏光寺御堂衆の常楽寺恵岳である。景樹と親しかつたため「歌日記」に頻出する。生年は未詳であるが、「歌日記」天保四年（一八三三）に七回忌の景樹詠がのっているので、没年は文政十年（一八二七）と推定される。

「仏光寺の君」は随応上人である。随応上人は、次節【三〇】のように、文政六年十月二十一日に遷化した。『御日記』をみると、八月はじめごろから勤行への不参が頻繁になり、新門主随念上人の出仕が多くなっている。この九月九日も「新門様御出仕」とある。この後、九月下旬にはやや持ち直したものの、十月に入ると病勢はさらにすすみ、一日には前夜に引き続き御館入<sup>(2)</sup>の医師、荻野河内守の「別段伺」があった。荻野河内守はこの後、遷化までほとんど毎日参殿している。十一日、十三日は弟子の伊藤昌言帯同であった。五日には二條家から医師の石東泰輔が派遣された。諸方からの見舞いもひきもきらなかったが、二十一日夜、ついに示寂、翌二十二日その旨が諸家へ披露された。この文政六年九月九日は常の九月九日ではなく、こうした流れの中の九月九日であった。おそらく随応上人の衰えは周囲の目には明らかであり、恵岳の菊花献上にも景樹の歌にも、特別の思いがこめられていたはずである。

④文政七年（一八二四） 月日未詳

仏御殿御会始兼題

初春祝君

（一行空白）

御当座二題

連峯霞

（一行空白）

近帰雁

（一行空白）

前年の文政六年十月に随応上人遷化、それからほどを経ない会始である。はたして実際に開かれたのかどうか、景樹が詠出したかどうか、不明である。また、会始の題であるにもかかわらず二月六日の歌の次におかれているが、その理由も不明である。

⑤同 月日未詳

仏御殿にての事也。

上略

また其後のたまはく、此道におきては、千歳の惑ひをときて千歳に遺さむ事をのみはかりて、當世の意なく、大かたの譏りをもかへり見ざるますらを心を羨みたとぶ余りに、おほけなくも問ふべき事あり。誠に申あきらめんや、とて宣ひ出しを、おろおろ御答へ申奉りし時、生來のわが胸はじめてさはやかなり、とかたじけなくも仰せ下されしついで、猶こし方行末何くれの邪正あるはものゝ興廢の機密めく御物語りのまに、思ふ心をことあげせしが中に、猶一事を申あまして、こは君が御かうがへの熟せん時をまちてこそ、といなみ奉りて退きけるを、さ

らばこん春の松のうちすぐさずして承ん、などしひて宣ひしも、八年昔の今日なりけん。其後も、彼一大事をきゝもらせし遺恨いつかははるべき、などしばく仰せられしを思ひ出て

枯ぬらん君が恨も葛の葉のかへりて今はかたみならずやはかりなき君が齡と思へどもいまさぬとしの暮ぞ悲しき  
あら玉の春共にも帰りこん君にし有らば嬉しからまし

第三首第二句の「春共にも」は『桂園遺稿』のままである。

歌の第二首に「としの暮」とあるので年末の頃の感慨のように思われるが、これより前のもっとも近くに月日が明示されているのは八月十五日、後は十月十七日である。こうした配列によるなら、随応上人の一周忌間近の頃（10）ともとれる。歌の三行前に「八年昔の今日なりけん」とあるが、文政七年（一八二四）の八年前、すなわち文化十三年（二八一六）の『御日記』『歌日記』に、これに対応する記事はない。

⑥文政八年（一八二五）正月十日

十日。仏光寺御会始御兼題 初春鶴

ほのくくと明ゆくはるのあしたづの羽ぶきやおのが千世の初  
かせ

御当座巻頭 海上霞

打塵くけぶりの末も見えぬかな霞こめたるしほがまの浦

たえぐくに沖こぐ舟の苦がしまおほふははるのかすみなりけり

仰にて景文が富士の画に賛す

解ぬべき世はしらゆきの上に出てにはひわたれる春の日のかげ

「景文」は①と同じく松村景文である。次節の【三三】に引用する文政六年『御日記』十二月十八日の随応上人の四十九日の記

事に、「御館入」の「画師」の一人として名があがっている。

⑦文政九年（一八二六）正月六日

仏御殿御会始

庭上鶴

此殿の砌にすめる蘆たづはおのが外なる千代よばふらん

次節の【三四】で述べるように、仏光寺の歌会始は正月十日頃に開かれるのが通例であった。文政九年は事情があつて早く開いたのか、詠んだのが六日で会自体は十日のころだったのか、この年の『御日記』が現在所在不明のため推測の手がかりがない。

⑧文政十年（一八二七）正月十一日

十一日。仏御殿御会始也。御兼題 梅近聞鶯

袖ふれてをらんと思ひし我やどの梅のしづえに鶯のなく

御当座 閑路早春 閑居苔深

ふじのねにかすみぞなびく足柄のせきの八重山はるやこゆらん  
くもるよりたつと云春を相阪のせきにむかふるうぐひすのこゑ  
わがやどの松の木かげにむす苔のみどりもふかくなりける哉  
稀にだにふむ人もなき庭なればこけの上にもあととはのこらず  
応震 蘆洲めされて画かく。其賛

すゞなにてふゐる

春の野のうかれごころははてもなしとまれと言し蝶はとまりぬ

ゆきふりたる野になづなすゞしろ見ゆ

初わかなつむらんたれをかき分てふかき雪間をあはれとおも  
はん

むぎ

ほととぎすまだ初こゑも聞えぬにほにいでけりな畑のあをむぎ

露のとう

山ばたにのどけき春のはつかぜはいつよりふきの花さきにけん  
さうび

打はへていつも春なる花のいろを写すややがてうつるなるらん

あゆふたつをどりあがりたる

大井川そこなる鮎もさく花にあくがれけりと見ゆるはるかな

あらし山

大の川早せさしくだすいかだ士ものどかに見ゆる花のかげかな

まつの上に帆みゆ

住よしのまつのうへこす白なみは沖ゆくふねの帆かげなりけり

柳鶯

はつ春のやなぎの糸にむすぼれてまだとけやらぬうぐひすの声

山ざと雪ふりたり

ゆきふかきおくの山ざとすむ人のあとだになきをたれかとふ

べき

かはほり一つとぶ

夕まぐれふるきすだれを巻上てつきはこよひとむかふ空かな

「応震」は円山応震（寛政二年・一七九〇〜天保九年・一八三八）である。⑥でふれた『御日記』文政六年十二月十八日の随応上人の四十九日の記事に、景文と同じく御館入の画師として名があがっている。『佛光寺辞典』によれば、応震の絵は「白蔵主」の一点が本山仏光寺に所蔵されている。「蘆洲」は長沢蘆洲（明和四年・一七八七〜弘化二年・一八四七）である。澁谷曉眞現門主の直話によれば、現在仏光寺に長沢蘆洲の絵は伝存しない。

⑨天保三年（一八三二）正月 日未詳

春風解氷 仏御殿御会始

春きぬと氷をたゞく山風にうち出でゝ浪のこたへける哉

文政七年の④からこの⑨まで、⑤をのぞいて会始の題と歌を記すのみである。⑤も随応上人をめぐる追想であつて、随応上人時代の仏光寺との交流を伝えてはいない。

⑩天保三年（一八三二） 月日未詳

春雪 仏御殿

かげろふの春を心の雪なれば空に消てもたまらざり覺

「歌日記」の天保三年の終わりから二首目。冬の歌の後ろに位置している。こうした配列からみると、天保三年の詠作ではないかもしれない。

⑪天保六年（一八三五） 正月 日未詳

竹裏聞鶯声 仏御殿御会始

千年のみこもると思ひし呉竹のおくに聞ゆる鶯のこゑ

花春友 同御当座

年々にかはらぬ友と頼めども花は老てぞいろまさりける

寄巖祝

万代も動かぬ御代は亀の上の山の巖ぞためしなりける

已上

会始の歌である。「已上」は『桂園遺稿』の凡例によれば、景樹自身の朱書である。「歌日記」においては異例の注記であるが、この記事の次に、冒頭に歌を掲げた手紙がおかれていたため、「已上」がないと歌が二首連続して境目がわかりにくいし、それら二首の間に脱文があるという疑いを抱かせることになる。

⑫天保十年（一八三九） 月日未詳

月 正行院殿七回忌追悼  
めぐり来て月は雲井にすむ物を隠れ果たる君が影哉

追悼の歌である。正行院殿すなわち応專連枝は、次節の【三二】について記すように、天保四年（一八三三）九月二十一日に江戸で没し、同二十八日に京都の本山にその知らせがもたらされた。

「歌日記」に、正行院一周忌、三回忌の歌はなく、次節【三二】に掲げた逝去後程経ないころの追悼歌二首の次は、この七回忌の歌である。いっぽうの『御日記』には、現在までに調査しえた範囲では、正行院の年忌法要と明記されている記事をまだ見いだせない。一周忌の年にあたる天保五年は六月二十七日から十月二十六日までを欠く。三回忌の天保六年の九月二十八日に、「正卯刻御出門。東山御参詣。申刻還御（後略）」とあるのが、正行院追善の法要のための本廟参詣であつたかもしれないが、それと明示されていない。そして七回忌の天保十年の『御日記』もまた多くの日を欠く。祥月の九月は、日付のない記事一つと九日のみで、九日の次は十月朔日、つづいて十月六日とまばらであつて、中に正行院七回忌の記事は見えない。

⑬天保十二年（一八四一） 十一月 日未詳

仏御殿御硯の蓋の表にしるせし歌。うらに紅葉ちれり。

玉くしげあくる朝熊の山おろしの二見の浦にちらすもみぢ葉  
随応上人遷化後としては珍しく、会始の歌でも追悼歌、賀歌でもない。この歌の次に、次のように画賛が四首つづいているが、仏光寺とかかわるものなのか否か未詳である。

画賛

爰にして見んとや雁もくだるらし折しもはるゝ大空の月

松の陰に松露有

浜松のもとの根ざしやいかならん末の露さへ玉と社なれ

画賛

ふる郷のあれたる庭に咲しより秋とうづらの床夏のはな

青梅の枝

匂ひだにとめてと何に思ひけんかたみになりし梅の一枝

⑭天保十三年(一八四二)正月 日未詳

水辺柳 仏御殿御会始正月十日

ゆきどけのみづのゝ駒も青柳のかげの糸にはつながれにけり

会始の歌である。日付の「十」の次は一字分の空白になっている。このすぐ前は「正月十五日甲子夜当座」の歌、すぐ後は左注に「右は正月十七日也」とある歌である。配列にしたがって推測するならば、十五日または十六日ということになる。例年よりもやや遅い会始であるが、『御日記』を見るかぎりでは特別の理由があったようには思えない。

### 三 仏光寺『御日記』の香川景樹

仏光寺『御日記』文政六年から文政八年まで、文政十年から天保十三年までの香川景樹関係記事を抄出し年月日順に並べる。抄出の基準は前稿〔2〕に記した。【】で括弧して示す番号は、前稿〔1〕〔2〕〔3〕からつづく通し番号である。「歌日記」に対応する記事がある場合は、それを併せて掲げ、無い場合は「なし」とする。前節と同じく、「歌日記」の引用にあたっては私に句読点・濁点を付ける。また、『御日記』の改行はできるかぎり原本にしたがうが、文字の配置や大小はもとのままではない。□は判

読できない文字である。兩日記からの引用の後ろに、必要に応じて記事の内容等につき\*を付して説明を加える。

【二九】

『御日記』文政六年(一八二三)二月十八日

一、知空院様御一周忌<sup>三</sup>付奥女中并医師

法中

御家司

御用人迄

御非時被下。

御次

惣菜被下

同 十九日

一、知空院様御一周忌<sup>三</sup>付東山御廟参。

夫より靈山権阿弥江御成。御供廻り

両門様

御徒士

式人

御輿

六人

御草り

式人

御箱

壹人

御茶弁当

壹人

押

懿姫様并女中

河内

御草り

女中供

壹人

御先膳

環

草り

御賄方

壹人

隼人



知足院宮御三回忌 寄花無常

水の泡の上にかつちる白雪のきゆともいづれ消行世にこそ有けれ

ひける御追悼会あり。 懐旧通題

(一行空白)

寄日述懐 当座

(二行空白)

したがって知足院宮の一周忌の法要が文政六年に催されたとは考  
えられないし、本来は文化十二年、同十三年におかれるべき一周  
忌、三回忌の記事が文政六年に混入したものでない。理屈の上  
では七回忌、十三回忌などの歌が一周忌の歌と誤られ、文政六年  
に混入したという二重の誤りによるものである可能性もあるが、  
知足院宮ではなく知空院の一周忌であった可能性のほうがはるか  
に大きい。

【三〇】

『御日記』文政六年十月二十一日

一、御門主御大切之趣

諸家様方江為御知書状差出候事。

一、二條様江今酉刻御遷化ニ付為御知以使者  
被仰上候事。

同二十二日

一、御門主様昨夜亥刻御遷化ニ付

諸家様方江御披露之事。

「歌日記」文政六年十二月二十四日

十二月廿四日。安住台にて仏小路御門主かくれさせたま

\*『御日記』に記されているのは随応上人遷化であり、追悼会の  
ことは見えない。いっぽうの「歌日記」は追悼会について記すの  
みで遷化そのものにはふれていない。これより前にも遷化のこと  
は見えない。その点で両者は直接には対応していない。「歌日記」  
が月日を欠く場合は、『御日記』の記事と対照することでそれが  
判明するという意味があるが、この場合はすでに「十二月廿四日」  
と明記されている。しかし、遷化と追悼会は密接に関係する事柄  
であり、景樹の側に立って見るなら一連の事柄であったと思われ  
るので、あえてここに掲げる。『御日記』二十一日の「今酉刻御  
遷化」、二十二日の「昨夜亥刻御遷化」は原本のままである。遷  
化の時刻が相違している理由はわからない。また、「歌日記」に  
はこの記事につづいて次のように二首の画賛が置かれている。

不二の賛二幅 就 業平東下

ふじの根のうへにも思立ならし一むら雲の浮島のはら

うへもなき雪のしらべも不二のねにたらずや有なん君が

ことのは

一本見合すべし

門主の追悼会の後に画賛を求められることは、さすがになかった  
のではないかと想像して掲出は省いたが、事実は未詳である。

「歌日記」に「安住台にて」とある安住台は、仏光寺寺中にあ  
って、連枝が住まいとしていた。しかし、文政六年当時の連枝、  
正行院は、文政四年三月に家族とともにすでに江戸下谷の西徳寺

に赴いていた(12)。十一月十四日には連枝の長男の正受院(13)が上洛しており、おそらく安住台に滞在していたであろうが、十二月一日には京都を発つている。十二月二十四日当日、安住台は主不在であった。その安住台で追悼の歌会が催されたのである。安住台でしばしば歌会が催されたことについては前稿(2)の第二節に記した。

なお、『佛光寺辞典』『佛光寺年表』は随応上人の遷化を文政六年十月十八日とする。『御日記』の文政六年十月十八日には、随念上人と嶺君(二条治孝長女近子)の縁談の件、有栖川宮若君(幟仁親王)の元服の件、随応上人不例につき随心院門主より見舞いの件が記されているだけであるが、後年の『御日記』によれば清浄勲院すなわち随応上人の祥月命日の法要は十月十八日に催されている。『佛光寺辞典』『佛光寺年表』が十月十八日遷化とすることと何らかの関係があるかもしれない。

ちなみに、随応上人の一周忌に際しての歌が、藤田維中編『桂園聚葉』に載っている(14)。

仏光寺御門主一周忌御題

今はとて梢はなるゝ紅葉の声もかなしき神無月かな

なつ山に咲残りけるさくら花是も常なき色や見すらん

この二首をふくめて、随応上人の年忌にかかわる歌は「歌日記」に見えない。

【三一】

『御日記』天保四(一八三三)年九月二十八日

一、御連枝正行院殿御所勞之所終御養生

無御叶去ル廿一日曉卯刻御遠行由告来り。

御年五十六才。

同二十九日

一、正行院殿御卒去之旨御披露二相成候事。

「歌日記」天保四年 月日未詳

正行院殿御追悼御題廿首内

曉

長月のありあけのつきぬ名ごりゆゑいとゞねぎめの増る年かな  
夢

ゆめにやとかへす衣のうらにこそ君がみたまもあらはれにけれ

\*「正行院」は随応上人の弟、応専連枝の院号である。【三〇】に記したように、連枝は文政四年三月に江戸下谷の西徳寺に入り、その寺務を執っていた。『御日記』九月二十八日の「告来り」とは、江戸の西徳寺から告げ来った、の意で、正行院遠行の知らせが二十八日に本山に届いたわけである。そして翌二十九日に諸方に報知された。

したがって、追悼歌の詠作は二十九日以降のことになる。【三一】の随応上人の追悼歌は遷化の二ヶ月後であったが、この場合はどうであったのか、よくわからない。

現在、本山仏光寺に、前表紙に『正行院殿御追悼二十首和歌』と直書きされている応専連枝追悼歌集が所蔵されている。詠者は十人、歌数は次のように一人二題各一首ずつ合計二十首である。「歌日記」のいう「正行院殿御追悼御題廿首」はこれに違いない。

時雨	御詠	暁	景樹
落葉	嚴淨	夕	光麗
殘菊	信春	夜	得雄
霜	徳義	山	嚴淨
氷	保教	河	保造
霰	保造	野	保教
雪	光麗	海	政観
水鳥	御詠	燈	徳義
千鳥	信春	煙	得雄
冬月	政観	夢	景樹

「御詠」は随念上人の詠である。そして景樹以外の詠者は、保教を例外としてすべて『御日記』や第一節に言及した点取り詠草に名が見える、仏光寺に仕える僧俗で、明らかに本山または洛中在住か、そう推測される人々である(15)。おそらく京都で、想像をめぐらすなら連枝の住まいであった安住台で、追悼の当座が催されたのではないかと推測される。第七首「雪」から第十二首「夕」までを〔写真2〕として左に掲げる。

〔写真2〕



なお、江戸の菅沼斐雄が越後寺泊の景樹門人柳下清老にあてた十月二日(天保四年)付けの手紙によると、江戸桂園社中の正行院追悼会が十月一日または三日に開かれているが、その出席者として記されている「津田」「朝岡」「兎山」はそれぞれ津田干城、浅岡泰任、兎山紀成と推定される(16)。いずれも景樹門下の歌人として名の残っている人々である。京都の桂園社中の歌人たちによる同様の追悼会が催されたかどうか、不明である。すくなくとも、『御日記』『歌日記』にその記載はない。

【三二】

『御日記』天保六年(一八三五)九月九日

一、御簾中様今朝卯中刻御安産。

若君様御誕生、御両方様益御機嫌克被為

成候ニ付御医師産婆等辰刻退出。

〔参考〕御用部屋記録 天保六年(一八三六)九月九日

一、九月九日

御簾中様御安産御男子御誕生之事

『歌日記』天保六年九月九日

九月九日のあした 仏光寺の御殿にをのこ御子生れさせ  
給ひぬと承りて歓喜に堪ずよみて奉りける。

長月のけふひらけたるきくの花今より千世のつゆやかぞへん

\*随念上人の長男、松若君の誕生にかかわる記事である。「御簾

中様」は随念上人室の嶺君、「若君様」が松若君である。

〈参考〉として掲げたのは、『御日記』に差し挟まれている御用部屋の記録である。『御日記』の料紙には黄紙が用いられている年が多く、天保六年の場合も十二月七日より前は黄紙であるが、閏七月二十五日と八月五日の間の三十五丁は中でも特に黄色が濃くなっている。その第一丁の表中央に、

嶺君様御着帯

御猶子成御七夜

御参 堂御贈答略録

とあり、右に「天保六乙未年従後七月至十月」、左下に「御用部屋」とあって、『御日記』のものではなく、御用部屋の記録がここに綴じ込まれたものらしい。本山にかかわる重要な事柄については、このような記録が『御日記』とは別に作成されていたのではないかと思われるが、この場合はなぜかそれが『御日記』に綴じ込まれているのである。松若誕生の件は、この御用部屋の記録のうち、「御猶子成御七夜」の部にふくまれている。その中の、直接に誕生を記した記事を〈参考〉として掲げた。「御簾中様」が嶺君、「男子」が松若君である。

随念上人室嶺君は、『佛光寺辞典』『佛光寺年表』によれば、従一位左大臣二條治孝の長女で名は近子、文化元年（一八〇四）に生まれ、文政七年に仏光寺に入興、嘉永二年（一八四九）享年四十六歳で逝去した。法名を念心、院号を無量光院という。松若君については、『佛光寺年表』に次のようにある。

真慧 無極尊院

母は無量光院念心尼公。天保六年九月九日生る。幼名は松麿。同年同月二條左大臣齊信の猶子となる。同八年八月十

五日寂。寿三。（17）

「歌日記」の日付を九月九日としたのは、詞書冒頭の「九月九日のあした」によってのことであるが、「九月九日のあした 仏光寺の御殿にをのこ御子生れさせ給ひぬと承りて」とある、この「九月九日のあした」は、男子御誕生が九月九日の朝であったことをいっているのであって、景樹がそれを知った日、「長月の」の歌を詠んだ日が九日であったかどうかは、実はわからない。この歌のすぐ後に置かれている歌の詞書には、「同十二日。長樂寺の紅葉見にまかりて」と、十二日という日付がある。「歌日記」の天保六年は、十月以降は量も少なく配列も乱れているが、正月から九月までは月日の順に配列されている。したがって、「歌日記」の配列によるかぎりでは、十二日より前の詠作ということになる。

ちなみに、「歌日記」天保十二年に次のような歌がある。

松若丸の生れませしを祝ひ参らせてよみ侍ける二首  
春たゞば初ねの子松若草の妻をもとに引むとすらん  
栄ゆべき行末まつの二葉よりかつく千世は算へ初めむ

「松若」が松若君と共通している。また『佛光寺辞典』『佛光寺年表』に幼名「松麿」とあった、その「麿」と「丸」とは通行の文字である。年も異なり、月もこれら二首は十月か十一月のあたりに置かれているし、松若とは他所にいくらかもありそうな名ではあるが、参考のためここに記しておく。

【三三】

『御日記』天保六年（一八三五）九月十五日

一、御七夜御祝儀被為在。

〔参考〕御用部屋記録

一、御七夜<sup>二付</sup>被進物左之通

御使 稲田大藏卿

左府様<sup>江</sup>

門主様<sup>より</sup>

干鯛 一箱

御樽代金 貳百疋

御祝餅<sup>老升三合取</sup>

赤飯 一蓋被進之

右二種者御入魂

(中略)

一、冷泉殿 阿野殿 大善院室 光菌院室<sup>江者奥向</sup>より

奉文を以御祝餅一重ねツ、被遣之。老升三合取也。

一、松波雅楽頭 北小路大藏少輔 隠岐播磨守 藤木因幡介

上臈八十嶋 表裏老女<sup>江</sup>御祝餅一重<sup>老升三合取</sup>被遣候。

一、香川長門介御祝餅<sup>老升取</sup>一重被遣候。御肴相添。

一、比留田権藤太御酒三升献上。御祝餅一重八合取被下候。

一、奥向<sup>江</sup>罷出候もの共<sup>江</sup>者赤飯御祝酒被下候。献上物有之

もの<sup>江</sup>者延紙二束ツ、被下候。

一、御館入十人衆<sup>江</sup>者御祝餅一重ツ、被下候八合取。

一、御家司御用人<sup>江</sup>御祝餅一重ツ、被下候同断。

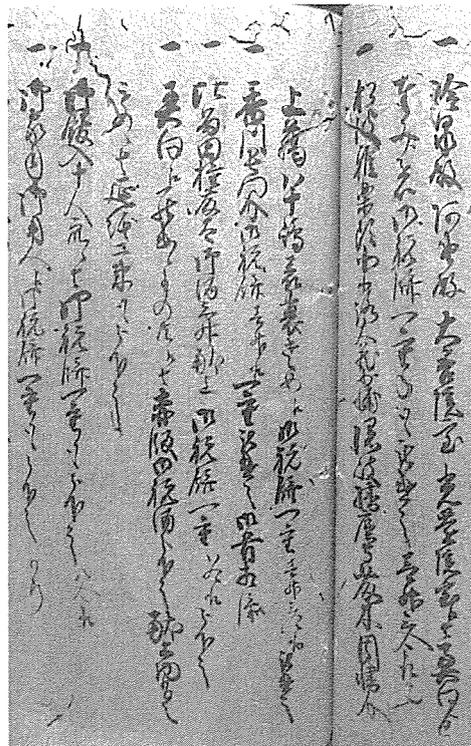
「歌日記」

なし

\*〔参考〕としたのは【三二】と同じく「御用部屋」の記録のう

ち、七夜の内祝いの贈り物を列記した部分の一部である。各条の結びの一字を「候」としたが、「之」のようにも見える。「冷泉殿」以下を左に〔写真3〕として掲げる。日付はないが「七夜」から十五日と推測した。松若君誕生の祝儀は『御日記』本体にこの後も断続して記され、たとえば終わりから二条目の「御館入十人衆」への祝餅については、十八日に「御館入之内十人衆へ御誕生二付御祝餅被下候」とあるが、景樹への祝餅についての記事は見られない。

〔写真3〕



ここに記されている人々の前後の順と贈り物の内容は、仏光寺において景樹がどの程度に格付けされていたのかを窺う手がかりになる。前に記されているほど、また祝餅が大きいほど上位である。詳細は省略するが、注目されるのは、景樹が「御館入」とは別に、それよりも上位に置かれていることであろう。

「御館入」とは、『御日記』の用例をみると、特定の職能や技芸などによって門主の御目見を得て本山への出入りを許されるこ

と、またその人をいうようである。景樹の立場は、和歌によって出入りを許されたはずであるから、その立場は「御館入」と共通していると思われるのであるが、ここでは別に掲げられている。

では具体的にどのような人物が「御館入」を許されたのか、時代はややさかのぼるが次のような記述から推測することができる。文政六年十二月十八日の随扈上人の「尺七日」（四十九日）にかかわる記事である。実をいえば、ここに名のあがっている人物全員が「御館入」であったのかどうか、疑問はある。たとえば三人目の伊藤昌言は、「御用二付御断申上候」とある師の荻野河内守の代理として参殿しただけなのかもしれない。しかし、「御館入面々江御非時被下左之通」としたうえで列記されているのであるから、全員ではないとしても大部分は御館入の面々と解してよいと思う。

一、御尺七日<sup>二付</sup>於宸殿御館入面々<sup>江</sup>御非時被下左之通。

藤堂和泉守様

御代香

井関彦兵衛

御藤中御見舞  
野菜 一折七種

御文庫入

白羽二重 忝足被下 右同人

御医師  
荻野河内守

右同人弟子

伊藤昌言

白井元藏

御付与力

佐和善十郎

辻左近将監

辻日向守

御非時井  
金五百足被下  
御非時被下  
右同断

御非時井  
金百足被下

上雑色  
松尾左兵衛

御非時井  
南鏡心片被下

下雑色  
津田清左衛門

右同断

右同断  
村上平太

御非時井  
金百足被下

画師  
円山主水

右同断

右同断  
岡本司馬

右同断

右同断  
松村要人

御非時井  
金式百足被下

伏見船役人  
斎藤八九郎

右之外御館入町人共御非時被遣分。尤宸殿於北ノ間<sup>二</sup>屏風仕切一所<sup>三</sup>集□。

末尾の□は「置」のようにも見えるが虫喰のためよくわからない。

「画師」の一番目の円山主水は第二節⑧の応震、三番目の松村要人は①⑥の景文、二番目の岡本司馬は岡本豊彦（安永二年・一七七三〜弘化二年・一八四五）である。これらをふくめてここの名の上がっている人々は、同じく御館入ではあっても「御館入町人共」とは別枠である。医師や楽人、画師が与力や船役人とも列記されているが、文人歌人はいない。

景樹が仏光寺に出入りするようになった事情は、景樹自身が「歌日記」文化三年正月九日に記している。随扈上人は、有栖川中務卿の門人であったが、それはあくまでも表向きのこと、実質上は自分が指導していた。もとは伴蒿蹊が月ごとに招かれて歌会が開かれていたのだが、老衰で参殿できなくなった。そこでかわりに自分が指導するようになったのである。実は蒿蹊が出入りしてい

たころからもう何年も、特に重要な齋れの歌は自分が撰歌し添削していたのであるが、たぶんそれが御意になかったのであろう、といった内容である(18)。

しかし、それはあくまでも景樹の認識である。仏光寺側から見ればどうなのかがここでは重要であるが、この頃の『御日記』は、享和二年の元日から三月二十五日まで、文化二年の元日と正月二日、文化四年の元日から二月十四日までが一冊になっており、景樹を招く事情が記されていたかもしれない文化二年から文化三年にかけてのころを欠いている。はじめて景樹が『御日記』に登場するのは、前稿(1)に【一】として掲げた文化四年正月十日の次のような記事である。

一、御歌初<sup>三付</sup> 香川長門介参。於御書院御のし昆布被下。

鐘之間<sup>三前</sup> 御祝酒。夫<sup>より</sup>奥<sup>へ</sup>参。御詩会初之通也。

ここでは景樹は「御館入」とは言われていないし、この後も『御日記』が景樹を「御館入」とすることはない(19)。

景樹は、すくなくともこの【三二】の天保六年九月十五日には「御館入」ではなく、それよりやや上に位置づけられる位置にあった。そのような位置を得たことに、随応随念二代にわたる門主との親しい交流が無関係だったとは思えないが、根本には歌人と医師、楽人、画師との、仏光寺における位置づけの違いがあるのではないかと思われる。この点については、また別途に考えてみたいと思っている。

仏光寺の「御館入」は、仏光寺と寺外のいわゆる文化人たちとをむすびつけ、彼らに交流のきっかけを提供することができるといふ点で注目すべき制度のように思われるが、その実態はまだ明らかではない。「御館入」の医師、楽人、画師もいれば、「家中一統」に名を連ね、来客の取次や諸方への使者の役を勤める「御

館入」も『御日記』には登場する。また「御館入十人衆」もいれば「御館入町人」もいる。結局、ここではこの【三三】の記事が、景樹の仏光寺における格付け、ひいては和歌の位置づけを知る手がかりになりそうだと、いうにとどめておかざるをえない。

【三四】

『御日記』天保七年(一八三六) 正月十日

一、妙門様<sup>江</sup>御成。夫々御廟参。還御之節

出羽介方へ御成。

御供 織部 右近

将監 右衛門

御先廻り 隼人

徳義方<sup>三前</sup> 御当座御催。

景樹参上 常樂寺 玉屋吉兵衛  
西徳寺

「歌日記」天保七年正月 日未詳

松樹遇春 仏御殿御会始御題

去年松君御誕生御室花園と号

十かへりの花園山の小松原咲くべき色のみゆる春かな

鶯馴 同御当座三十題の内

呉竹のかはらぬふしと思へども聞こそあかね鶯のこゑ

寄道祝 同

人の道も仏の道もふたつなき我君が世にひらけつるかな

猿公の讚 同

くれざるやくるゝも知らぬ木実もて朝に何をみつと答ん

燕一つとぶ 同

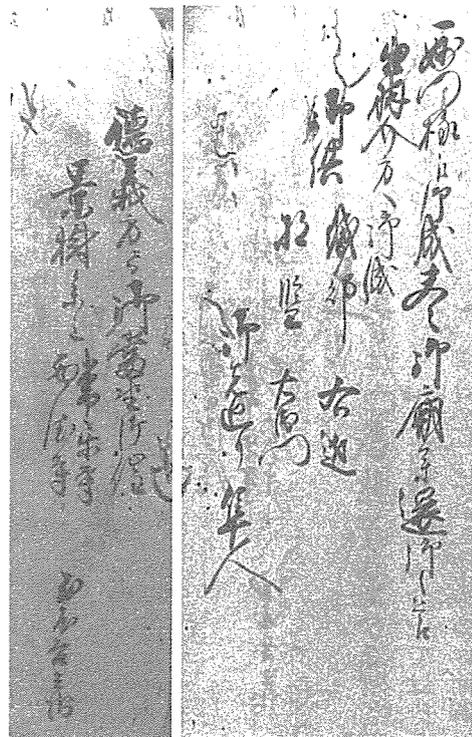
あくがれて妻よぶ燕敷妙の常世をひとり離れ来つらん

\*『御日記』の「妙門様」は妙法院門跡、「出羽介」「徳義」は仏光寺家司の小幡徳義である。「御供」の「織部」は中山織部、「右近」は徳見右近、「将監」は北村将監、「右衛門」は原田右衛門、「御先廻り」の「隼人」は清水隼人で、いずれも仏光寺の家中である。景樹の次に名があがっている「西徳寺」は、同じ天保七年『御日記』の元日に、門主との対面の礼に出席した寺中として六院とそれにつぐ寺格の高林庵の次にあげられ、その次に「常楽寺」があげられている。そのさらに次が「御堂衆」である。ただし、ここではそうした格とはかかわりなく歌人として呼ばれたのであろう。『御日記』の「御当座御催」はそれを示すための注記のように思われる。「常楽寺」は、第一節に掲げた点取り詠草の詠者の一人であり、【三一】の『正行院殿御追悼二十首和歌』の出詠者としても名が見える光麗であることが『御日記』からわかる。「西徳寺」はこの前後の『御日記』に頻繁に登場するところから江戸下谷ではなく京都の西徳寺と推測される。「玉屋吉兵衛」は未詳であるが、文政十一年『御日記』十月九日に、

一、西徳寺下玉屋吉兵衛<sup>三</sup>  
開山上人御影以思召被下候。其文書翰留<sup>二</sup>  
有之候事。

とある玉屋吉兵衛と同一人物なら、西徳寺下の有力檀徒である。西徳寺が当座会の席に呼ばれたのとともに招かれて一座に連なったのであろう。景樹の和歌が京都をふくむ諸国に流布していく、具体的な形の一端がここに表れている。「妙門様」以下を〔写真4〕として左に掲げる。「御先廻り 隼人」までが丁の表、「徳義方<sup>二西</sup>」以下は裏である。

〔写真4〕



「歌日記」は前年誕生の仏御殿の若君を「松君」としている。次の【三五】にも「仏御殿松君」とあるが、正しくは「松若君」である。【三二】【三三】にその一部分を引用した御用部屋の記録「嶺君様御着帯 御猶子成御七夜 御参堂御贈答略録」の中に、次のような勸修寺家への届けの写しがある。

口上覚  
此度当御門主嫡男被致誕生候処如先格直<sup>二</sup>  
二條様御猶子<sup>三</sup>被成御名も松若君与被進候。此段以  
使者御届差出被置候。以上。

九月十五日 仏——御門跡使者  
勸修寺様 稲田大藏卿  
御雑掌中

「松若君」は「松」に敬称の「若君」を添えたもののようにも見えるが、御用部屋記録に勸修寺家への届け書の先例として掲げられている後撰光院（随応上人長男。寛政十一年生、同十二年寂）の場合は「万寿君」、随念上人の場合は「千重君」とあって、「若」は添えられていない。

同じく「歌日記」の「御室花園と号」は未詳である。想像をたくましくすれば将来の門主には「御室」が与えられる、そしてこの松若君の場合はその「御室」の名が「花園」である、ということかもしれないが、「嶺君様御着帯 御猶子成御七夜 御参堂御贈答略録」にも、これより後の『御日記』にも、これにかかわるような記事は見えない。

この【三四】については、『御日記』と「歌日記」との対応に多少の問題がある。『御日記』の徳義方での「御当座」と「歌日記」の「仏御殿御会始」「同当座」とが同一の催しなのかどうか、実は明らかではないのである。

しかし、文化七年当時、仏光寺の和歌の会始は一月十日頃を原則としていたことが、「歌日記」文化七年一月二十一日に次のようにあることよってわかる。

仏光寺のみとのにいつも十日のころまうのぼり、さてはじめ  
ての御つどひもよほさるに、又ことしはおのれむねふたぐや  
まひありてさる御殿わたりの遠きにはえものし侍らねば、さ  
ることも行はせ給はでやみにしを（以下略）

文化三年一月九日にも、【三三】で引用した部分のすぐ前に、「あすなん殿のおほんつどひの日なれば」とあるし、随応上人逝去後の文政・天保のころも、「歌日記」に記されているかぎりでは、文政八年（一八二五）一月十日、文政九年一月六日、文政十

年一月十一日、天保十二年一月十一日、天保十三年一月十日（□は一字分空白）と、文政九年がやや早いものの、だいたいこの原則は生きていくように見える。また、催しの場所は、右の文化七年一月二十一日の傍線部のように、「仏光寺のみとのにいつも十日のころまうのぼり」とあるところを見ると、仏光寺内がふつうだったようであるが、この年は随念上人の妙法院訪問、東山本廟廟参のついでに徳義方で催した当座会を会始の当座にあてると、すくなくとも景樹の側は解したのではないかと推測される。「歌日記」の配列も、前後の歌の題、詞書と日付を列記すると次のようになっており、これらが十日の詠作であることと矛盾しない。

〈前〉立春雪 正月元日臨淵社当座

早春柳

早春雨 同三日同

遠山霞

子日 同四日同

橋霞

鏡餅に海老ののれるかた

藤林紀元肖像讚

〈後〉行路柳 正月十二日当座

松残雪

滝音知春 富田泰州会始

山鶯告春 望南亭会始

落梅 十七日臨時当座

ただし、「鶯馴」以下の四首は『御日記』の徳義方での当座会で詠まれた歌であったとしても、「松樹遇春」についてはそう言えるかどうか判然としない。『御日記』には「徳義方二而御当座御催」と当座について記されているだけであるし、仏光寺歌会始の通常時の出席者、出詠者、式次第は未詳であって、『御日記』

に記述されているような出先での当座で済むものなのかどうか  
からない。景樹の「十かへりの」の歌もふくむ兼題の歌を披露す  
るような会が、別に催されなかったとは断言できない。

【三五】

『御日記』天保九年（一八三八）八月（日付なし。十四日か）

一、無極尊院様御一周忌三行 今十四日御退夜

ヨリ十五日御日中迄御白書院大床之間三行  
御法事御執行。

「歌日記」天保九年八月 日未詳

月 仏御殿松君御一周忌御題

つくぐと月のかげこそ守らるれ玉とあがめし君ならねども

\*『御日記』の「無極尊院様」は【三二二】【三三三】の松若君であ  
る。掲出部分について、翌十五日にかけて法事の際の着席位置  
の図そのほかを載せるが省略する。追悼和歌、景樹には言及がな  
い。

〔付記〕『御日記』をはじめとする本山仏光寺所蔵資料の閲覧につき、

澁谷曉眞門主と御家族に格別のご配慮をいただいた。ここに記  
して深謝し上げる。なお、小稿は平成十九年度科学研究費補

助金基礎研究C（2）による研究成果の一部である。

注（1）彌富濱雄編『桂園遺稿』上・下巻（五車楼 明治四〇年三月・

同八月）

（2）〔1〕『鳥取大学教育地域科学部紀要』第五巻第一号（平成一五年

五月）

〔2〕『地域学論集』（鳥取大学地域学部紀要）第一巻第一号（平成

一六年一月）

〔3〕『地域学論集』（鳥取大学地域学部紀要）第二巻第一号（平成

一七年六月）

以下、〔1〕は前稿〔1〕と略記し、〔2〕〔3〕はそれに準ずる。

（3）各年の『御日記』の伝存状況は次のとおりである。

文政	六年	元日〜大晦日	一冊
	七年	元日〜大晦日	二冊
	八年	元日〜大晦日	一冊
	十年	元日〜大晦日	一冊
	十一年	元日〜大晦日	一冊
	十二年	元日〜大晦日	一冊
天保	元年	元日〜十二月十七日	一冊
	二年	元日〜十二月二十一日	一冊
	三年	元日〜閏十一月二十五日	一冊
	四年	元日〜大晦日	一冊
	五年	元日〜十二月二十九日	一冊
	六年	元日〜十二月二十三日	一冊
	七年	元日〜十二月二十六日	一冊
	八年	元日〜十二月二十六日	一冊
	九年	元日〜十二月二十日	一冊
	十年	元日〜十二月二十八日	一冊
	十一年	元日〜十二月三十日	一冊
	十二年	元日〜十二月二十八日	一冊
	十三年	元日〜大晦日	一冊

文政十年の十一月は朔日の一日分、十二月は二十日から大晦日

（二十九日）の十日分が残っているのみである。

天保年間になると、右の一覧のように、大晦日まで備わっているのは四年と十三年の二ヶ年にすぎない。また、この一覧には表れないが、天保五年は、四月二十六日から六月二十六日までのうち、記事があるのは五月六日、六月五日、二十六日の三日にとどまる。そのほかは日付のみで、天気も記されていない。六月二十七日から十月二十六日までは日付もない。

なお、天保十一年、同十二年をそれぞれ一冊としたが、厳密に言えば、天保十二年の元日から十八日までの十八日間分は、天保十一年の後ろに綴じられている。後年の綴じ誤りによるのではないことは、十八日の記事の次に、

従是新御日記移ル。

と注記され、さらに、天保十二年御日記の第一丁に、

天保十二年丑正月十八日迄者前子年御日記ニ認有之。依而十

九日より此表ニ記之。

とあることによつてわかる。

(4) 寺号を名乗ることは必ずしもその寺の住職であることを意味しない。役目によつて寺外との交渉にたずさわる本山の僧が、肩書として仏光寺中や末寺の寺号を名乗ることもある。恵岳の場合はおそらくそうであった。光麗はどうであったのか、現時点では判然としない。

(5) 児山紀成筆記『東塙亭話』。国文学研究資料館マイクロフィルムによる。

(6) 円雅、恵岳については前稿(1)の第五節に記した。児山紀成と仏光寺との関係の一端は、同じく(1)第四節に記した。菅沼斐雄については、『国書人名辞典』に「備中吉浜の庄屋に生れる。上洛して閑院宮に仕える。また仏光寺の家人であったという。香川景樹と共に江戸へ下り、桂園派の鼓吹に尽力した。」とあるように、仏光寺に仕えていたことがすでに知られている。

(7) 澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)

(8) 私に句読点を付ける。改行は原本にしたがうが、文字の配列や大小はもとのままではない。

(9) 「御館入」については第三節【三三】参照。

(10) 随応上人の遷化については第三節【三〇】参照。『御日記』によれば一周忌には、藤堂和泉守より香奠、随念上人の東山廟参(文政七年十月十八日)、青蓮院門跡より使僧(同十九日)、聖護院宮お見え舞いの使い(二十二日)があった。

(11) 澁谷有教編『佛光寺辞典』(注7)、佛光寺教学資料編纂委員会編『佛光寺年表』(真宗佛光寺派宗務所 平成九年四月)、芝葛盛ほか編『織仁親王行実』(高松宮家 昭和一三年六月)。

(12) 前稿(3)の【二五】参照。

(13) 注(12)に同じ。

(14) 愛媛大学鈴鹿文庫所蔵本「雑別之次」による。

(15) 保教は未詳。飯野保教か。保教は通称孫三郎、飯野厚比の兄である。「桂園入門名簿」(『国学者伝記集成』香川景樹の項)によれば田安家代官で、天保三年二月十五日に入門している。

(16) 拙稿「柳下清老と真宗仏光寺派」(『地域学論集』(鳥取大学地域学部紀要)第三巻第三号 平成一九年三月、本報告書第二章)

(17) 『佛光寺辞典』の「無極尊院真慧」(むごくそんいんしんえ)の項にもほぼ同じ内容が記されている。なお、門主の嫡男が二條家の猶子となるのは仏光寺の通例で特別のことではない。松若君については、次のような願書の写しが、上記の御用部屋の記事にふくまれているが、これとほとんど同じ文面の後撰光院(随応上人長男)誕生のさいの願書が、先例としてこの前に書きつけられている。

口上覚

此度御誕生之御嫡男如先格御猶子ニ被遊御進

可被下候。尤御門主御参可被相催筈ニ候得共御所勞ニ付無扨

以使者被成御願候。宜敷御沙汰被進可被下候。已上。

九月

使者

稲田大藏卿

諸大夫御中

但出羽介兼而十一日参殿之御諸事御入魂<sub>ニ</sub>相成

御名も内々御治定被為<sub>ニ</sub>在候事。

(18) 原文は前稿〔1〕の第三節に引用したが、出入りの事情に直接かわる部分を再度掲げる。冒頭の「此みはらから」が随応上人である。「なね」は『桂園遺稿』のままであるが、「いかにぞや思はるる処」であることをしめす左傍線がほどこされている。

此みはらからは、有栖川中務卿の宮のなねのみこ知足院の宮の御腹にておましくければ、此の道も中務卿のみをしへを受けさせ給へれど、そはおほやげざまにて、道の八十限とひ明らめたまはん事などはさらにあらせたまはねば、いかでとおぼす御ころにはいとあかぬことに嘆かせ給ひて、うちくおのれを召させ給へる也。かねては伴蒿蹊といふ世に名高き道知り人を月ごとに召して、御つどひのむしろをも開かせ給へりし。さるに此の翁この頃いたく老いほれて、まうのぼるべくもあらずなりにたる、そのかはりにやと思しけん、又かの翁物し奉りしほどにも、ことさらにはれくしう世におし出し給はんずるみ歌をば、ひそかなる御使にて己にたゞさせ、よしあし極め明らめきこし給へる事年頃なりければ、己をよしと思ほしてせちにはめさせ給へるにや、知らずかし。

(19) 景樹の前に和歌をもつて仏光寺に出入りしていた伴蒿蹊の招聘の初めが、次のように寛政二年(一七九〇)『御日記』二月十六日に見える。

一、伴蒿蹊、歌道委敷もの、由、御聞及<sub>ニ付</sub>、被召度思召、帯刀応対<sub>ニ</sub>参。

この蒿蹊の場合も、ここでもまたこの後も「御館入」とは言われていない。しかし、『御日記』における「御館入」の初出は、

現時点でわかるかぎりでは寛政五年であるが、仏光寺においていつから用いられるようになった言葉なのか、またいつから存在する制度なのか不明である。したがって、蒿蹊は「御館入」とは言われていなかった、と言っても間違いではないが、そのことどれほどの意味があるのか、まだわからない。

『地域学論集』第四卷第一号 平成一九年六月

# 仏光寺『御日記』の香川景樹

——天保十四年から嘉永四年まで——

田中 仁

## 一 はじめに

真宗仏光寺派本山仏光寺の『御日記』の天保十四年（一八四三）から嘉永四年（一八五一）まで（1）にみえる香川景樹にかかわる記事を抄出し、景樹の「歌日記」（2）と比較対照する。『御日記』に景樹がはじめて登場する文化四年（一八〇七）（3）から天保十三年（一八四二）までは次の拙稿に取り上げた。

〔1〕 仏光寺『御日記』の香川景樹——文化六年まで——

〔2〕 仏光寺『御日記』の香川景樹——文化七年から九年まで、文化十二年から十四年まで——

〔3〕 仏光寺『御日記』の香川景樹——文政元年から五年まで——

〔4〕 仏光寺『御日記』の香川景樹——文政六年から八年まで、文政十年から天保十三年まで——

これら四編（4）の目的は、「歌日記」の「年月日づけ」の検証と景樹伝の新事実の発掘であった。しかし、小稿でとりあげる天保十四年は、周知のとおりその三月二十七日に景樹が没した年である。「歌日記」もこの年の春で終わっている。したがって小稿の場合、目的は後者の景樹伝の新事実の発掘ということになる。

ただし、新事実とはいっても、仏光寺『御日記』という資料の性格もあつて、結果として発掘し得たのは景樹と仏光寺・仏光寺派との関係に関するにとどまる。実のところ前稿四編においても、景樹が仏光寺と仏光寺派寺院また仏光寺派の僧侶、門徒とどうかかわったか、そして桂園派の形成に仏光寺や仏光寺派がどのような役割を果たしたか、という興味に引かれて、掲げた目的に合致しているとはいえない方向へ調査がそれること再々であった。小稿ではいつその傾向が強くなっている。

嘉永四年までとしたのは、現在調査が終わっているのがその年までというだけで、格別の意味はない。小稿は末尾に付記するよう科学研究費補助金によって実施してきた調査結果の報告であり、今年度がその最終年度であるため、調査を終えた分については一とおりの報告しておきたいのである。これより後の分については機会を得て補遺として報告したいと思っている。また、すでに公表済みの前稿〔1〕から〔4〕までと小稿とにつき、景樹関係記事の見落としに気づいたらその際あわせて報告したい。

## 二 仏光寺『御日記』の香川景樹

天保十四年は前記のようにその三月二十七日に景樹の没した年であつて、『御日記』には景樹の死去と葬式にかかわる記事が載っている。しかし、いっぽうの「歌日記」にそれらに直接対応す

る記事はない。この年の「歌日記」は、穂井田家会始の「庭松春久」という題で詠んだ、「春をへてさかゆるにはの松もあれど君こそ千世のあるじなりけれ」の歌につづいて、

去年の冬安雄が初官位まうしける時よめる

位山くだる人のみおほき世にうれしく君はのぼりけるかな

とあるのところで終わり、その次には「辞世」一首が、「正純」によつて書き加えられている。「歌日記」天保十四年の歌はそれらをふくめて七首のみで、そのなかに景樹の病状にかかわるものも仏光寺にかかわるものも見られない。

そこで、ここでは「辞世」の歌を『御日記』の景樹死去の記事と対にして掲げる。ただし、この歌は後に記すように天保十四年の三月はじめ頃に詠まれたものとおぼしく、日にちの上では両者は対応してはいない。なお、【】で括弧して示す番号は前稿からの通し番号である。

【三六】

『御日記』天保十四年（一八四三）三月二十九日

一、香川肥後守一昨廿七日死去二付不取敢今日

為御悔北村将監罷越。

（中略）

一、香川肥後守江為御香奠金五百疋被下候。

右者 御先代より格別之御懇命二付如此也。

『歌日記』天保十四年

辞世

一筋にいのちまつまの春の日はかへりてながきものにざりける  
右一首私に加之置侍り  
正純

\*右に掲出した『御日記』の全文を〔写真1〕として後に掲げる。傍線部「香川肥後守」が景樹である。「歌日記」の末に左のような記録(5)がつけ加えられているが、傍線部のように景樹は死去の前々年、天保十二年（一八四一）十月六日に長門介から肥後守に遷っていた。

徳大寺家々録写

景樹入道前陸奥介景柄男

明和五年四月十日 誕生

享保三年二月廿三日 叙従六位下 三十六

同 任長門介

文化八年十二月廿一日 叙従六位上 四十四

文政二年八月十九日 叙正六位下 五十二

天保十二年六月十四日 中廿年 叙従五位下 七十四

同年十月六日 遷肥後守

同十四年三月三十日 卒 七十六歳

景樹の死去につき、もっとも詳しくその様子を伝えている同時代の資料は、現在知られているかぎりでは「桂園遺聞第一篇」(6)に「消息二十二」として抄録されている穂井田忠友の手紙である。

東塙宗匠危篤の趣：十六日夜半シヤセ為知状到来。直様罷越候て通夜と申様にて廿六日は夜半過より罷越候て通夜。暁方南塾にて両三輩と休息一睡仕候処へ通夜衆に驚かされ御嫡孫夭折の

由。尤宗匠へは密密にて二條川東聞名寺へ送り翌日にも埋葬の積り承り其日は二十七日昼前退出帰宅の処北野松園坊引取掛立寄候て今日未刻過宗匠御終焉の趣且二十九日岡崎へ引越し晦日發葬たるべしとの手続承り何とも無是非次第殘念御同意に奉存候。尚不遠參拜万万可申承候。御病中に「一すぢに命まつまの春の日はかへりて長きものにぞありける」と承候。昨今木屋町へ向出掛ムギヤ：三月二十九日（天保十四年）。赤尾様。穂井田忠友

これに引きつづき、次のような編者の考察がある。

これを見れば木屋町なる別荘にて卒去せらせし事知らる。松園坊名は清根。徳大寺家の記録に

天保十四年三月三十日卒七十一歳

とあれどこは公の届出にてまことは三月二十七日の卒去なり。又葬儀は四月二日に行はれし由由仏光寺の記録に見えたり。

聞名寺過去帳に

光融季韶童女 天保十四年三月二十七日

御嫡孫夭折とあるは是なるべし

私に傍線を付した五行目の「仏光寺の記録」は『御日記』のこともかもしれない。後に引くように、『御日記』天保十四年四月二日に景樹の葬式の記事が見える。ただし、澁谷曉眞門主の直話によれば本山仏光寺には『御日記』のほかにも元治の兵火による焼失を免れた記録が所蔵されているとのことであり、「仏光寺の記録」が『御日記』そのものをさしているかどうか明らかではない。

ともあれここで注意したいのは、景樹の葬儀に際して仏光寺から金五百疋の香奠があったことである。現在のところ『御日記』によつてはじめて知られる事実であるが、重要なのは、この香奠

が景樹の仏光寺における位置を反映していると思われることである。五百疋の香奠がどれほどの待遇なのか、この前後に比較できる事例がないので判然とはしない。しかし、次のように想像すると、その破格ぶりがよくわかる。

はじめに引用した『御日記』の「(中略)」のところ、省略したのは二件の記事である。その一つは、大行寺が昨日近江から帰京したので勸修寺家へ届け出たところ応対できる者が不在なので明日にするよう言われたという件、そしてもう一つは、粟田御殿から四月五日に別殿引移を予定していたが宮中御心喪のため延期するとの書状が届いた、という件で、どちらも景樹の死去とはまったく無関係である。『御日記』の同じ日の記事がどのような順序で記されているか未詳であるが、少なくともこの三月二十九日は、事が生起した順に記されているのではないかと思われる。そう考えれば、景樹の死去にかかわる記事が二つに分けて記されている理由が容易に説明できる。この日まで早いうちに死去の報が届いたので、「不取敢」北村将監を悔やみの使者として送り、その間別件が二つ入るほど慎重に対応を検討し香奠として破格の金五百疋を送ることにした、といった事情が想像される。もしそうであるなら、それは前例のない待遇であつたはずである。

この想像があたっているかどうかは別として、景樹への待遇が出入りの歌人としては異例であつたことは確実である。景樹がそうした待遇をうける理由を説明する文言が「御先代より格別之御懇命」であつて、景樹への五百疋という香奠は、先代の随扈上人、当代の随念上人の二代にわたつて親しく出入りし特別の命を受けてきたことによるところで、これを出入りの歌人一般への香奠の前例にしてはならない、というのが、この文言の意味するところであろう。「格別之御懇命」は次節の【三七】に「格別御懇命之間柄」とあるのと同じ意味であろうが、これについては【三七】で、そしてさらに【四〇】でもふれる。

「不取敢」悔やみのために派遣された北村将監は、本山仏光寺「家中」(7)のうち、門主の身近に仕えて諸家諸寺院への使者、諸家諸寺院からの使者の取次を主な任務とする近習の一人で、この年天保十四年元旦の賀礼の記事では、家中三十九人の十番目に挙げられている。後に景樹の葬式にかかわって名の出る山田木工は景樹の門人であり、染香庵も入門の事実は確認できないが和歌を通じて景樹と交遊があったことは『御日記』その他からわかる。しかし北村将監についてその点は不明である。「歌日記」にも、すくなくとも「北村将監」という形では出てこない。その将監が使者に選ばれたのはなぜであろうか。

本山から諸方へ派遣される種々の使者が、どのようにして選ばれたかくわしいことはわからないが、その日その日に当番が定められており、交渉などはともなわれない単なる使いの場合はどこであつてもその当番が遣わされたのではないか、と思われるふしもある。たとえばこの三月二十九日にも、景樹への香奠の後に記される近火見舞に、

一、今夜子半刻頃両替町竹屋町<sup>上</sup>所出火<sup>二付</sup>

御所々<sup>江</sup>為御機嫌伺御使 将監

添使谷口式部<sup>一</sup>□

関白様

閑院様

九條様  
御裏

のように将監が使者として派遣されている。この日の使者の当番に将監が当たっていたのかもしれない。

ここで、『御日記』と「歌日記」とを比較対照という小稿の主

旨からははずれるが、景樹の「辞世」について付言しておきたい。「一筋にいのちまつまの春の日はかへりてながきものにざりける」の歌は、現在景樹の辞世として知られているけれど、先に引用した「桂園遺聞」の忠友書簡によれば「御病中」に詠んだ歌が結果として辞世となつたらしい。この歌は、景樹の歌集のうち、管見に入つたかぎりでは、藤田維中編『桂園聚葉』雑述懐、丸山辰政編『桂園余材集』雑、仲田頭忠編『桂の落葉』第二編雑、稲村三羽編『桂のしもと』雑に収められている(8)が、これらのうち『桂園聚葉』の詞書は、「天保十四年卯春御病中に吟」となっており、『桂園余材集』には、「題知らず 没故前也」とある。どちらもやはり「辞世」とは明言していない。

この歌が詠まれたときの様子は、次のように『桂のしもと』に引用されている景樹の嗣子景恒の手紙(9)からもう少し詳しくうかがわれる。二行目の「かけちか」は「かげちか」すなわち景周、後の景恒である。

景周の書状の中に

三月のはしめつかたに候哉かけちかかたはらに侍りしとき

一すしに命まつまの春の日はかへりて長き物にそ有ける

斯よみ出たりいかにと申され候のちは歌もさらに無之候。されは此歌を辞世とや申侍らん。

景樹の没後、景恒がその後をついで宗匠となったことを喜ばない人々もあつたことは、『桂園後拾遺集』の跋文に次のようにある(10)ことから容易に想像できる。

此一巻は師の翁のみつから撰て後園拾葉となん名付られたる。そは桂園一枝の後集なれば也。しかはあれと四季恋のみ

にして雑の部いまた撰出給はさりしほとに畏こくも身まかりましぬ。をしともをしと誰かはなげかさらん。この頃師の嗣なる景恒の君此後園拾葉に雑の歌を撰みそへて桂園拾遺と名付物して世にあらはし給へるはいともうれしきわさになむ。されとひそかに思へは師のみ心にたかへるふしもましりぬへくや。この拾葉のみこそはさる類ひならねは師のをしへをたとみしたはん人々よ此巻を準繩として志したらんには歌たるおもむきをもあきらめさらめやも。あなかしこ。

嘉永四とせさつきのはしめの七日 法眼享寿

うつし畢ぬ

こうした状況下にあつては、辞世の歌を聞いたことが景恒に後継者としての重みをつけることになる、といった事情があつたのかもしれない。見方をかえれば、『桂園聚葉』や『桂園余材集』がこれを辞世としていないのは景樹没後の桂園派の事情の反映ではないかとも推測されるが、そのあたりの事情についてはよくわからない。ちなみに、景樹が辞世と意識して詠んだ歌として、『桂園のしもと』雑部に、「鳥辺山ふもとの野へのかり枕結ふそ旅の限り也ける」という歌が見える。この歌はほかに、『桂園聚葉』雑一、『桂園余材集』雑、『桂の落葉 第三編』雑に収められている(11)。これらのうち、『桂園余材集』の詞書は「おなし頃五條あたりに住て重き病にかゝりて」、「桂の落葉 第三編」もこれとほとんど同じく「おなし頃五條わたりにすんて重き病にかゝりて」と、重病のにおりに詠んだとしか伝えないが、『桂園聚葉』は「おなし頃病にふしていまくとおほえければ」、「桂のしもと」は「辞世の心のよし しかし無事也」と、辞世と意識して詠んだ歌としている。

### 三 景樹没後の景樹関係記事

景樹自身は天保十四年三月二十八日に没したが、景樹の名はその後の『御日記』にも見られる。しかしそれらはみな葬儀と法事の記事であり、景樹への追慕や景樹が本山に遺した文化的な遺産、などといった類のものによつてのことではないように見える。少し言葉を変えて繰りかえすと、景樹への言及は儀礼や行事の枠の中に限られており、景樹その人やその業績を思い起こしてのことではないように見える。ところが、七回忌の記事を見ると、必ずしもそうは言い切れないのではないかとも思われてくるのであるが、ともあれ【三七】として葬式の記事、次に【三八】【三九】【四〇】としてそれぞれ一周忌、三回忌、七回忌の記事を掲げる。景樹の没後は「歌日記」そのものがないので、これらと比較対照すべき「歌日記」の記事はないが、いちいちその旨を注記することは省略する。

【三七】

『御日記』天保十四年(一八四三) 四月二日

一、香川肥後守今日酉刻本葬式相宮候。然<sub>ル</sub>所

御先代<sub>より</sub>御師範「其上」格別御懇命之御間柄

ニ付<sub>ニ</sub>為御代香染香庵。<sub>素絹五條</sub>着<sub>用</sub>。供廻り

御紋付管提灯式人 侍<sub>上下</sub>式人 沓 長柄

自分紋付管提灯壺人 合羽籠一荷

但し出棺前焼香於寺門焼香両度勤「之」。

前以山田木工<sub>より</sub>塾頭鈴鹿筑後守へ及内意候事。

\*右の全文を「写真2」として末尾に掲げる。二行目の「其上」、

六行目の「之」はいちおうこう読んだが疑問が残るので「」で括っておく。

景樹の葬儀が四月二日に営まれたことがこの記事によってわかる。二行目の「御先代」は随応上人、「御先代より御師範〔其上〕」格別御懇命之御間柄二付」とは、染香庵を素絹五條差異着用で代香に遣わすことは異例であり先例としてはならないことをいっているであろう。前節の【三六】に香奠五百疋について、「御先代より格別之御懇命ニ付如此也」とあったのと同じである。ただし、その場合と同じくこれも比較の対象とすべき事例が見いだせない。師範」とは何なのか、「宗匠」と同じ意味なのかどうか、詳しいことはわからないが、この点については【四〇】にもう少し記す。また、「格別之御懇命」の意味もよくわからない。たんに歌人として親しく出入りしていた、ということなら、「御先代より御師範」だけで間に合うようにも思われる。これについても【四〇】に記す。

「染香庵」は『御日記』によれば京都の西徳寺の隠居である。それを示す例を一つあげるなら、天保十四年正月二十二日に、

一、今日 御召之法中御門下ハ江州城州

廿六日 撰河泉和播伊勢伊賀也。

右<sup>二付</sup>昨夜迄之着帳之法中  
并席順左之通

内陣衆

江州川並村

福応寺

左脇内陣衆

御寺内西徳寺隠居

同北町屋村

蓮光寺

洛陽

染香庵 常楽寺

撰州勝間村

光福寺

同西村

光用寺

江州草津駅

養専寺

御寺内

西徳寺

(以下略)

とある。

前稿〔4〕の第一節で紹介した景樹点点取詠草の詠者の一人として、「花王満」すなわち随念上人、「光麗」すなわち常楽寺光麗とともに名の出ていた厳浄は、〔4〕の段階では伝未詳であったが、その厳浄が実はこの染香庵であった。後に第四節の〔二〕に引く『御日記』弘化元年（一八四四）三月九日の正行院応専連枝十三回忌の追悼歌のなかに、「惜まれてよに散花を見るなへにほふは君か御かけ成けり」という歌があり、その詠者名に「染香庵釈厳浄」とあることによってそれがわかる。

染香庵は『御日記』に見るかぎりでは、内仏報恩講や門主家の法事など本山の内仏の用を勤めており〔12〕、寺外の葬儀に派遣されたという事例は現在までのところほかに見いだせていない。しかし、この景樹の葬儀の場合、役寺である西徳寺という格式の比較的高い寺の、現住ではなく隠居という立場であることが景樹の仏光寺における位置づけに対応していること、また厳浄自身が和歌を通じて景樹と親交があったことにより、ほかには考えられない人選であったと思われる。

七行目の「山田木工」は本山に仕える近習の一人である。天保十四年元旦の賀礼の記事に名前を列挙されている家中三十九人のうち、北村将監につづく十一番目に位置している。『御日記』では「奎」と表記される場合もある。前記の応専連枝十三回忌追悼歌のうち「桜はな咲くつけてもおもふらんきみかかさしとなりし

昔を」の詠者名に、「山田木工源保造」とあるのによれば、名を「保造」といった。保造は厳浄ほど頻繁ではないが、本山仏光寺所蔵の景樹点点取詠草<sup>(13)</sup>の詠者として登場する。景樹の門人で、「桂園入門名簿」<sup>(14)</sup>の天保三年正月十三日に、「京 山田木工 保造」とある。また、『桂園秘稿』に収められている「景樹大人点 社中点取卷之中(晩年高足競点取)」、同「景樹歌会詠草」の「三月九日当座」、「天保六年正月九日会始和歌於円山左阿弥興行」などに「保造」という名が見える。

木工が焼香の回数につき故景樹方に申し入れするための使者に選ばれたのは、景樹の門人であった縁によるところであろう。「出棺前焼香」は仏光寺派では二回であること、仏光寺派の作法によつて焼香することを前もって知らせておいたのである。香川家の菩提寺で景樹の葬式が行われた聞名寺は時宗の寺である。現代の時宗の法事の焼香は三回が普通のようなのであるが、天保十四年のころの聞名寺における「出棺前焼香」の回数はどうだったのか。二回ではなかったことは右の記事から想像されるが、では何回だったのか、今私には分からない。

同じく七行目の「鈴鹿筑後守」はもとのままである。景樹門人の鈴鹿氏でこの時期の塾頭といえれば鈴鹿連胤のほか考えられないが、『公卿補任』、『国学者伝記集成』などによると連胤が「筑後守」を称したことはない。「筑後」はおそらく「筑前」の誤りである。『国書人名辞典』<sup>(15)</sup>の記述を摘記すると、連胤は寛政七年(一七九五)生、明治四年(一八七一)没、実は同三年没。享年七十六。本姓中臣・卜部、名は連胤、筑前守を称した。号誠齋・尚聚舎。代々、吉田神社社司。漢学を松岡雄淵に、国学を山田以文に、和歌を香川景樹に学んだ。文化元年(一八〇四)神祇権少祐、天保四年(一八三三)権少副。同七年、家職を子の長存に譲り、『神社聚録』編纂に志し、明治三年に完成させた。安政二年(一八五五)吉田神社正禰宜、同六年同社権預となった。龜

卜の行事のためたびたび卜部に改姓した。勤王の志厚く、公卿・桂園派歌人のほか平田篤胤・屋代弘賢・伴信友らと交遊した。

なお、連胤は「連胤」「鈴鹿氏」として「歌日記」に登場する(文政八年三月三日、天保元年春、天保九年九月、天保十二年夏)が、山田木工・保造、染香庵・厳浄とも「歌日記」に見えない。「西徳寺」は八回出ておりそのうち二回は京都西徳寺、一回は江戸西徳寺である。五回が人を指しているが、そのうち二回は「西徳寺義肇師」とあり、たんに「西徳寺」とあるその他三回も享和三年、文化五年、同六年の用例であるところから、厳浄ではなく義肇をさすと考えられる。

### 【三八】

『御日記』弘化元年(一八四四)三月二十六日

一、香川故肥後守一周忌<sup>三行</sup>為御香奠

金式百疋 御詠出<sup>等</sup>被遊被遣之候事。

通題

御使 山田木工

懷旧非一

\*景樹一周忌の記事である。山田木工については【三七】に記した。景樹の門人であったが、使者として香奠百疋と「懷旧非一」の追悼歌を届ける使者に立ったのがそのことによるのかどうか、この日はほかに使者が派遣されたとの記事もなく未詳である。

仏光寺や仏光寺派の人々の歌がどの程度載っているかいないのか不明であるが、「懷旧非一」の追悼歌を一冊にまとめた歌集があったらしく、『大日本歌書綜覧』<sup>(16)</sup>「慶弔集の部」の「乙、追悼、追遠集」の中に、「景樹一周忌追悼和歌」として次のような記載がある。

景樹一周忌追悼歌 写一冊

天保十五年三月廿八日懷旧非一といふ題にて、徳大寺実堅卿以下人々がよめる悼歌を収む。

こうした勸進とは別に追善会が催され、そこでも「懷旧非一」の題で追悼歌が詠まれた。そのおりの熊谷直好の歌が『浦のしほ貝』『雑の歌』の部に収められている(17)。

又一周り丸山の寮にて、懷旧非一

思ひ出づる事はおほ原をしほ山をしとかなしといはぬ日ぞなき

また、八田知紀『しのぶ草 第二編上巻』雑歌に収められている次の歌(18)も、詞書には「懷旧のこゝろを」とあるが、歌意からみて同じ題で詠まれたのではないかと推測される。

師のうしの一週忌の追善会を東山なるなにがしの楼にて物せられし時懷旧のこゝろを

天の下いづこにゆかばきかざらん悲しききみが昔がたりを

一日だにわすれぬ君が上なればしのぶともなき昔なりけり

【三九】

『御日記』弘化二年(一八四五)三月二十七日

一、香川故肥後守三回忌三付為御香奠金貳百足被下。

\*景樹三回忌の記事である。この三回忌について、八田知紀『しのぶ草 二編』に次のようにある。「同じ所」は【三八】に引いた一周忌追悼歌詞書の「東山なるなにがしの楼」をさしている。

又三周忌のまとるに同じ所につどひて寄花懷旧の心を

さくら散る春の山辺にまとるしてしばし昔をわすれける哉

【四〇】

『御日記』嘉永二年(一八四九)三月二十七日

一、清浄勲院様 御兩代御師範 功德藏院様

香川故肥後守 景樹

右者御勸章御手遠波等之御相談も致し

有之候旁今日者七回忌正当三付於

御内仏上巻染香庵江読経被

仰付候事。

\*七回忌の記事である。全文を「写真3」として末に掲げる。「清浄勲院様」は随応上人、「功德藏院様」は随念上人をさす。「兩代御師範」の「師範」は【三七】と同じく和歌の師範であろうが、そこでも記したように詳しいことはわからない。随応・随念兩上人のうち随応上人について、公には有栖川宮の門人であり、景樹が召されていたのは「うちく」(「歌日記」文化三年正月九日)のことであったことは前稿(1)に記した。「師範」とはその「うちく」の師であることをいう語なのか、それとも有栖川宮への

入門は日常とは別次元の儀礼であり、日常においては景樹が正式の師匠とみなされていたのか、それとも「師範」にはこのどちらでもないような意味があるのか、今のところまったくわからない。ともあれそれとは別に、「御勸章御手永遠波等之御相談」もあつたという。これは注目すべき記述である。仏光寺派における「御勸章」(「こかんしょう」)については、『佛光寺辞典』(19)に次のようにある。

宗祖親鸞聖人大遠忌(だいおんき)、歴代門主の年忌法要、その他の重要法要、或は伝燈奉告会や慶讃法要などの機会に、門主より一般門末に対して、文章を以て真宗の教義を平易に書き表して、与えられるものを御勸章という。同様のもので、一段軽い意味のものを御消息といっている。我が派では、これらの御勸章を集めて、木版として何度か発刊されている。(中略)二十三代随応上人の「十八條御書」及び「念心尼公御書」も開版された。

また、同じく『佛光寺辞典』の随応上人の項、随念上人の項に、勸章についてそれぞれ次のようにある。

〈随応上人の項〉

在職は三十六年であつた。この間天明八年越前惣坊中、惣門徒中への最初の御勸章下付。その後、惣坊主中或は各末寺講中へ度々御勸章を述作下付された。

〈随念上人の項〉

学頭であつた信暁の補佐の下に学事方面で大きい業績があつた。多くの末寺、講、惣門徒中へ数々の御勸章を述作して下付されている。

【三六】の「格別之御懇命」、【三七】の「格別御懇命之御問柄」とは、この御勸章への景樹の関与を含んで言われているのかもしれない。特に【三七】の場合、前述のようにこれが、「御先代より御師範」という和歌にかかわる文言とは別途に言われているところから見ると、その可能性はいつそう大きい。先に、景樹への言及は儀礼や行事の枠の中に限られており景樹その人やその業績を思い起こしてのことではないように見える、しかし七回忌の記事を見るとそれも言い切れないのではないかと記したが、追慕はともかく、景樹が和歌のみではなく御勸章の述作にもかかわっていたということが、どのような形でか没後も伝えられていたのである。

したがって前稿(4)の第一節に、「景樹が本山の寺務にかかわらなかつたことは確か」だ、と記したのは誤りであつた(20)。また、本山仏光寺における景樹の位置について考察するにあつたの、同じく前稿(4)の【三三】に記したような問題の立て方は修正しなければならない。【三三】で、本山に出入りする医師や楽人、画師が「御館入」とされているのに対して景樹はそれよりもやや上に格付けされているらしいことをふまえ、根本には歌人と医師、楽人、画師との仏光寺における位置づけの違いがある、と記したのであるが、しかしこの七回忌の記事で判明したように御勸章の述作にまでかかわっていた以上、景樹を単なる歌人と規定することはできないからである。

これと関連して、教義を説いた文章という点では勸章と共通している「一枚起請」についての景樹の言を引いておきたい(21)。この言は「御勸章御手永遠波等之御相談」という経験と無縁ではないであろう。一行目の「クラブレハ」の濁点はずのまま、三行目の「大和歌云々」とは『古今集』仮名序の「やまと歌は人の心を種として、万の言の葉とぞ成れりける」をさしている。

法然上人ハ歌人故歌ハ上手ナレトモ外ノ智識ノ歌トクラブレハカ、ハリタル所アリ。サレト一枚起請ノ唐土我朝云々トアル語勢ハ此大和歌云々トイヘルシラヘニヒトシクサハヤカ成事ヒルヒナシ。夫ヲイカニト思フニ遷化間近成テ教ヲノコシ玉ヘト頻リニコハレ且御自身ニモ千歳ノ後ニモト一向一心ニ誠ヲ尽シテ彼延タル語調ニテイサ、カモカ、ハル事ナケレハカクサハヤカニ成タル也。此マコトヲシラネハ此シラヘコ、ニイタラス。

なお、門人の歌集にみえる景樹七回忌の歌に次のような例がある。

三月廿七日師七回春懐旧

幾千度君がむかしをくり返しやなぎの糸もはるたけにけり

同じ時当座春氷

此春は昔の影もこひしきに池のこほりのとけずもあるかな

同じく暮春

いかにせん長きかたみとながめこし春の日数も暮果にけり

(熊谷直好『浦のしほ貝 拾遺』雑上)(22)

#### 四 仏光寺『御日記』の香川景恒

景樹の没後、桂園派と仏光寺・仏光寺派の関係はどのようにな

つていったのであろうか。「歌日記」の年月日付けはもちろんのこと、景樹にかかわる新事実の発掘とも直接結びつくものではないが、景樹没後の桂園派の動向もまた景樹伝の一つの要素ではある。

そこで、『御日記』の景恒関係記事を抄出しておきたい。景恒は景樹の嗣子であり、景樹没後の桂園を引き継いだ。その際、第二節の【三六】について記したように多少の紛糾があったようであるが、結局熊谷直好を後見として景恒が塾を運営することになったという(23)。その景恒が仏光寺や仏光寺派の僧侶・門徒とどうかわったのかを知ることは、景樹没後の桂園派と仏光寺・仏光寺派との関係を考察するための重要な手がかりになると思う。

(一)

『御日記』天保十四年(一八四三)六月二十七日

一、香川式部阿部雅樂助辻能登守例之通

暑中為御尋椎茸被下候。

\*「式部」は景恒の通称である。「阿部雅樂助」の阿部(安陪・安倍)氏、「辻能登守」の辻氏は宮廷樂所の樂人である。仏光寺に出入りしており、『御日記』にしばしば登場する。前稿(4)の【三三】に引いた文政六年十二月十八日の「御館入面々」の中にも、辻左近將監、辻日向守の名がある。

「例之通」とあるが、これより前に暑中見舞いとしても別の理由でも、景恒に椎茸を下されたという記事はない。天保十四年には【三六】のようにその三月二十七日に景樹が没しているの、従来景樹あてであった暑中見舞いを、その没後は嗣子の景恒に送った、という意味であろう。ただし、椎茸を景樹に送ったという

記事も、『御日記』にもまた「歌日記」にも見られない。

〔二〕

『御日記』弘化元年（一八四四）三月九日

一、故正行院殿来年十三回忌正当之处

清浄勲院様御法事ニ差支候ニ付唯信寺より

申登し和歌御勲進之儀も願来候故則今日

左之通御差下しニ相成候。

目錄中奉書四ツ折

故正行院殿追悼

寄花懷旧

御詠

ともに見し人そ殊いよくなつかしき

年ふる花のさくにつけては

ふたゝひは枝にかへらぬ花なるを

愚にしのふ今日にも有かな 小幡出羽介藤原徳義

ありし世に今もうつらす句ふ哉

君かこと葉の花の名残は 小幡大和介藤原徳常

殊更にそのむかしとそしのはるれ

つれなく花の散につけても 稲田求馬源政脩

いにしへの春をしのふの山さくら

散もちらぬもおもかけにして 吉川主税大江信春

桜はな咲くつけてもおもふらん

きみかかさしとなりし昔を

山田木工源保造

桜はなあたに散ぬる春雨の

ふることをのみおもひける哉

得能薮越智通香

惜まれてよに散花を見るなへに

にほふは君か御かけ成けり

染香庵釈嚴浄

十とせ余り三とせの春の古を

しのふ折しも散桜かな

常楽寺法橋光麗

世に有て君かめてたる庭桜

さかりかひなく花も思はむ

清祐寺釈得雄

君をおもひなみたさへにもとゝまらぬ

そてにかさねて散桜かな

香川式部平景周

\* 「故正行院殿」すなわち応專連枝の十三回忌の記事である。応專連枝は天保四年（一八三三）九月二十八日に五十四歳で示寂、その十三回忌の年がこの弘化元年の翌年弘化二年（一八四五）であった。「清浄勲院様」は随応上人である。『御日記』によれば文政六年（一八二三）十月二十一日、五十歳で遷化、弘化二年はその二十三回忌の年である<sup>24</sup>。清浄勲院二十三回忌は、『御日記』によれば、弘化二年九月十三日から五昼夜にわたり執行された。「清浄勲院様御法事」とはこの法事のことであろう。一方の応專連枝の十三回忌についてはこの追悼和歌の勲進のほかには『御日記』に見えない。

「唯信寺」は、この頃の『御日記』にたとえば、

一、江戸下谷御堂院代唯信寺より左之通申来ル。

(天保十四年三月二日)

一、江戸唯信寺より内藤紀伊守殿寺社役正在家

法談一件三付御目錄被下候御礼状差登候事。

(弘化四年七月二十五日)

のようにしばしば登場する寺である。「江戸下谷御堂」は京都の西徳寺とは別の江戸の西徳寺、「院代」は住職の代理をいう。弘化三年十一月十一日には「仏光寺御門跡触頭下谷西徳寺無住二付院代唯信寺」とある。江戸にあり、西徳寺の住職代理を務めた寺であった。応專連枝は文政四年(一八二二)三月の江戸下向以来西徳寺を本拠としてその寺務をとっていた<sup>(25)</sup>。そのため院代の唯信寺が追悼歌勸進を願い出たのであろう。なお、現在の東京に仏光寺派唯信寺はなく、また本山仏光寺所蔵の西徳寺編『浄土真宗仏光寺派本末寺名帳』(明治三年)にも江戸時代末作成とおぼしい本末帳にもこの唯信寺の名はない。

追悼歌八首目の詠者「染香庵釈嚴浄」は前節【三七】に引いた「御寺内西徳寺隠居 染香庵」である。前稿【4】で「嚴浄」を伝未詳としたが、庵号染香庵、西徳寺の隠居であったことがこれらの記事によって判明した。ここに詠者としてあがっている人々のうち、前稿【4】【三一】の応專連枝逝去の記事に関連して掲げた「正行院殿御追悼二十首和歌」の詠者たちと、小幡徳義(徳義)、吉川主税(信春)、山田木工(保造)、染香庵嚴浄(嚴浄)、常楽寺光麗(光麗)、清祐寺得雄(得雄)の六人が重なっている。また、約半数は随念上人時代の景樹判の詠草に出ている人々で、二十三点のうち小幡徳義は七点に詠者として名が見える。以下、吉川主税(信春)は十八、山田木工(保造)六、染香庵嚴浄十九、常楽寺光麗二十一である。これらはいずれも、随念上人周辺の、

景樹を宗匠とする小歌壇の中核にいた人々であり、景樹の晩年からこの弘化元年の頃には、そこに新たに小幡徳常、稲田政脩、得能部(道香)などが加わり、景樹の後継者である景恒を宗匠として活動していたように見えるがはたしてどうであったのか。景恒点の仏光寺関係者の詠草は現在のところ見いだされていない。

〔四〕

『御日記』弘化元年六月十日

一、安倍雅楽助辻能登守香川式部へ政所茶

薄霞式袋ツ、暑中御尋として被下「之」。御家司

壺名之書面相添。

(中略)

一、香川式部暑中御尋として被下物御礼参

殿。且暑中御機嫌伺。清水雅楽承候事。

\*景恒の仏光寺・仏光寺派における位置を考えるうえで、注目すべきは(中略)の前の「安倍雅楽助」云々の記事である。景恒と安倍雅楽助、辻能登守が列記されている点は(一)の天保十四年(一八四三)六月二十七日の場合と同じである。ところが(一)では安倍雅楽助(阿部雅楽助)・辻能登守の前に掲げられていた景恒の名がここでは二人の後に置かれている。下され物の数も(一)の椎茸の場合は景恒三十、安倍雅楽助・辻能登守二十と差がつけられていたが、ここでは三人とも「政所茶薄霞」二袋で差がない。

『御日記』において格に違いのある人々の姓名が一括して列記されるときは、格の高い者ほど前に置かれるのが原則であったらしい。この原則がどこまで厳密なものであるのか、『御日記』全部について検証したわけではないが、確かめ得たかぎりは守られ

ている。そうであるなら、景樹逝去から三ヶ月後の頃は二人の上に位置していた景恒が、一周忌もすぎたこのときは二人の下か、すくなくとも同等の位置に降下していた、ということを示しているのではないかと思われる。

この推測があたっているかどうかの検討は今後の課題としたいが、かりにあたっているとしたら、問題は景恒の位置の降下が仏光寺における和歌の位置の降下の現れなのか、それとも景樹と景恒の年齢や力量の、いわば個人的な差なのか、ということである。なお、「清水雅楽承候事」とは、参殿したものの随念上人には対面しなかったことを意味するが、上人はこのころ勤行にも不参続きで翌弘化二年一月には薨去している。すでに病臥がちだったのではないかと推測され、景恒が上人に対面していないことは必ずしも直ちに景恒の位置の低下を示すものではない。

〔五〕

『御日記』弘化二年（一八四五）正月二十二日

一、香川式部同断<sup>三行</sup> 御機嫌伺参  
殿之事。

\*「同断」とは、この項の前に、「一、冷泉様御使平清水大内藏御門主様御違例御大切御見舞被仰進候事」とあるのを承けており、「御門主様」すなわち随念上人の重篤をいう。随念上人はこの翌日正月二十三日に享年四十一歳で遷化した。若年から景樹に親しんでいた（前稿〔1〕第三節）随念上人の遷化は、景恒にとって仏光寺との関係に重要な蹉跌を生じさせる出来事であったと推測される。

〔六〕

『御日記』弘化三年（一八四六）閏五月十九日

- |         |         |         |
|---------|---------|---------|
| 一、松尾左兵衛 | 一、荻野勝之助 | 一、六門定番  |
| 一、香川式部  | 一、津田安二  | 一、三浦鉄治郎 |
| 一、三口定番  | 一、齋藤口治郎 | 一、栗津因幡守 |
|         |         | 同 左京大進  |
| 一、辻左近将監 | 一、勢多因幡  | 一、戒光寺   |
|         | 名代      |         |
| 一、泉涌寺   | 一、高橋兵庫頭 | 一、牧式部少輔 |
| 一、吉田伊豆守 | 一、吉田甲斐守 |         |

\*右は、「今初更四條道場出火、夫より東南へ焼失」云々（『御日記』弘化三年閏五月十九日）とある火災の際に見舞のため本山に参殿した人々の一部で、その中の一人が景恒であった。この火災については、『日本災異志』（26）火災之部、弘化三年閏五月十九日に次のようにある。

京都火（池魚録）

閏五月十九日、戌刻四條寺町道場ヨリ失火、延焼シテ四條  
ハ西へ六丁高倉ニ及ヒ、北ハ錦天神ニ及ヒ、南ハ仏光寺ニ  
及ヒ、南北三丁、東西六丁焼失、翌二十日巳刻ニ至リテ鎮  
火（池魚録）

この火災は、仏光寺にとって本尊・宝物を院家の光藪院等が御堂衆・西徳寺等を従えて守護し「川東常楽寺」（27）まで運び出したほどの重大事であって、『御日記』にも出火から鎮火までの状況や人々の慌ただしい動きが詳しく記されている。

〔七〕

『御日記』嘉永三年（一八五〇）三月十一日

一、香川式部此度初官位陸奥介蒙

勅許候<sup>二科</sup>為御祝金式百疋被下候事。

但文通者大和介民部兩人外「出」候事。

\*『地下家伝』『国学者伝記集成』によれば、景恒は嘉永三年二月二十一日に従六位下に叙せられ、同日陸奥介に任ぜられている。この『御日記』の記事より二十日前のことである。

但し書きの「大和介」は、仏光寺家中で家司の小幡徳常である。

「民部」は同じく仏光寺家中の小島民部、前名吉川主税すなわち「二」にみえる景樹門人の信春で、この頃は家司または家司に次ぐ格式の用人であったと思われる。『御日記』をみると、二人の上に徳常の父の小幡徳義があり、下には稲田政観の嗣子稲田内蔵がいたが、この頃の本山の渉外は主に徳常・民部が担っていた。

「文通者」云々の但書きは、「この件に関する景恒への文通は門主直々ではなく大和介と民部とが行った」という意味ともとれ、仏光寺と景恒との関係を知るうえで重要なことなのではないかと思ふのであるが、「」でくくった「出」が判読に疑問が残ることもあつてよくわからない。景恒と仏光寺・仏光寺派とがどのような関係にあつたのか、その説明は今後の課題である。

## 五 むすびにかえて

景樹の没後の桂園派と仏光寺・仏光寺派の関係をさぐる手がかりとして、『御日記』の景恒関係記事を抄出した。注目しなければならぬと思うのは、景恒が和歌にかかわって登場する例が現時点では「二」以外には見いだせないということである。もしも

景樹の後継者として本山に出入りしていたのなら、和歌会始に招かれていたと想像されるし、随時開かれる歌会の宗匠としても招かれていたとも想像されるのであるが、しかしそのような記事はない。また、前記のように景恒点の詠草もまだ見いだされていない。

実はこれは『御日記』の和歌会始や歌会の記事に景恒が登場しないということではなく、和歌会始や歌会の記事自体がみられないのであるが、しかし、だからといって景恒が景樹の後継者として仏光寺に出入りしていなかったわけではないということにはならない。景恒が景樹の後を承けて和歌師範として遇されたことを疑わせる次のような記事も、『御日記』にみえるのである。弘化四年（一八四七）三月二十三日の記事で、「功德藏院様」は随念上人である。この年は弘化二年遷化の随念上人の三回忌の年で、その法事は本山において三月十六日から二十三日まで七昼夜にわたって執行され、二十三日から追悼和歌の詠進がはじまっている。

一、功德藏院様三回御忌御追悼和歌

題 残春

小幡出羽介

世の中はかくそはかなき花も散

はるも終にのこる月かけ 徳義

盛あれはちるとは花をしりながら 吉川主税

かへらぬ春のしのはるゝ哉 信春

かすますは有明月のゆくへをも 得能 蒨

とめてなくさむ春そとも見ん 道香

なけきつゝくらせはいつか山ふきの 清水将曹

花もあはれにうつろひにけり 正就

辻村秀齋

ちり行し花の跡なる梢をは

はるかにてらす有明の月

秀齋

常楽寺

行春ををしむにもあらて悲しきは

かくれし君を慕ふなりけり

光麗

玉屋吉兵衛(28)

つらからぬむかしの春にかへれとて

やよひのはてに物をこそ思へ

光赫

### 右今日奉詠進之分

ここに景恒の名はないし、この後三月末まで断続して記される詠進歌の詠者の中にも景恒はいない。

しかし、注意しておかなければならないことは、これによつてただちに景恒が和歌師範として遇されていなかったとは断言できないことである。詠進したが何らかの事情で『御日記』に書き留められなかったのかもしれない。『御日記』は門主の動静や本山の主要な寺務・法務を記し留めておく日誌である、という基本的な性格は繙読しえた範囲内では一貫しているが、「門主の動静、本山の寺務・法務」として何をどの程度まで詳しく取り上げるのかは、その時その時の筆者、編者に任せられているようではある。しかし、概して言えば、和歌に関してどの筆者、編者も程度の差はあれ必ずしも好意的ではなかったように思われる。前稿(1)の第一節でふれた嵐山遊覧はこの点を確認するうえで有用な事例ではないかと思う。

この催しは、熊谷直好『花の跡』を読むと、きわめて盛大なものであったようにみえる。随応上人みずからまさしく先頭に立つて、弟の応専連枝(正行院)や小幡徳義、聖徳寺円雅、常楽寺恵

岳などの本山の歌詠みたちをともない、そこへ景樹、直好、さらに「景樹かをしへ子の中にもことなる歌よみ」である松村紀光・吉川信興も加わって、まる一日を費やし合計百三十首の歌が詠まれた、華やかで大がかりな催しであった。ところが、『御日記』にこの嵐山遊覧の記事は見えない。この催しがあったのは文化六年(一八〇九)四月十日のことと推測される(29)が、その日の『御日記』は普通の日と変わりなく「一、御出仕」ではじまる。そして三丁にわたつて記事がつづくが、そのような催しがあった形跡はどこにもない(30)。

実はこの催しは、『花の跡』から受ける印象ほどには華やかでも大がかりでもなかったようである。そもそもこれは次のような経緯で実現したことであつた(31)。

仏光寺の君岡崎なる本光寺に入らせ給ひて例の御遊ひのついではるかに嵐山のけしきを思ひやらせ給ひて藤も盛ならん郭公も啼らんいさはよりかなたにと思ひ立なんはいかになどの給ふ。折ふし日もかたふきぬ

正行院

あしひきの山に入日の影もよし麓のあそひ思ひたゝなんと催したゝすにこよひは此寺に明させ給ひて暁はやうかしこにてまさんことには定りぬ。

(中略)

景樹まゐると見そなはして 御詠。

つゝかなく君きませりと思ふより心やすらに成にける哉  
けふの御遊は五年六とせの前よりおほしたゝせられて景樹を  
いさなひ給ひて遠く遊ひ給はんの御心なれはたひくゝ催させ  
給ひしかと病かちにてえもまゐり侍らさりしをはからすその  
ことのけふしもなりとけたればかくもよませ給へるになん。

景樹との遠出、遊覧は随応上人にとつて五、六年来の宿望だったとはいえ、この嵐山行自体は前夜「御遊ひのついでに」思い立たれたものだったのである。もちろん仏光寺の公式の行事として催されたものでもないし、たとえば前稿〔2〕に【一四】として掲げた文化十三年（一八一六）閏八月二十六日の清水山遊覧のような、いわば寺務として公認された「御忍」のようなものでもない。随応上人の個人的な思いによる、本山一般の価値観からすればおそらくは好ましくはなぬ逸脱であったのではないかと思われる。同行の僧俗も、仏光寺奥に仕える女性と想像されるが伝未詳の葦野以外は、景樹周辺の、和歌によって結ばれた人々である。こうした種類の事柄は、和歌の側から見るといかに盛大ではあっても『御日記』には記載されないことは、この遊覧より前にも後にも多数ある。

そこには明らかに『御日記』の筆者の価値観が働いている。『御日記』の筆者について、詳しいことはまだ分からないが、三月二十五日の記事で終わっている享和二年（一八〇二）の『御日記』の末に、「相模介殿御日記此所迄御付置被成候而此末不相知候事」とあり、同じように正月二日、正月十四日で終わっている文化二年（一八〇五）、同四年『御日記』にもこれとほとんど同文の識語があるところから、相模介すなわち家司の小幡徳清が重要な役割を果たしていることは想像できる。しかし、この識語を記したのが誰なのかも、相模介が記した「御日記」とは現に伝わっている享和二年なら享和二年の『御日記』そのものなのかどうかもわからない〔32〕。また、弘化四年『御日記』の表紙は中央に大きく「御日記」、左下に「御用部屋」と書かれており、前稿〔4〕の【三一】にも出ている「御用部屋」が『御日記』の作成に深く関わっていることを示しているが、その「御用部屋」の実態も不明である。初期の『御日記』には巻頭に一年分の記事のうち重要な項目の目録が付けられていることが多いが、その目録に日記本

文にない情報がふくまれている場合もしばしばあって、日記本文自体が何らかの記録を取捨選択したものであり、目録も日記本文のみによって作成されたのではなく、日記本文が依拠した原記録も参照されたのではないかと思われる。したがって、たとえば嵐山遊覧の場合、記録はあっても日記本文には採用されなかった可能性もあるし、好ましくはなぬ逸脱として扱われ、仏光寺の記録として書き留められること自体、はじめからなかったのかもしれない。

和歌会始や随時の歌会の記事も同様で、景樹・景恒や桂園派研究においては興味深いことではあるけれど、本山の寺務・法務からみればさほどの意味はないことには違いない。したがってその時の『御日記』の作成にかかわった人々の判断により、『御日記』に書き留められないこともしばしばであったと思われる。桂園派と仏光寺・仏光寺派との関係を考えるにあたっては、『御日記』のこうした特徴につねに注意しなければならない。

〔付記〕『御日記』をはじめとする本山仏光寺所蔵資料の閲覧につき、澁谷曉眞門主と御家族に格別のご配慮をいただいた。ここに記して深謝申し上げる。なお、小稿は平成十九年度科学研究費補助金基礎研究C（2）による研究成果の一部である。

注（1）この間の『御日記』の伝存状況は次のとおりである。

天保十四年	元日〜十二月二十九日	一冊
弘化 元年	元日〜十二月三十日	二冊
弘化 二年	元日〜十二月二十九日	二冊
弘化 三年	元日〜十二月二十九日	二冊
弘化 四年	元日〜十二月二十九日	二冊
嘉永 元年	元日〜十二月二十九日	二冊
嘉永 二年	元日〜十二月三十日	二冊

嘉永 三年 元日十二月三十日 二冊

嘉永 四年 元日十二月二十九日 二冊

(2) 彌富濱雄編『桂園遺稿』上巻、下巻(五車楼 明治四〇年三月、同八月)。引用にあたって句読点、濁点を付ける。

(3) 現存する『御日記』は天明八年(一七八八)からはじまり、「歌日記」は寛政十二年(二八〇〇)十二月二十二日の立春からはじまっているが、『御日記』に景樹がはじめて登場するのは、文化四年(一八〇七)正月十日の、

一、御歌初<sup>二付</sup> 香川長門介参。於書院御のし昆布被下。鐘之間<sup>二前</sup> 御祝酒。夫より奥へ参。御詩会初之通也。

である。この和歌会始のことが「歌日記」には次のように出ている。

十日。仏光寺御殿御会始にてまうのぼる。御兼題

春風解氷といふことを

打解てけさ吹く風の心をば池のこほりぞまづは知るらん

同じく御当座。 野若菜

(一行空白)

名所松

住のえの岸は岡ともなりぬれど松の色こそ変らざりけれ

(4) [1]『鳥取大学教育地域科学部紀要』第五巻第一号(平成一五年五月)

[2]『地域学論集』(鳥取大学地域学部紀要)第一巻第一号(平成一六年十一月)

[3]『地域学論集』(鳥取大学地域学部紀要)第二巻第一号(平成一七年六月)

[4]『地域学論集』(鳥取大学地域学部紀要)第四巻第一号(平成一九年六月)

以下、[1]は前稿[1]と略記し、[2][3][4]はそれに準ずる。

(5)「享保三年二月廿三日」の「享保」はもとのままである。「享和」の誤りであろう。これとほぼ同文の『地下家伝』では「享和」となっている(正宗敦夫編 自治日報社 昭和四三年一月)。

(6) 井上通泰編『桂園叢書 第二集』(全国書房 明治二九年一月)

(7) 本山仏光寺に仕える人々は、僧侶の「法中」、俗人の「家中」の二つに分けられる。弘化元年(一八四四)、鷹司政通第三子次君の仏光寺入興に際して御用掛を勤めた鷹司家諸大夫高橋兵庫頭に差し出した法中、家中の名簿(『御日記』弘化元年十二月八日)

によれば、法中には上から院家、准院家があり、家中には上から家司、用人、近習席、中奥席、中居席、青士、小頭がある。しかし、『御日記』によれば、准院家の下に御堂衆、常仕があるし、

近習・中奥・中居をまとめて「近習」と呼んでいると思われる用例もある。また、青士の中にふくまれている中尾、桜井、中村、姉崎の四氏はそれぞれ中尾河内、桜井甲斐、中村遠江、姉崎長門の名で「御譜代職」「四職」として別に立てられるのが普通である。名簿での扱いは、これら四家が青士格であることを表しているのかもしれない。これとは別に、澁谷曉眞編『湯川信敬翁口述 佛光寺の由緒沿革に就て』再々版・現代かなづかい版(本山佛光寺 平成一三年一〇月)「八 寺務の変遷」には、「従来の本山役人の職名はおおむね左の如きものであります」として、次のようにある。

坊官……大小を帯び頭を剃らず、鈍色を着し、平日は十徳等を着す。そうして法橋や法眼に勅任せられたものであります。

家司……家老、これも大和介とか隠岐守等に任官になって、位階は大抵従六位の下より正六位の下であります。

用人……これには任官叙位等ありません。  
近習……御側役

小取次

青士……無役

中番 等

本山仏光寺家中の組織についてはまだわからないところが多い。

- (8) これらのほかに、景樹点「延享五十首点取」(青山霞村編『桂園秘稿』博省堂 昭和五年三月)の末尾に置かれている「嘉永三年戊正月」の景恒詠の後に、「待期(カ) 景樹」として、「(初句空白)いのちまつまの春の日はかへりて長きものにぞ有ける」と書きつけられている。

- (9) 愛媛大学付属図書館鹿文庫所蔵『桂のしもと』による。引用にあたり句点を加えた。なお、景周は後に景恒と改名した。現在普通には改名後の景恒が用いられているため、小稿でも景恒とする。

- (10) 愛媛大学付属図書館鹿文庫所蔵『桂園後拾遺集』による。引用にあたり句点を加えた。

- (11) 『桂園聚葉』は第三句「草枕」、第四句「結ふやたひの」、『桂園余材集』『桂の落葉 第三編』はともに第三句「草まくら」とする。

- (12) 「内仏」は、『佛光寺辞典』によれば、「寺院の庫裡で、住職が毎日礼拝する為に安置する仏壇のことで、内寺仏堂の意」。本山の内仏は門主家の仏堂である。

- (13) 随念上人と本山仏光寺の法中・家中が出詠し景樹が判をした点取詠草が本山仏光寺に所蔵されている。これについては前稿(4)に記した。景樹点の点取詠草は前稿(4)の段階では二十点であったがその後三点見いだされ、現在までに二十三点確認されている。そのうち厳浄は十九点、保造は六点に出ている。

- (14) 大川茂雄・南茂樹著『国学者伝記集成』(大日本図書 明治三十七年八月)

- (15) 市古貞次ほか編『国書人名辞典』第二卷(岩波書店 一九九五

年五月)

- (16) 福井久蔵著『大日本歌書綜覧』(不二書房 大正一五年八月)。昭和七年版による。

- (17) 『新編国歌大観』編集委員会監修『新編国歌大観 CD-ROM 版<2>』(角川書店 二〇〇三年六月)による。

- (18) 『しのぶ草』の引用は、佐々木信綱編、続日本歌学全書第十卷『桂園門下集』(博文館 明治三二年九月)による。

- (19) 澁谷有教編『佛光寺辞典』(本山佛光寺 昭和五九年三月)

- (20) ただし、本山の寺務・法務へのかかわりといっても随念上人・随念上人の御勸章述作を介しての間接的なものであるから、それにつづく、「上人(随念上人)の遷化後、景樹と仏光寺との関係が絶えることも当然あり得る」という部分は誤りではないと思う。

- (21) 『古今和歌集正義講稿』物名四二七。竹岡正夫編『古今和歌集正義講稿』(勉誠社 昭和五九年九月)による。引用にあたって句点を加える。

- (22) 佐々木信綱編『桂園門下集』(続日本歌学全書第十卷 博文館 明治三二年九月)による。

- (23) 景樹の逝去前後の事情と景恒の桂園継承については、山本嘉将『香川景樹論』(育英書院 昭和一七年二月)第八章第二節「景樹物故前後の事情」、黒岩一郎『香川景樹の研究』(文教書院 昭和三二年一〇月)第九章第一節三「桂園歌風の継承」、兼清正徳『熊谷直好伝―封建末期の一人の生涯―』(熊谷直好伝刊行会 昭和四〇年五月)一一「景樹の逝去」などに述べられている。

- (24) 応専連枝の示寂については前稿(4)【三一】、随念上人は同【三〇】に記した。

- (25) 応専連枝の江戸下向と期待された役目については前稿(3)の【二六】に記した。

- (26) 小鹿島果編『日本災異志』(明治二六年一月)。引用は昭和四八年一月版(思文閣)による。

(27) これによると常楽寺は「川東」すなわち賀茂川の東にあつたこととなる。拙稿「柏原正寿尼と常楽寺恵岳―桂園派形成の一事例―」(『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第四卷第二号 平成一九年十一月)の第五節において常楽寺の位置を「大行寺、西徳寺と同様に、本山の御門の内ではなく、本山に近い、本山の所有地」と推定したが、川東では「本山に近い」とは言えない。訂正しなければならぬ。

(28) ちなみにいえば、この「玉屋吉兵衛」は、前稿〔4〕【三三】の『御日記』天保七年(一八三六)正月十日に名のみえる玉屋吉兵衛と同一人物であろう。また、前稿〔4〕では見落としていたが、「桂園入門名簿」天保六年十月五日に、「須佐美古兵衛 光赫 号玉屋」と出ている。「古兵衛」は「吉兵衛」の誤りと思われる。

(29) 兼清正徳『熊谷直好伝―封建末期の一歌人の生涯―』(前出〔注24〕、拙稿「鳥取県立博物館所蔵香川景樹の手紙一通―『花の跡』の成立時期について―」(『鳥取大学教育学部研究報告(人文・社会科学)』第四七卷第一号一九九六年八月)

(30) 前日の九日は、

九日 晴

一、御不参

一、上京<sup>三行</sup>献上 御団扇老本 長崎御堂門下

御銀鏡老ツ 福砂屋大助

これで全部であり、この日なら『花の跡』の遊覧もあつたかもしれないと思える。

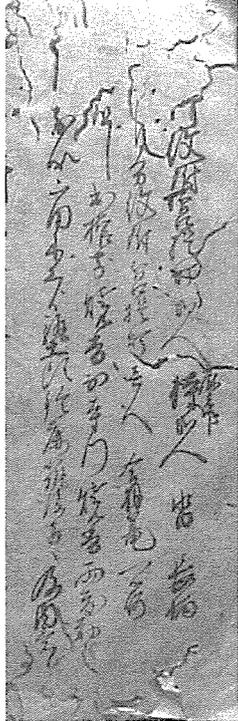
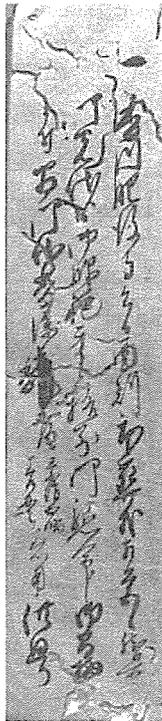
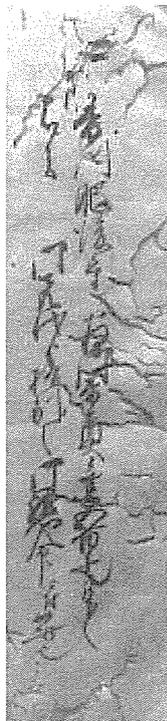
(31) 聖徳寺円雅書写本による。外題『嵐山御詠歌』、東山聖徳寺所蔵。

(32) 前稿〔1〕参照。

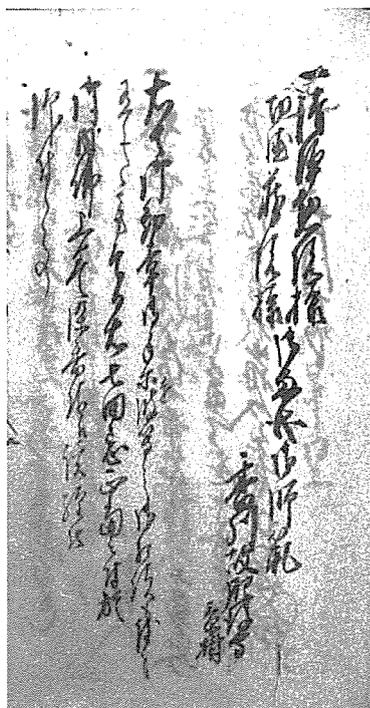
〔写真1〕『御日記』天保十四年三月二十九日



〔写真2〕『御日記』天保十四年四月二日



〔写真3〕『御日記』嘉永二年三月二十七日



『地域学論集』第四卷第三号 平成二〇年三月

